

地域文化の再発見 —大学・博物館の視点から

日高真吾編



地域文化の再発見 —大学・博物館の視点から

日高真吾編

表紙写真
提供・飯沼賢司

地域文化の再発見

—大学・博物館の視点から

主催者挨拶

共催者挨拶

趣旨解説

基調講演

国東半島における世界農業遺産の取り組みと大学

第1部 災害の経験から学ぶ博物館活動

水俣病の経験を伝える博物館活動——手作り資料館のすすめ

民間所在の被災資料から地域文化を読み解く

刺繍の復興から探る帰郷への道——小林村の再建過程における博物館の役割

胡

家瑜

76 60 45

平井京之介
葉山 茂

飯沼 賢司

16

吉田 壽司
佐藤 瑠威
日高 真吾

11 9 7

討論

話者 平井京之介／葉山茂／胡家瑜
「一デイナーター 曰高真吾

第2部 大学・博物館から地域文化を考える

地域の文化財保護における大学の役割——複合的な文化財情報の構築と活用のために

歴史文化資料保全ネットワーク事業から考える地域文化研究

渡辺智恵美
天野 真志

博物館による歴史学と地方史の再発見——国立台湾歴史博物館を事例として 謝 仕淵

渡辺智恵美／天野真志／謝仕淵

討論

「一デイナーター 川村清志

第3部 市民とともに考える地域文化

『市民参加型』で地域を学ぶ——その背景、課題、可能性——

加藤 謙一

多世代協業を通した地域文化の発見と継承——特別展『工芸継承』の活動から 小谷 竜介

小谷 竜介

地域文化の再発見、地域社会の再構築——台湾の市民が主体となる文化活動の方法と意義

黄 貞燕

討論

「一デイナーター 武知邦博

174

158

146 132

124

116 104 97

90

第4部 大学教育から地域文化を見つめなおす

竹田市宮城・城原地区における学生による民俗調査と祭礼参加
学生とともにに行う旧真田山陸軍墓地和泉砂岩製墓石の強化処理
台湾の大学における民俗学教育と民俗調査の現状

討論
コーディネーター 話者 段上達雄／伊達仁美／林承緯
政岡伸洋

段上 達雄
伊達 仁美
林 承緯

209 197 188 180

主催者挨拶

吉田 憲司（国立民族学博物館館長）

おはようございます。朝早くから、それも大雨の中、国際フォーラム「地域文化の再発見—大學・博物館の視点から」にお集まり頂きまして、ありがとうございます。今日は台湾からも胡家瑜先生、黄貞燕先生など八名の方にお越し頂いており、大変光栄に思っております。

国立民族学博物館、通称「みんぱく」と申しておりますが、みんぱくの館長の吉田憲司でございます。みんぱくは一九七七年に、大阪万博の跡地に開館いたしました。博物館機能をもつ文化人類学・民族学分野の大学共同利用機関として設置されたものです。ちょうど今年で四〇周年を迎えます。この四〇年間に世界各地で収集してまいりました標本資料が、現在三四万五千点を数えるようになり、二〇世紀後半以降に築かれた民族学関連のコレクションとしては世界最大のものになりました。またみんぱくは、施設の規模の上でも世界最大の民族学博物館です。

みんなくは大学共同利用機関ですので、国内外の大学の研究者の皆さんと、さまざまな形での共同研究プロジェクトを進めております。今回のシンポジウムは、みんぱくの研究事業というだけではなく、みんぱくが所属しております人間文化研究機構のプロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の一環としての性格ももつております。同時に、み



んぱくが国立台北芸術大学と結んでおりまます学術協力協定に基づく研究集会としても位置づけられます。それで今日は八名の台湾の皆さんにもお越し頂いているわけです。さらに台湾文化部、そして、会場を提供して頂いている別府大学との共催事業でもあります。別府大学の佐藤学長をはじめ、今日ご出席頂いております皆様、そしてこのフォーラムの実現にご尽力頂きました関係者の皆様にこの場を借りてお礼申し上げたいと思います。

現在、世界では様々な側面でグローバル化が進むなか、地域の伝統文化が大きな変容、あるいは危機に直面するような状況が生まれております。災害によつてもそういう状況が引き起こされます。その一方で、地域の文化をあらためて見直して、創造的にその文化を継承していくこうという動きも各所でみられるようになつてきています。そういう文化の再発見、創造的継承の重要な拠点となつてゐるのが、一つが地域に根ざした教育活動を展開している大学、もう一つが地域の文化遺産の保存庫となつてきた博物館です。地域の人びとが自らの住む地域の文化に誇りをもつことで、はじめてその地域の抱える課題に挑戦する勇気も生まれ、ひいては地域の活性化にもつながるのだと思ひます。

今回のフォーラムでは大分をはじめ、水俣、東北など日本各地、そして台湾における大学、あるいは博物館を活用した様々な先進的な試みをそれぞれのご経験に基づいてご報告頂けるときいております。今回のフォーラムを通じまして、地域文化の再発見、創造的継承に向けて、大学、博物館、あるいは広く人文科学が貢献できる指針が明らかになることを期待しております。最後までどうぞよろしくお願ひいたします。

共催者挨拶

佐藤 瑞威（別府大学学長）

おはようございます。別府大学の佐藤でございます。国立民族学博物館主催の国際フォーラム「地域文化の再発見」が開催されるにあたりまして、共催校であります別府大学を代表いたしまして、一言ご挨拶申し上げます。

別府大学は一九四六年に創立された別府女学院を母体とし、一九五四年に別府大学となりました。そのときに大学の近くに上代文化博物館を設けました。つまり創立当初から、博物館を有する大学であるわけです。その後、一九六三年に史学科を開設し、学芸員養成施設となります。そして一九七七年には、大学創立三〇周年を記念して、新たに附属博物館を大学構内に設けました。また、一九九九年には歴史文化総合研究センターという名称の博物館を大学の近くに作りました。その他にも香りの博物館を作つております。別府大学にとって博物館という施設は、切つても切れないと存在であり、創立当初から、文化財の保護と研究を大学の主要なテーマとしてきております。国立民族学博物館との関係では、二〇年くらい前に当時館長であつた石毛直道先生を公開講座



の講師としてお呼びして、食文化についての話をして頂いたこともあります。

また、一九九九年には台湾の中国文化大学と姉妹校の提携をいたしまして、他のいくつかの学校とも姉妹校の関係を作つてきました。その点では、台湾との関係も長い歴史をもつてきております。そういう別府大学において、このような大きな国際フォーラムが、「地域文化の再発見」というテーマで、国際的な視点から日本全国のさまざまな研究者が一堂に会して二日間にわたりておこなわれるということは、大変意義深いことだと思つております。残念ながら台風がやつてくるあいにくの天気ではありますが、そのなかでも活発な議論が展開されることによつて、私たちの大学の人間あるいは地域の人びとにとつても大きな知的な機会となることを願つて、私の挨拶とさせていただきます。

趣旨解説

日高 真吾（国立民族学博物館准教授）

皆さん、おはようございます。今日は大雨の中、会場までお越し頂きましてありがとうございます。実は八月に、こちらに打ち合わせに参りましたときには、台風五号が来ていました、本番もまたこのように台風が来ているということで、自分の日ごろの行いが悪いのかと反省をしているところです。

それでは、このフォーラムの趣旨について簡単に説明させて頂きます。

昨今の社会のグローバル化や災害からの復興における地域社会の変貌は、地域で連綿と築かれてきた文化の破壊を生み出し、新旧の住民の間に様々な摩擦をひきおこす事態をまねいています。一方これらの問題の解決策として、地域住民と大学や博物館などの研究者が協同して地域文化を再発見し、保存や活用を実践する活動が試みられるようになってきました。これらの方針は新たな地域文化を創成し、豊かな地域社会を育てていく可能性をもつているものとして、注目されています。



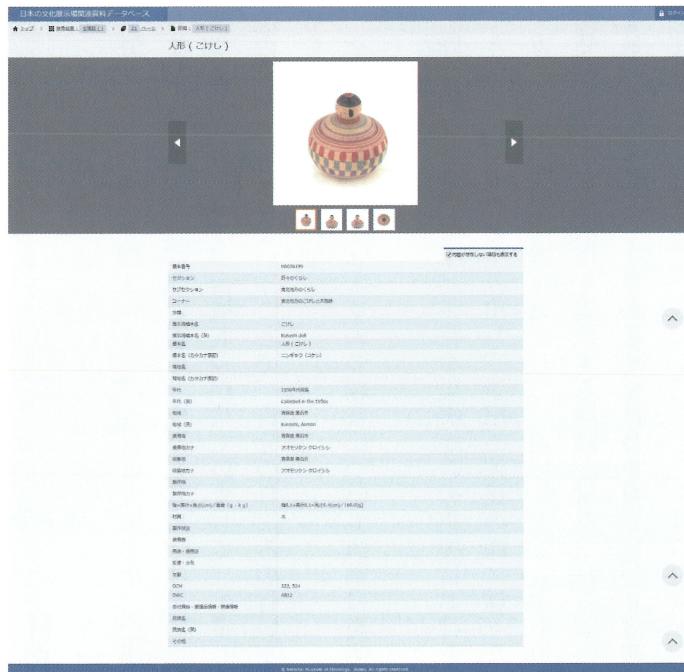


図 1 資料の詳細情報のデータ面

現在、国立民族学博物館（以下、みんぱく）では、フォーラム型情報ミュージアムという研究プロジェクトを開催しています。このプロジェクトは、国内外の研究機関や大学博物館と研究対

可能性について明らかにしていきたいと考えています。これから
の発表に先立ちまして、現在私たちの研究グループでおこな
っている地域文化の再発見に関する研究活動の事例を一つ紹介
したいと思います。

そこでこのフォーラムでは、大学、博物館の視点から、①災害からの地域文化の学び、②知の拠点施設が地域文化に果たす役割、③地域文化と市民をつなぐ、

象となつてゐる地域社会が連携しながら、みんぱくおよび、連携機関が所蔵する多様な文化資源について、国際共同研究を推進するものです。このプロジェクトの一つとして、私達の研究グループは日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクトをすすめております。このプロジェクトはみんぱくの常設展示の一つである、日本の文化展示場で展示している資料の詳細情報（図1）と関連番組を有機的に結びつけることで、より詳細な情報をデータベース上で公開していくことをを目指してます。また、日本の文化展示場に関連する書籍等についても調査し、それらを参考文献リストとして公開し、大学院生や大学生をはじめ、一般の来館者の皆様も、民族学あるいは民俗学を学ぶ上で有意義な情報が得られるシステムを作りあげることを到達目標の一つとしています。現在、まだ制作途中ですが、簡単にそのデータベースについてご紹介しておきます。

こちらがトップ画面（図2）で、フリーワード検索をはじめとした機能が盛り込まれています。次に文化庁が提示してい民俗資料分類を参考にした民俗資料分類項目による検索（図3）、展示を構成するセクションからの検索（図4）ができるようになっています。さらに、このデータベースでは英訳作業も進め、日本語ページとほぼ同等の内容の英語ページも作成することになつており、国際的な視点も意識しています。このデータベースは二〇一七年度の公開を目指して作業をすすめているところです。

地域文化というのは、多面的にみるとさまざまな人間文化の側面というものを教えてくれるもので、このデータベースではできるだけ展示場の資料に複数の分類項目をもたせることで、多面的な観点から検索でき、日本という地域文化を再発見できるきっかけとなることを意識して



図2 データベースのトップページ画面



図3 民俗資料分類からの検索ページ



図4 展示セクションからの検索ページ

います。

今回のフォーラムでは地域文化の再発見をキーワードにこれからさまざまな研究活動の成果が発表されます。これらの発表から、本日ご参加頂いた皆様が日本の生活文化についてより関心をもつきつかけとなることを、そしてこれからの民俗学や民具学の研究を志す若手の研究者の一助となることを期待しております。

最後にこの国際フォーラムを開催するにあたり、共催頂きました台湾文化部、台北藝術大学、そして、会場の提供をはじめ、実現に向けて全面的にご協力頂きました別府大学のみな様に感謝したいと思います。どうもありがとうございました。

基調講演 国東半島における

世界農業遺産の取り組みと大学

飯沼 賢司（別府大学教授）

私の発表タイトルは「国東半島における世界農業遺産の取り組みと大学」ということです。この三〇年にわたって国東半島をフィールドにして、いろいろな村落にかかる調査をやってきました。この間に学生達とともに取り組んできたのが、それと、世界農業遺産、あるいはその前に国の重要文化的景観の選定にどうかかわったのか。その過程と大学のかかわり、あるいは、どういう活動をしてきたのかというような話をこれからしていきたいと思います。

まず、会場の方々、もちろん研究者の方々はこんなことを整理する必要はないのかもしれません。が、学生達もおりますので、まず入口からお話をいたします。

世界農業遺産といふものはどういうものなのか。Globally Important Agricultural Heritage Systems、GIATHSといいますが、これが世界農業遺産の略です。要するに最後のシステム



いうところが、この世界農業遺産と世界遺産とが違うところです。

農業に関わるさまざまな要素、生物多様性や伝統文化をふくめた、循環しているシステムを評価する、それが世界農業遺産です。それから、これはいつどのようにできあがつたかというと、国連の食糧農業機構、FAO^{（ファオ）}といいますが、本部はイタリアにあります。そこが推進してきました「緑の革命」というものが、増産を重視し、環境を破壊し、結果農業生産を低下させてしまつたという農業革命の失敗の反省に、この制度がうまれてきた背景があります。

二〇〇二年から開始され、このFAOが国連大学の推薦をうけて、世界農業遺産会議によつて認定を行う制度で、五つの基準によつて選ばれます。その五つの基準は、食糧生産と生計の関係が一つ、二番目に生物多様性と生態系の機能、これが十分に維持されているか、そして知識システム及び適応技術、そういうものに対する技術の評価、四番目が文化的価値および体系とその社会組織に対する評価。そして五番目に優れた景観、土地及び水資源の管理の特徴がどうなつているかです。これらを条件に、ジアスサイトとして認定するという制度です。

世界農業遺産がどういう経緯をたどったのかというと、二〇〇二年に国連食糧農業機構が、次世代に継承すべき伝統的な農耕や文化習俗における多様性の保全を目的に設立したもの、これが世界農業遺産で、非常に歴史の浅い制度になります。できあがつてからまだ一五年です。世界遺産に言葉が非常に似通っていますが、人類が共有するべき、顕著で、普遍的な価値をもつ物件で、移動不可能な不動産やそれに准ずるもののが対象になつていて、この制度では、Heritage Systems とあるように、農業のシステムの価値を評価するところに価値があるという

ことであります。二〇一七年の八月現在で、世界一七カ国、三八地域がジアスサイトに認定されていて、日本では二〇一一年に佐渡地域、能登の二カ所。二〇一三年に静岡の掛川地域、阿蘇、国東半島の三カ所が加わりました。二〇一五年に長良川、和歌山県のみなべ、高千穂地域の三カ所が選定されています。現在、日本では八カ所がこのジアスサイトとして認定されています。中国が一一カ所認定されていきますので、世界で一番目に多い認定地域ということになります。

先ほどいいました、「緑の革命」の反省とはどういうことかということですが、食糧機構は生産性を高める農業ということを目指して、灌漑農業や工業製品の投入、多額の資本を投入しました。その結果、どんどん生産はあがつていったのですが、小農に不利だと、貧富の差が拡大するなど二極化をまねくような事態が進んでいきました。これが一九五〇年代の終わりから六〇年、七〇年代の状況です。

この緑の革命は一般に食糧の著しい増加には成功し、飢餓を救っていくということはあったのですが、その食糧の爆発的な余剰が、人口増加を招いて来たわけです。それと裏腹に何が起きたかというと、生産がある時期に落込んでいくことが起きました。そのため、対処法として、肥料とか農薬を過剰に投入することが起つたために、さらにまた生産が落込むという、さまざまな農業問題が生じてしまふことになりました。

そこで一九八〇年代ころから、循環農業、つまり食いつぶさない農業ということが大きなテーマになり、その結果として、リオデジヤネイロにおきまして、開発に関する国際連合会議が開催されました。一九九二年のことです。そこで問題になつたのが、持続可能な開発ということです。

さまざまな面での問題定義ですが、このなかでアジェンダ宣言というものが採択され、持続可能な開発をどう考えていくのか、ということが、実は大きな地球的な規模での課題になりました。世界的にみて大きな曲がり角であつたと考えます。これを日本のほうから考えるとどうなるかということについて、世界農業遺産の登場の背景から考えてみます。

まず、「となりのトトロ」という映画を取り上げたいと思います。いきなり登場させてなんだと思われるかも知れませんが。宮崎駿が一九八八年に制作したこの作品には、自然との共生、人と自然はどう共生していくべきかというのがテーマとしてかなり強くあつたんですね。そして、その象徴が、「トトロ」という存在であつたと思われます。昭和三〇年代の埼玉県の所沢が舞台だという説があります。作品に描かれた風景、村落は「里山」という言葉で呼ばれるようになつていく場所です。あるいは、自然と人間の共生の世界であるこの里山に、昭和三〇年代の高度成長期が影を落していくそういう時期を背景に時代を描かれています。

そのなかでこんな言葉があります。「昔、木と人は仲良しだったんだ」。今はそうじゃないのか、ということですが、サツキとメイという子どもたちの目を通して自然をしていく、東京の郊外の世界。お父さんはどうも、考古学者らしいんですね。東京に通つていて、何もいつていいわけじやないんですが、あとで諸説いろいろといわれていて、そして、サツキとメイという子どもには森の主トトロが見えるという設定なんですね。

次、もうひとつの作品の「思いでぼろぼろ」を取り上げます。一九九一年の高畑勲監督の作品で、プロデュースが宮崎駿ですね。私もとても懐かしいのですが、舞台は東北の山形、あるいは

は東京ということです。彼らは、蔵王の麓の村をみて、指をさしてゐるんです。こんなどこにでもある田舎、典型的な日本の農村風景が画面に出てくるんですね。このなかのテーマというのが、これは私なりの解釈であります。一つは、懐かしさ、ほつとするということが大きなテーマかなと。時間を遡る、子ども時代の懐かしさみたいなものが一つの大きなテーマになつていて。昭和三〇年代の子ども時代にさかのぼっていく、家族の卓袱台を囲む様な生活の懐かしさです。もう一方、そのような空間への懐かしさが何かというと、これは先程も紹介した里山や、あるいは山形の世界です。この後者を、都会からやってくるタエコを通してみていく。我々にとつてこれはどういうものなのかということを考えさせる、決してラブロマンスではありません。

蔵王から降りてきたトシオとタエコが目の前に広がる風景を眺めてこんな会話をします。都會育ちのタエコは田舎を見て自然だと言ってしまいます。トシオは何と言うかというと、この風景は自然ではない、田舎は自然ではない。田も畠も川もみんな。ひいじいさんとかさらにそのおじいさんが、自然と格闘したり、妥協したり、そうやって作りあげてきたものだと言うのです。それこそがこの自然と人間の共同作品、そういうものである。つまり決して自然ではない。人間が作ったものだけれど、自然と人間がうまく折り合いをつけてきた、そういう世界。タエコはその言葉をきいて、何故自分がここにやつてきたのかを考えます。タエコは、山形と直接関係があるわけではなくて、あるきっかけから、山形にいくようになつた都會で働くOLです。そんな自分がなぜ、こんな親戚もいないようなところへやってくるのか、懐かしさ、ほつとするということは、このところに何か自分の求めるもの、心の安定感というものが、この里山の世界にあるのだ



写真1 フィリピンのコルディリエラの棚田

ろうと思うのです。一九八〇年代の終わりから九〇年代という時代をもう一度整理してみると、なんふうになるのではないかと思います。あえて、この二つの作品から説明しました。

大学の授業でも「ほたるの墓」「おもいでぼろぼろ」などをよくとりあげますが、一九九一年の秋「中世のムラと現代」というシンポジウムを東京でいたしました。そのとき私は、大分県の博物館に勤務をしていました。早稲田大学の助手を終わって、職を求めて大分に流れてきていたわけですが、その際に、国東半島でおこなった調査の成果を発表しました。シンポジウムは、早稲田大学でおこなわれましたが、大分県としてはとても珍しい東京でのシンポジウムで、村落遺跡調査の成果を世に問うということでやりました。

実はこのシンポジウムの学生のアンケートの中で、「おもいでぼろぼろ」という作品に出会うことになりました。シンポジウムについてはあとでお話します。

一九九二年は、先程みなさんにここがポイントですよといいまして、世界遺産のなかに文化的景観という概念が登場したのがこの年です。自然と人間の共同作品という概念を世界遺産の中に持ち込まれてくるのがこの年なのです。かつ、先程、言いましたようにリオデジャネイロの宣言、持続可能な開発、これもこの年なのです。この年が一つの大きな鍵になってくるというのはそういう意味です。そして、一九九五年になると世界遺産にフィリピンの棚田が選定される（写真1）、田んぼが世界遺産になるという

画期的なことが起ります。



写真2 イフガオ族の棚田



写真3 元陽の棚田

そして別府大学では、一九九七年に文化財学科が設置され、ここに環境歴史学というものが文化財学の基礎科目として登場します。それは、自然と人間との関係を歴史学のなかにきちんと位置づけようという意味です。そして、私の好きな作品でNHKの「映像詩 里山」という作品が作られたのもちょうどこの時期一九九九年です。こういったことが進んでいて、二〇〇五年には文化財の法改正がおこなわれて、文化財のなかに文化的景観が日本でも組み入れられることになります。

この文化的景観は、一九九二年の世界遺産委員会での宣言を強く意識したもので、つまりそれ以降、その議論がだんだんと進んでいったことは事実です。それは世界の動向ですが、日本でもその動きはあって、それが形を結んだということです。世界遺産のなかには、フィリピンのコルディエラの棚田、天空の棚田といふか、こんなところによく田んぼを作ったなど思います。イフガオ族の棚田（写真2）は、一時期、危機遺産にいれられました。おもしろいことに世界農業遺産にも登録されたということで、すぐに再生するわけではないのだけど、今、再生の取り組みがなされ

ています。世界農業遺産として、この文化的景観は密接な関係をもつてているということを紹介しておきます。

これは、中国の元陽というところの棚田（写真3）です。二〇一〇年に私達が行つたときは、間もなく世界農業遺産になるという段階でした。このあと一三年に世界遺産になります。つまり世界遺産の文化的景観と世界農業遺産のあいだには、密接な関係があるということを紹介しておきます。

日本の文化的景観についてですが、二〇〇四年に景観法というものが整備されて、翌二〇〇五年には文化財保護法が改正され、新しい形で文化の保存が基本的には進んで来たということがいえると思います。世界遺産の考え方が導入されてくるというふうに一つは評価しています。

これを具体的にみていくと、二〇〇五年的文化財保護法の改正では「地域における人々の生活または生業、および当該地域の風土により形成された景観地で、わが国民の生活または生業の理解のために欠かすことができないもの」これを文化的景観と規定しました。日本流の解釈、「風土」という言葉を使ったところも日本の特色かと思います。そのなかでもつとも重要な地域を重要文化的景観として文科大臣がこれを奨励し、定めて、選んでいくというのが重要な文化的景観ということになります。

ここから紹介するのが国東半島の事例です。国東半島には田染荘という荘園がありました。一九八一年、日本で最初に、国東半島莊園村落遺跡調査という圃場整備事業に対処する調査が実施された場所です。圃場整備が進行していくなかで、私達はそれまで考古学を対象として調査し



写真4 田染小崎地区

てきました。要するに、圃場整備が進むとは、ブルドーザーで土をおしのけて、田畠を新しく区画整備をするということです。下にある遺跡が大きく破壊されるということが問題だつたんですね。ところが、この時期から景観を大きく損なっていくということが問題になっていきました。そこでそれに対処するための調査を国東半島のこの地域で最初に手がけたのが大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館です。この調査の成果を問うたのが、先程言いました早稲田大学での「中世のムラと現代」というシンポジウムです。これは、村ごと、ありとあらゆる分野、村を遺跡という概念でとらえ、ここにあるように生きている遺跡、本来遺跡は時間がとまつて死んでいるものですが、今、生活している人びとの空間や生活をトータルに含めて、遺跡の概念でとらえようと考え調査を行いました。ある意味ではじめて遺跡という概念を使い村落の景観構造をとらえようとした試みです。

つまりここでいう遺跡とは、見えている田んぼも遺跡じゃないの?という、そういうとらえ方です。田んぼそのものも遺跡ですし、田んぼで働いている人びとの生活から生まれてくる行事や様々な民俗的にこされてきたものも含めて、またそこにあるお堂に置かれているお地蔵さんや、仏像とかそういうものもトータルして、村全部が遺跡だという考え方です。そこで、このような村落遺跡はどうだろうという提案を東京でぶつけたのが一九九一年です。それがちょうど世界遺



写真6 鍋山の井堰



写真5 水源にある磨崖仏 (熊野磨崖仏)

産に文化的景観がでてくる前年です。もう一度整理しますと、別府大学に環境歴史学の講座ができたのも、この村落遺跡調査を背景にしています。

写真4は、田染荘の小高い山の上から下をみたときの風景です。これが「おもいでぼろぼろ」の場面と重なって見えたんですね。山形のこの田舎と、国東の田舎が一つのものに見えました。これが日本の鎮守の森の風景だ、日本全国どこにいっても森があつて、その森の中心に神社がある。神社と森は一体のもので、神社のことを杜（もり）といつたりします。この森がどんな役割をしているかというと、異界の山からきた水の流れで整理すると、森を通って、人の田に水が供給され、その結果、人びとの生活が成り立っていく、というのが一つの日本の農村の典型的パターンというふうに捉えられます。これを整理して、ヤマとサトヤマとサトという考え方で整理をすると、水はヤマからサトへ向かって流れている、その間のサトヤマとの境界地に鎮守の森というものが存在している。これがキーポイントになっているといえます。

田染では、水路関係を、水田を詳細に記録する調査をやりました。どこから水がきてどういうふうにシステムになっているのかとい

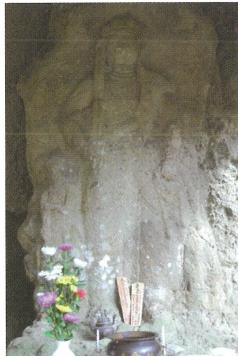


写真7
鍋山の磨崖仏



写真8
小崎の景観（平成19年）

うことを記録する作業をやりました。こういう調査は、案外ありそうでないんです。日本全国どこでもやっているか、どの分野でもやっているかというと実はこれ、民俗学でやるのか地理学でやるのか歴史学でやるのかといった点で、意外と穴場だったんです。そういうのを調べていくと、磨崖仏があつて、神社があつて、神様と一緒にになっている。熊野磨崖仏は、実は水源なんですね（写真5）。また、鍋山井堰という所には水の取り入れ口（写真6）があるんですが、この上に磨崖仏（写真7）があつて、ここはもともと神社なんです。つまり日本では、こういう神仏習合の世界と水は密接に結びつきながら存在してきたということです。

田染の小崎地区（写真8）は景観がよく残っていて、文化的景観に選定されています。圃場整備が進んでしまっているところとは対照的なんです。私たちの調査では、一枚一枚の田んぼの、水田の図を作ったんですね。千分の一という詳細な図面を作つて、それをどうやって水が田んぼのなかを流れていくのかということを調べたのです。そんな地味なことをやつてどんな成果があ



写真10 鎮守の森の景観 (雨引社)



写真9 水利の景観 (二宮下池)

るのかと私も当時は疑問をもつていました。田んぼを全部歩いて記録をとつていくということを、調査者自身がよくわかつていな。なんでこんなことをするのかと、考古学では図面を作つて記録をし、ただ、その付近は全部、圃場整備でなくなりますよ、だから残しましようということはわかつたのですが、どうやつてこの調査結果を使つたらいいかよくわからなかつたのです。この疑問から学問が始まつたみたいな所があります。いろいろみていくと、たとえば、取り入れ口にすぐに森があります。神社の御旅所であつたりする。ここがイチバという名前なんですね。すぐ横から水が取り入れられていく場所になぜかある。そして、二宮の鳥居は、実は裏側に回りますと神社の森です。池があります（写真9）。つまり、鎮守の森の裏側に池を設定しているんです。ここから、池と水源とみんなセットになるというそういう関係でできあがつているということがわかりります。

雨引社という名前もいいですね（写真10）。ここから水が流れだしていくんですね。ちょうどこの山の谷の出口のところにあって、湧き水のように水が流れ出していく、この田んぼの水源地。すぐ横にはこういう堰があつて、雨聞イゼ（写真11）というんで

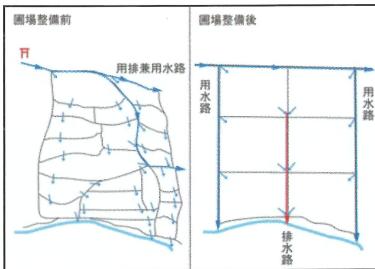


図1 伝統的水田と圃場整備水田



写真11 水利景観（雨引イゼ）

すね。つまり、全部、神社と水の取り入れ口がセットになるような仕組みを日本の農村では作っていることがわかります。これはこの田染だけではなく、私が調査したほとんどの所で、このような水利システムが証明できます。そこで、私は大学に移ってからは、学生達とともにこの調査の取り組みをはじめました。このことはあとでご紹介します。

それでは、圃場整備とはどんなことが行なわれるかを説明します（図1）。水源地があると神社が作られていて、昔は田越し灌溉といいまして、用水と排水を兼用する。上からいくと排水をしている。でも下の田んぼからみると取水している。排水と取水を同時に起こっています。こういうふうにすると、こここの水源地を共用する田は、上の田から、下の田へいっしきに水をかけていくので、例えば、田植えをするときは一緒にやらないとできなくなります。つまりこれが共同体の根幹を作っていくということになります。それでは、圃場整備後はどうなるかというと、用水と排水を完全に分離して四角い田んぼをつくる。この田んぼは隣同士つながっていない。だからこつちは日曜日に田植えをする、こつちは月曜にする、となり同士バラバラです。また、昔の用水路は



写真 13 イトトンボ



写真 12 ベニイトトンボ

田越し灌漑ですので、水が汚れにくいんです。今の田んぼは、水を一回しか使わないで流してしまいます。つまり泥が排水路に流れ込むということで、とても環境的に悪くなります。それから深い排水路にするので、生物が生きるのが大変難しくなり、生物環境も悪くなります。里山的環境が整った田染では、生物の多様性を生むのに都合のいい環境を支えたホウネンエビとか、ホタルが大変多いとか、トンボも大変多い（写真12、写真13）ということが調査でわかりました。実際、たくさんのトンボがみられて、圃場整備したところに比べて、はるかに多いということが証明できます。これは田染荘のトンボの調査を担当した佐藤さくらさんの話ですけれど、こんなふうに言っています。「田染荘は莊園村落の姿を残す農村景観として価値があります。宇佐神宮の一千年前の莊園、それが景観として一千年以上、ほとんど変わらず残っているという姿を確認することができます。それは伝統的な村落であり、トンボが人為的な池、水路、鎮守の森でうまく生きています。三年間調査しましたが、五一種類のトンボが確認できました。こういう伝統的な村落そのものや循環型の農業というものが、生物環境の多様性を保つということについて、すばらしいシステムである

「ということがわかりました」



写真 14 白米の千枚田

それでは、日本というのは農業国ではない。農業大国ではないが、農業文化国だ、ということを紹介します。今、注目される里地、里山の状況を日本という視点で考えてみます。日本における、農業遺産の意義ということですが、日本で最初に認定されたのは二〇一一年の「トキの共生する佐渡の里山」と「能登の里山里海」でした。これは名古屋大学でおこなわれた生物多様性条約の第一〇回締約国会議が契機になつて、認定が進みました。だから生物多様性とともに近い関係があるんすけれども、それまではアジア、アフリカ、南米などが中心地域だったのに対して、このときははじめて日本が入りました。日本は先進工業国ではありますが、もう一方で、生物多様性に富んだ国という側面も確かにもつてているということになります。そこをあらためて、世界農業遺産のなかで評価していくことで、日本は、現在、八カ所の世界農業遺産のジアスサイトをもつことになりました。佐渡は、トキが一度消滅しましたので、その環境をもう一度取り戻そうということで、いろんな努力を始めて、その努力のなかで生まれた世界を評価するというのが、佐渡のトキと共生するというテーマでの農業遺産なんですね。これは逆にいうと、失われたものをもう一回取り戻すということも評価されることを示したもののです。

もう一つは能登半島です。「能登の里海・里山」。この里海・里山というのは、山と海の豊かな



写真 15 草地の「野焼き」風景

資源というのは循環的につながっていくという発想をもつたものです。象徴的な場所がありまして、白米（しらべい）の千枚田（写真14）といわれるところです。海が向うにみえています。この棚田は行くとすごいです。一枚一枚の田んぼがものすごく小さい。一番小さいものは、幅が五〇センチくらいしかなくて、奥行きが二メートルくらいしかない。実際に数えていくと、二〇〇〇枚近くあるという話なので、すごいなと思います。すぐ下が海です。こういう能登半島の風景、山と里の共生する世界の評価などいろいろありますが、ここには塩作りの世界もありますし、また、輪島の漆も含めて評価をされています。

そして、そのあとに世界農業遺産に目をつけた地域があつたんです。九州、阿蘇です。阿蘇は今年正式に文化的景観になるということなんですが、その要素はもともとあります。それは野焼きです。皆さん御存知のとおり、阿蘇は広大な草原地帯、別府から九重、阿蘇というところはみんな草原なんです。なぜ草原を維持しているかと云うと、野焼き（写真15）といって春になると火をかけるからでです。ここへ行つて、昔は、私も思いました。阿蘇はすばらしい自然だと。さつきの田んぼの話ではないですが。そういうふうに言つてしまふのです。しかし、阿蘇は広大な不自然なのです。火をかけないと木が生えて森林化してしまいます。森林化を防ぐために野焼きをする。見かけで「自然」というふうにみえているけれども、人間の営みが



写真 16 溝池によって支えられる田染小崎の水田

自然のサイクルのなかに上手くマッチングして、このようないい景観を作り出している。そういうことが阿蘇でもあるんだということで、二〇一三年に世界農業遺産というかたちになりました。

もうひとつは静岡の掛川です。お茶畑はあちこちにあります。ポイントは茶草場と呼ばれるものです。お茶を作るのに、野っぱらみたいな所から草を刈ってきて撒く、そういう循環型システムをとつていて。どこにでもあるわけではなく、ここでの独特なシステムが存在している。こういうところが、生物多様性との両立がおこなわれているという評価です、やはり二〇一三年に登録されました。

そして、この年に、国東半島宇佐地域も世界農業遺産として認定されました。「クヌギ林とため池がつなぐ 国東半島・宇佐の農林水産循環」これに副題として「森のめぐみとシイタケのふるさと」というへんな宣伝文句がついていますが……。国東半島では一九八一年から国東半島庄園村落遺跡調査が始まっています。農村としての評価とか価値はわかつていきました。大分の場合は、国連の推薦をうけて、二〇一三年五月に、石川で行われた会議で、先程の五つの基準にかなっているということで決定しました。国東半島は水に恵まれない地域です。山はあるのですが、余り



写真 17 クヌギを利用したシイタケ生産

深くはありません。だからため池がたくさん存在します。川は小さなものが多いです。もちろん古くは川を使っているのですが、農業が進展してくる近世以降はため池が非常に重要になっています。これが田染の様子（写真16）です。ここ奥に池があります。あとは特徴的なのは、田んぼを利用した七島イの生産があつたということです。今は国東でも五十軒の農家しかやっていませんが、江戸時代には、畠のオモテにしていた七島イの生産が今でも残っています。本来、七島イといふのは、イグサではなく、カヤツリグサの仲間です。イグサは畠オモテとして岡山のほうで、「備後表」^{びんごおもて}といいます。七島イは、「豊後表」^{ぶんごおもて}という名称で、江戸時代に、別府湾沿岸で盛んに作られました。国東・宇佐地域の売りシイタケも歴史的に見ると新しいものです。水田の裏で、ため池を改良するために人工的に作った林のなかでシイタケを育てています（写真17）。それが一つの循環をなしていくという評価です。なお、ここでの価値は、こういう循環型のシステムと同時に、水田景観とか、それまで調査してきた様々な伝統的な農法などが評価されています。ため池についてもそうです。

私はもともと八幡神の研究をしていますが、八幡さんとは池に出現した神様で、その池は人工的な池なんです。このあたりは古くから渡来人たちが人工的な池を築いた、とくに豊前地域と豊後の境界というのは、そういう池の文化の地域であります。

国東半島宇佐地域の世界農業遺産の申請書に次の一文があります。「このシステムは何千年ものあいだ、険しい山々と芳醇な海のあいだで維持された天然資源、ミネラルの複雑な、動的な流れを育んでおり、古代から農業景観と結びついて、国東地域はまさに農業博物館の様相を呈しています。このような場所だからこそ、自然に感謝する、放生会がおこなわれたり、修正鬼会とう国東のお祭りがおこなわれたり、峰入りと呼ばれる修行がおこなわれてきました。一千年を超える祭礼が続いてきたのです。またこの風土は、自然を師として、その豊かさから自然哲学の思想を組立てた三浦梅園のような偉大な思想家を生み出した。彼の思想はdeep ecologyの原理と肩を並べるものとされています。」こういう場所が国東半島というところです。

そこで、大学が国東半島でどういう取り組みをしてきたかをご紹介します。宇佐の田染莊というのは、今から千年くらい前、平安時代の中期くらいに生まれました。その一千年くらいの景観がこの地域に残っていたことが、国東半島の調査でわかつてきました。地名が残っていたり、風景だったりといろんなものが残っているということがわかつてきました。平安時代中期の日本の村の原型がいつできるのかというと、私達が考えているのは、千年くらい前に、今の日本の村ができたと思っています。どうしてかというと、鎮守が生まれたことと関係しています。村と鎮守はセットなんですね。鎮守を中心とする村の組織というのは、莊園と呼ばれるものと密接に関係してできています。莊園の中心は、莊園鎮守と呼ばれるお宮さんです。このようなシステムができるあがるのは、平安中期、早くも一〇世紀の終わり、そして一一世紀一二世紀に莊園というものが日本全国で確立していく。私は古代中世を専門とする歴史学者で、その莊園をもともとの研



写真 18 学生と宇佐神宮の権宮司

究としてやつてきました。ですからこの地域をあえて、田染荘とよんでいるわけですね。それが、伝統的村落で、先程から紹介しているようないろんな側面がここには残っている、ということがいえるんですね。

写真18はうちの学生達が座つていて、左にいるのが宇佐神宮の権宮司、永弘健一さんという方です。この永弘さんは宇佐神宮の神官を奈良時代から続ける宇佐氏の流れに連なる家柄なんですね。田染荘のもともとの領主なんですね。こここの景観を守ろうということで、宇佐神宮も協力してくれまして、春の田植えまつり、秋の稻刈り、ということから景観を守る、この姿を守つていこう、ということを考えました。別府大学は、一九九七年に文化財学科を創設したときに、文化財保護のなかに、明確に生活・生業に関わる遺跡・景観を位置づけるということをいたしました。これは、国が法律改正するより前です。その保護研究をすることが重要だということで環境歴史学を提唱することになったということです。そのフィールドとして、環境歴史学の実習では、国東半島の荘園村落遺跡調査のおこなわれた方法を学生達も学ぶために国東半島にいこうということになりました。二〇〇〇年以降です。田染の小崎というところです。二〇〇〇年にこの田染地区ではまわりの圃場整備は進んでいたのですが、ここだけはなんとか守ろうと、景観を残そうということをしました。当時、圃場整備は国の政策ですので、これをやめろ

ということは難しかつたのです。そのなかでもここだけはどうしても残すんだということをさんざん言つて、当時の豊後高田市の永松市長さんとも交渉しました。そのようななか、二〇〇〇年のころ、田園空間博物館構想事業というのが登場してきました。国の農水省が今までの圃場整備とは少し違う、どこでも同じように圃場整備をやつしていくやり方をあらためて、伝統的農村景観を重視し、整備するというものです。それは、先程紹介したような九〇年代からの変化のなかで、農水省の計画が大きく変わってきたことが要因です。そこでそういう新しい方法で圃場整備がおこなわれていくようになりました。確かに将来に農村を維持するにあたつて、昔の伝統的村落のままで維持できるかというと難しい。制度とか一定の整備をしなくてはいけない。でも景観を壊したくない。そのせめぎ合いをどうするかということで、私もその委員会に入りました。現地の委員会のなかで、どういう整備をおこなえば、景観を残せて、かつ、持続可能なものになるかの知恵を出しあいました。つまり、継続出来なければ村は消滅してしまうわけですね。それが、現実です。そして、二〇〇〇年から村の人達と、いろいろ相談して、小崎地区のところで、莊園領主オーナー制というのを考えました。ちょうど棚田オーナーというのが流行つっていたので。ここでは棚田ではありませんが、みんなで莊園領主になり、年貢をいただこうとしました。昔は貴族が都にいて、そこで年貢が来るのを待つてたんですが、現代の領主たちはお金を出して働くんですね。別府大学も領主になりました。学生を働き手として使つたんですね。これをしてすることによつて、この地域の景観を維持していくことになると同時に、学生からすると体験学習ができるというメリットがある。農村とは何か、農村を調査するとは何かということを、泊まり込みで



写真 19 田染荘の田植え

出かけて行つて調査、あるいは田植えとかをやります。二〇〇〇年の春、田園空間博物館構想事業を導入して、景観を維持することになりました。田んぼの景観を維持するために一切、その枠組みや、水のシステムも変えませんでした。何をしたかというと、機械が入るように少し道幅を広げるとか、少し水路を深くするとかということはしました。ただし、生物多様性を維持できるかたちは維持しました。そして、このあとに調査した結果が、先程紹介したトンボが多かったとか、ホタルが多かつたとかいう調査結果を得て、環境を維持することができたということになります。

二〇一〇年の八月、ここをずっと調査した、村落遺跡の調査の結果ですが、田染荘・小崎の農村景観として、国の重要文化的景観として選定されました。重要な文化的景観の制度が始まったのは、二〇〇五年からです。本当は田染荘が最初に国的重要文化的景観になるという話になつていました。なぜならなかつたかといふと、農水省の事業が重なつて入つている段階で、そこを選定対象にするというのは難しかつたからです。それで後ろへずれてしまつて、二〇一〇年の選定になつたのです。この地域の取り組みは、全国でよく知られておりました。また、伝統的な文化財をよく残しているということで、田染荘は農村景観、水田、畑などの、農耕地としての景観としての価値、それから、垣根や屋敷林の文化に関する景観、これは村そのもの



写真 20 稲刈り

の住宅、こういうものがとてもよく残されているということで評価されて、二〇一〇年八月に重要文化的景観になりました。世界農業遺産に先立つこと三年前です。こういう事情から、二〇〇〇年から私のところの学生たちは毎年ここへ連れていかれまして、このような格好をしています（写真19）。田植えを始める前の様子ですね。このあと、この田んぼで田植えをやります。田んぼのむこうにゴツゴツした岩山が囲んでいます。国東半島というのはまさにこういう奇岩の岩峰というか、ここは天台の僧侶の行場であります。ここに田んぼがあつて、こつちでは僧が修行をする世界があるという、両方の世界が見えるような場所が田染荘といふところです。ここで、みんなちょっと昔風の姿をして、田植えをするということです。これによつて、この地域を保存していくことを注目してもらうことも大事で、アピールをしております。写真20は稻刈りの様子です。先日もいきましたが、大雨のあとで、田んぼというのは水もちがいいもので、なかなか水が抜けないんですね。入つたらぬかるんでいて、学生達は裸足になつて稻刈りをしました。鎌をもつて手狩りで稻刈りをするんですね。それはとてもいい経験になります。最初は泥のなかに入るのもできなかつた学生達ですが、経験していくことで、地域文化を体で体験していくことになります。もちろん、農家の人たちに色んな話をきくという調査もしていますが、この田んぼで稻刈りするだけじゃなくて、集落を回つて昔からの地名や名前を聞いたり、

伝統的なお祭りのことを聞いたりとかいう実習をしながら、当日は稻刈りをしたりします。

随分たくさんの人達が集まって、わが別府大学だけではなく、春は九州大学の学生が50人以上やつてきました。九州大学には服部英雄という教授がいました。国東半島の莊園村落遺跡調査を文化庁の史跡担当として支援した方です。また、私の先輩で資料館の前任者であり、この村落遺跡調査を始めた海老澤衷さん（早稲田大学教授）も毎年欠かさずやつてきます。最近はAPUとか大分大学の学生も加わってくれています。

ここ何年か、毎年大分県副知事を経験され、世界農業遺産申請に関わった小風茂さんという方も田染の行事にやって来ます。世界農業遺産のときちょうどきた副知事で、とても理解のある人で、フランスで大使館の一等書記官の経験もある方です。のちに農水省に戻ったときには、局長になられました。この人の活躍があつて国東半島・宇佐地域が世界農業遺産となりました。

しかし、どうして世界農業遺産にできたかというと、実は彼が二〇一〇年に文化的景観になつたときに田染荘をみていたからですね。彼は、ここがあるから実は世界農業遺産に国東半島をできるんだと。国連大学とかをここに連れてくれば、おそらく農業遺産にできると確信したそうです。農業システム、ため池のシステムがあつて、シイタケもあります。半島の反対側の東国東には、シイタケ、溜池ばかりでなく七島イを栽培する場所がまだ残つておますが、国東全体の中で一日で国東農業の特色を一番はつきりした証明ができる場所はここ田染であると目をつけて、国連大学の人や農業遺産に関わる人を連れてきたそうです。だから、短い間に、世界農業遺産をなしえたとそういうことです。

別府大学は実は、こういう世界農業遺産に関わる一方で、文学部、食物栄養科学部や国際経営学部もあります。農業に関わる分野としては食の問題があります。経済の問題というのもあります。私達は文学部として、文化財という視点で関わって来たのですが、もうちょっとひろげていくと、まさに農業の問題は食糧の問題であり、経済の問題もある。そういう視点からあらたに二〇一〇年以降、別府大学は夢棚田プロジェクトというものを生み出しました。これは田染とはまた違う場所でやっています。最後にこれを紹介したいと思います。

二〇一〇年一月に大分県から棚田づくりの依頼がありました。県立の農業文化公園というのが国東半島の付け根の杵築市山香というところにあったのですが、行き詰まりをみせていまして、学生達で盛り上げることができないか、という話を前からいただいたいました。そこで、別府大学夢棚田チームを結成しました。私は二股はできませんので、他の先生達が積極的に関わってくださいました。一番熱心だったのは食物栄養科学部でした。ここが食文化に注目して、作るところからやりましょうということで、農業文化公園に大分文化公園棚田プロジェクトという協定を結んだんですね。これが一つのきっかけですね。

全学部に呼びかけ、学生ボランティアの棚田チームを作ったんですね。彼らが何を始めたのかというと、まず、棚田を復興しようしました。農業公園のなかには、ぼろぼろになつて使えないくなつた棚田がありました。石積みを全部積み替えて、棚田を作り直そ�ということです。ダムの斜面に棚田が残つているところがあつてそれを復活してやろうと、何枚かの棚田を作ることがら始めました。彼らは棚田作りからはじめて、もちろん県が手伝つていますが。毎年毎年そういう

う作業をし、次に田んぼを作つて、そこで稻を植えるということをやりました。そしてその管理をするということですから、年に十数回は通うんですね。大学からいくと、早くても四〇分くらいかかるという場所にもかかわらず学生たちは頑張りました。

それで、二〇一五年には、この夢棚田プロジェクトは、大学の科目になりました。農業遺産体験学習という授業です。はじめは年間二単位でした。しかしそれではちょっとかわいそうかなという意見があり、四単位に変わりました。

ここでは、大学の全学部学科が関わっています。それぞれの学部学科の関わり方、目標を決めましようということにしました。史学・文化財学科では、伝統農業を次の世代に継承するという目標を掲げました。国際経営学科は、若者を農業と結び付ける地域農業というテーマ、そして、食物栄養学科は、コメについて理解しようというスローガン、発酵食品学科は発酵食品を作ったり、研究したりする、お酒もつくりますという目標を掲げ、香米の焼酎のPRを、そして世界農業遺産の知名度をあげるということにしました。そして、短期大学部の初等教育は、大分の世界農業遺産について、子どもたちに知つてもらうとして、それぞれの学科独自の目標をあげて、これに関わっていきましょうということをやつたんですね。

これが棚田チームです。行けるときに行くということで、今は授業ですから、三〇～四〇人が関わって行きます。

この棚田には七島イも植えます。世界農業遺産の認定において、田染莊が重要な役割を演じたといいましたが、この夢棚田プロジェクトも大きな役割を演じました。ここも同じ国東半島の棚

田ですか。

夢棚田では、毎年成果発表をしています。今年のチームはどういうことをやつたのかということについて、県の方やいろんなところから来てもらつて、大学で発表会を実施しています。



写真 21 卒業生による製品開発

かろうということで、その研究をすることにも大学が関わりました。写真21の方は、大学の今は美学・美術史学科の卒業生岩切千佳さんで、ずっと七島イの製品化に関わってきました。大學と連携し、七島イの編み方、新しい工夫とか製品開発について学生に指導してくれています。

もう一つ商品開発に、大学開発の本格焼酎「夢香米」^(ゆめこめ)があります。先程の棚田のなかで、香米というお米を育てたんですね。香米というのはほんのちょっと使うとたいへんご飯がおいしくなる。ほんのひとつまみくらいしか使えないのですが、これをお酒にできないかと、全部を使うのではなく、一部分に使うことで独特の焼酎ができるのかな、ということを考え、都甲香織さんという学生が卒業論文でそれをテーマにしたのです。彼女は発酵食品学科の学生だったので、なんとかお酒を作りたい、開発をして卒業論文にはしたけれど、そのときは製品化できなかつたんで



図2 本格焼酎別府大学夢香米（平成29年4月）

す。次の年、次の世代の学生達がまた受け継いで、これを実現したのが二〇一六年の四月のことです。二〇一六年四月は、熊本大地震がおきて、別府も大変な被害がありました。完成はしたのですが、発表会ができなくなつちやつたんですね。これからいくぞ、という矢先でしたのでした。図2の絵柄は新たに今年二〇一七年度バージョンで、もう少し変えて出直しをしようということでトライしたものです。これは学生の夢が実現してお酒を作り上げていく、われわれがやつた

か、学生達が一つひとつ積上げた結果を大学と地域の人といっしょになつて製品化にこぎつけました。酒造会社藤居酒造の全面的な協力をうけて作りました。このポスターも大学の卒業生で非常勤講師を務める佐藤裕子さんが作ってくれました。この後ろにみえている白いものはお米です。僕、最初に見たときは桜吹雪かと思ったんですね。わざとそういうふうに見えるようにつくつてあるんですね。こういうデザインを大学がやつて、企業とも協力して大学発のお酒が出来上がりました。

別府大学はいろいろな試みに取り組んできました。国東半島における田染地域と連携しながら、景観の

保存という話から始まって、一歩進んで、大学が自分たちで地域との関わりのなかで、実際に生産に関わって、製品作りにまで関わるという段階に入ってきてています。ただ、これが、なかなか大変です。学生も先生達も、継続していくのは大変です。言うは易し、行うは難しという言葉がありますが、確かに夢は語れて、いろいろなことがやれるんですが、本当の意味で地域と一緒にやっていく、地域のなかで、これは学生にとっては素晴らしい勉強になるのですが、それを継続してやっていくことは大変です。大学は、一番は学生を育てていく場所です。学生が育つていく場所です。その育ったことは必ずみな自分に還ってくるわけです。これは先生も含めてそうです。そうやって関わることによって自分達も育っていく。その育った結果は、学生が卒業するときに、「力」を身に着けて出ていくはずです。そうなってほしいと思いつつ、別府大学ではこういう取り組みを続けています。最初のときは、私が所属する史学・文化財学科が関わり、そのときはどう広がるかは見えませんでした。しかし一歩ずつ進んでいくと、今では、全学的な取り組みとして、今、紹介したように、各学部学科が目標を掲げて関わっていく方向に少しずつ変わりつつあるということです。

こういうことを別府大学がすすめているということを紹介して、今回の報告を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

第1部 災害の経験から学ぶ博物館活動

水俣病の経験を伝える博物館活動

—手作り資料館のすすめ

平井 京之介（国立民族学博物館教授）

国立民族学博物館の平井と申します。今日は「水俣病の経験を伝える博物館活動」というタイトルでお話しさせていただきます。サブタイトルは「手作り資料館のすすめ」です。私は今日の発表で言いたいことはこれだけです。みなさん一緒に資料館を作りましょう、という話をするつもりです。

さて、私が勤務する国立民族学博物館というのは、民族学、文化人類学の研究所でありまして、私の専門も人類学です。人類学とは文化の研究をする学問です。博物館と人類学との関係を考えてみると、大きくわけて二つあると思います。一つは、世界の民族の研究をしている人類学が、その成果を博物館の展示に活かすという関係です。つまり博物館の実務をされている方が人類学の成果を採り入れるということです。こちらの方が大半だと思います。もう一つは、博物館という社会的な制度・機関がどのように



な役割をもつことができるかを、人類学の対象として外側から考えるという関係があります。この二つはどちらも博物館人類学と呼ばれることがあります、博物館人類学者は両方やっていることが多い、私の場合も展示もやるし、博物館そのものを外から調査することもあります。今日のお話はそのうちの二つめのほう、つまり、私が調査対象としている博物館あるいは資料館が社会においてどんな機能を果たしているか、どんな可能性をもつてているか、ということをみなさんといつしょに考えたいと思っています。

一つお断りしておきたいことがあります。このシンポジウムのタイトルは、「大学あるいは博物館の視点から」となっていますが、私はその一番目の発表者でありながら、どちらの視点からの話でもございません。あえて言えば、「NGOの視点から」ということになると思います。

また、このセッション全体のタイトルは、「災害の経験から学ぶ博物館活動」になっています。このタイトルとも、私の発表はぴったりきていていません。災害の経験から生まれる博物館活動を考えるときに、一通り考えられるとと思うのです。一つは、災害があつて、伝統的な文化が破壊され、それを復興するときにどうしたらいいか、それを手伝いましょうと、そういうことが考えられると思います。たぶん私以外の今回のシンポジウムの発表者はかなりの方がこれだと思います。しかし私の場合は、災害の過程そのものを文化として伝える、そういう活動を研究対象にしています。だから少し特殊なテーマというふうに考えておいてください。この二番目の方を一言で表現すると、「負の遺産」と言えると思います。カッコしたのは、負の遺産というのは、普通はあたらよくないものと考えますよね。「これは過去の負の遺産だ」と言つたとき、なかつたらよか



写真2 水俣市立水俣病資料館



写真1 水俣市立水俣病資料館

つたのに、と。でも、私がこれから話すのは、もちろんなかつたらよかつたのに、なんだけれども、どちらかというと、それを保存し、活かしていこうという、そういう意味での遺産なので、カッコをつけました。

私は、紛争やトラウマ、災害の経験を次世代に伝える場所やモノ、知識、儀礼などを負の遺産と呼びたいと思います。この負の遺産の活用を考えるときには、このシンポジウム全体のテーマにあるように、地域住民と博物館が協同して、地域文化を再発見、保存、活用していくというふうに、きれいにストーリーが流れていかない、ということがあります。なぜかというと、活用しようとすると、そこに新たな紛争といいますか、いがみ合いといいますが、喧嘩が起きてしまう。でもそのなかで、博物館がどんな役割を果たせるのかということを考えるのが重要だと思っています。この場合の博物館というのはひろい意味での博物館で、資料館とか記念館とか、この発表では「考証館」という組織のことを話しますが、それらを全部含めて博物館としたいと思います。

この写真の資料館に行かれたことのある方はかなりいらっしゃると思います（写真1）。少なくとも、熊本県出身の方は行かれています（写真1）。



写真4 水俣市の航空写真



写真3 熊本県立環境センター

ていると思いますけど、水俣市立水俣病資料館です。残念ながら、今日私がお話する資料館ではございません。私が話す手作りの資料館は、こんなきれいな資料館ではないのです。これは反対側からみたところです（写真2）。目の前に庭園が広がっています、大変きれいなモダンな建物です。どうみても手作りではないですね。これ（写真3）は隣にある熊本県立の施設、環境センターです。これらの建物は全部、水俣湾の埋立地に隣接してあります（写真4）。水俣の市外がだいたいこの右半分で、その中心に水俣病の原因企業だったチッソが位置しています。ここから流された廃水に含まれる水銀で水俣湾が汚染されました。そこを浚渫して埋め立てた地域がここです。この埋立地の下に水銀に汚染された魚がいっぱい埋まっています。そういう場所の片隅に先程の資料館が建っています。埋め立てられた地域は毎年地盤沈下するらしく、巨大な建物は建てられないことになっています。この埋立地、なんと呼ばれているかというと、行政がつけた名前ですが、エコパークといいます。非常に皮肉な呼び方だと思いますが、下に水銀が埋まっている公園をエコパークと呼んでいるわけです。

こちらが今日のメイン、私の愛する資料館、水俣病歴史考証館



写真6 水俣病歴史考証館が立地する場所



写真5 水俣病歴史考証館

です（写真5）。こちらに行かれた方はたぶん少ないと思いますが、NGOが運営している、手作りの資料館であります。その資料館がある場所というのが、これです（写真6）。丘の上にあります。いまこれには写つていませんが、この奥に資料館があります。これがNGOの事務棟、集会棟、こっちが資料室になっています。この写真で私が何を言いたいかというと、左上のあたりが水俣の中心地なのですが、水俣病歴史考証館はだいたい四、五キロ離れた丘の上にありまして、周辺には水俣病の患者さんが、たくさん居住されている地域だということです。なぜここにあるかと言いますと、これからのお話のなかに出てきますが、もともとここが、被害者を支援するNGOだったからです。先にNGOがあつて、そのNGOが資料館を作ったという経緯になります。

簡単に、水俣病資料館（以下、資料館）と水俣病歴史考証館（以下、考証館）とを比べてみたいと思います。資料館は水俣市立て一九九三年に開館、NGOがつくった考証館は一九八八年に開館です。ここはすごく強調したいのですが、五年、NGOの考証館が先に建っています。資料館を作ったのは水俣市、考証館の方は水俣病センター相思社というNGOです。場所は資料館が水俣湾

の埋立地、考証館は患者の多発地域。来館者は、資料館が年間四万人、ただしこのうちの約半分は熊本県内の小中学生です。考証館は年間三千人しかいません。ただこの三千人が、少ないか多いかは見方によると思います。公共の交通機関がまつたくない場所にある。大型バスも近くまで入れないような狭い道路しかつながっていない。そんな考証館に年間三千人が訪れるというのが、多いのか少ないのか。

それぞれの設立のミッションはそんなに変わりません。似ています。ただ、NGOが運営する考証館で注目すべきはこの部分です。「水俣病の経験を出発点として、社会のあり方を考えましょう」。これがこのNGOのミッションの大きな特徴と言えます。

展示の分析に入る前に、少し水俣病について紹介しておきましょう。水俣病については、そんなに詳しく説明する必要はないと思いますが、水銀に汚染された魚を食べて、食中毒になつた、というのが水俣病です。一九五六年に発見され、一九六八年に政府が初めて水俣病の原因はチッソという企業の工場にあると認めました。症状としては、脳などの神経系が侵されて、手足のしびれ、感覺障害、運動失調、視野狭窄などが生じます。現在でも苦しんでいる方はたくさんいらっしゃって、水俣地域に現在住んでいる五〇代以上の方には、なんらかの症状がある方がたくさんいらっしゃいます。

水俣病についてはよく、「水俣病事件」と言われます。それはなぜかというと、普通の病気のように、自然に起きたものではなくて、一方に加害者がいて、そのせいで被害が起きた、ということを明確化するために、あえて「事件」と言われます。原因企業は自らの排水に原因があるこ

とを知りながら、それを一二年間流し続けた。それから、国も経済成長を優先して、原因企業であるチッソを支持し、被害者の主張や要求をちゃんと聞かなかつた。初期の被害者の多くは貧しい漁民だつたために、水俣の人たちからも、抑圧されたり、差別や偏見にあつたりしました。というのは、チッソというのは水俣で一番大きな企業で、当時も今もですが、従業員やその家族がたくさんいるため、被害者がその人たちから差別や偏見にあつたという事情がありました。国は補償制度をつくりますが、被害は予想以上に拡大していき、ほとんど機能しなくなりました。これらを全部ひつくるめて、水俣病事件という言い方がされます。

考証館をつくつた水俣病センター相思社というNGOが設立されたのは一九七四年です。なぜ一九七四年に設立されたかというと、一九六九年に、水俣病に関する最初の訴訟が起きます。その患者さんを支援するために、全国に団体ができました。その中心になつたのが「水俣病を告発する会」です。熊本に最初にできましたし、その後、東京、大阪、京都、仙台など、いろんなところにできました。その人たちが裁判をやつていて、これはどうも勝てそうだという感じになりました。勝てるということはどういうことか。補償金がもらえるということです。でもお金をもらつて終わりでいいのか、と考えたわけです。補償金をもらつたあと、患者はどうやって生きていけばよいかわからないから、患者を助けるために水俣病センターというのを作りましょう、と支援者たちが考えたわけです。そのセンターはどういうものかというと、一つめに、患者の拠り所で、鬱いの本拠地となる。水俣病と認めてもらえない患者さんがまだいるので、その人たちの裁判の支援をしましようということです。二番目に、まだ自分が患者であることがわかつてい

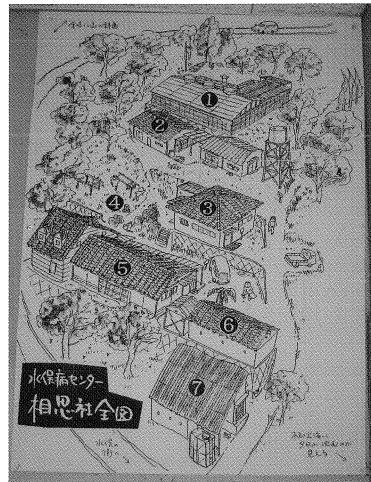


写真7 相思社全図

ない患者がいるので、その人たちに情報を提供する。そして、できれば、自分たちで患者に寄り添った医療をやりましょう。三つめに、水俣病に関する資料をたくさん集めておきましょう。四つめに、患者さんは他のところへ行つても働けないから、働く場所を自分たちで作りましょう。これらの四つの目的のもとに設立が構想されました。

そして実際に、一九七四年に水俣病センター相思社（以下、相思社）が設立されます。寄付が三三〇〇万円、一〇〇〇坪の土地、スタッフ六名で出発します。この六名は全国のいろんなところからきた若者でした。これが相思社の絵であります（写真7）。③が事務棟で、⑤が集会棟、⑦が倉庫、①が最初キノコ工場でした。このキノコ工場がのちに、あの考証館に変わることになります。⑥が資料室、②が宿泊施設です。二〇〇五年に私がはじめて相思社に行つたときにいたメンバーは、初期のメンバーとは入れ替わっています。なおかつ今のメンバーとも全部入れ替つております。

相思社は、先程も申しましたように、水俣病患者を支援するために立てられたわけですが、それがどうして考証館みたいなものを設立するようになったのか。これはとても興味深い問いです。一九七四年から運動を続けていくなかで、一九八一年に、はじめて展示館構想というのが出てき

ます。相思社は、水俣病の被害がどんなにひどいか、どんな原因で水俣病になつたかということを社会にひろく訴える活動をしていました。もちろん裁判のなかでもそれを訴えてきました。そんなときに、当時のリーダーが、ある患者の漁師さんから、カキ打ちの道具というのを見せられて、それで説明を受けたときに、非常に感動したというんですね。このカキ打ちの喚起力に比べれば、自分たちの表現力はとるに足らないと。それで、なんとか、こういうモノの力を利用して人びとに訴える施設ができるだらうか、ということで、展示館を作りましょうということを構想します。それに対して、まだ全然できる見通しはなかつたのだけれど、「水俣病歴史考証館」という名前をつけました。水俣病事件を歴史的にとらえ、私たちの生きている時代を水俣病事件を通して検証しようという意味がこの名前に込められています。ところが、貧乏なNGOのことですから、展示館をつくるお金がないわけです。当時の人たちには、展示館とはなんぞや、とか、どうやつたらできるか、なんてことは、まったくわからなかつた。とりあえず寄付を集めようということになつたのだけれど、全然集まらない。じゃあ代わりになにかしましようということとで、一九八二年に水俣生活学校というのを発足させます。これはフリースクールです。全国から若者を集めて、一緒に自給自足の生活をしながら、水俣病、あるいは水俣での生活を通して自分の人生や生き方を考えようという学校を始めます。そのなかで、水俣病について学んだり、水俣病の被害者から聞き取りをしたりして、知識や資料を蓄積し、のちのち考証館を作るときに利用しようという目論見でした。一九八三年に先に資料室が建設されます。これはたまたま大口の寄付があつたからでした。その勢いで一九八三年に水俣病歴史考証館準備委員会というのをつく

つて、『考証館通信』という機関誌を発行します。でもこの段階でも、できる見込みは全然ありません。



写真8 考証館の内部

そうして月日が過ぎていきましたが、一九八六年に、水俣病の公式確認から三〇年目の記念事業をしようということ話が持ち上がりました。市内のつぶれたパチンコ屋さんを会場として借りて、資料展と写真展をやろう、ということになりました。このとき展示の中心になったのは、ユージーン・スミスという著名な米国の写真家が相思社に寄付していった写真パネルでした。これを中心に、患者さんからもらった資料がいくつかあつたので、それらを展示しました。彼らは展示をやってみて思つたんですね。自分たちの力で、自分たちなりにやつたら、自分たちの資料館ができるんじやないか。それで、当時、使われていなかつた相思社のキノコ工場を改装して資料館にしたらしいんじやないかという話が出て、それがトントン拍子に進みまして、寄付と無利子の借金五〇〇万で、一九八八年に考証館としてオープンしました。

これが、考証館の内部の写真です(写真8)。見てすぐ気がつくのは、とてもきれいとは言えない、色で言つたら白黒ですよね。よくわからぬものが、ごちやごちゃと並んでる。やら活字が多い。とてもまともな資料館には見えない。でも、自分たちなりにはがんばつたのです。そのせいか、これをみて多くの人は、なんらかのものを訴えられる気持ちを持つというのはだいたい共



写真9 手作りの絵や船の展示

通しています。手作りの絵があつたり、手作りの船があつたりします（写真9）。この船は裁判のときに使った船なんです。水俣病患者が以前はどのように漁をしていたかを説明するときに使った模型です。

展示はパネルが中心です。説明が難しい病気の展示をしているので、どうしても文章が多くなってしまうのはしかたがないと思います。展示の基礎になつた活動として、このNGOには一番初期の段階から、作家の石牟礼道子さんが関係しています。彼女は『苦海淨土』などの著作で得た賞金や印税をこのNGOに寄付しています。石牟礼さんが寄付した展示資料もあります。水俣病研究会というのは水俣病の裁判のために熊本で結成された研究者やマスコミ中心の研究会ですが、この人たちが集めた資料も展示の基礎になっています。それから、一九七六年から八一年に組織された色川大吉さんを団長とする不知火海総合学術調査団の研究成果も、展示に組み込まれました。この調査団の研究成果は『水俣の啓示』という本として出ていますが、その調査に相思社が協力していたという経緯がありました。そしてさつき話した水俣生活学校の成果も展示に入っています。これらのものすべて、すなわち、相思社による水俣病被害者支援の歴史全部がこの考証館に結集されました。

考証館の展示には文字資料が多いというのは確かなのですが、注目すべき実物資料もいくらかあります。たとえば、漁船です（写真10）。初期の水俣病患者のほとんどが漁民だったので、彼らが使っていた道具を展示しています。これらはみな患者が寄付してくれたものです。これは「ネコ実験の小屋」といって、水俣病の原因を調べるために、ネコを飼育してそのエサに工場廃水を



写真10 漁船



ネコ実験の小屋



怨の旗



水銀のヘドロ



『苦海浄土』の生原稿

写真11

かけて、発病するかどうかを試しましたが、そのときに使っていた小屋です（写真11）。現存する唯一のオリジナルだと思います。これは「怨の旗」、水俣病闘争におけるシンボルです。これは水銀のヘドロです。海底からすぐつてきたものです。これは石牟礼道子さんの『苦海浄土』の生原稿です。こういう実物資料が多少あります。

展示の特徴は、徹底して被害者の視点に立つて、行政がやつてきたこと、加害企業がやつてきたことを批判し、糾弾する、そういう姿勢です。一般的な資料館のような科学的権威みたいなものはまったくないけれど、私が言うところの「民族誌的権威」があります。どういうことかといふと、考証館は水俣病の多発地域にある、被害者と支援者が運営している、被害者からもらったものを展示している、相思社との関係で展示が許されている写真もありますし、「私の伝えたい水俣」というパネルでは、相思社のスタッフが、自分たちがなぜこの場所に来て、どんな生活をしていて、何を伝えたいかということを紹介している。こういった特徴から、展示内容に信用を付与する権威が生まれていると思われるのです。

考証館が伝えようとする物語を簡単にいうとこうなります。水俣病によつて漁民はかけがえのない自然と暮らしを失つた。水俣病は被害者はもちろん、水俣社会に社会的苦しみを生み出した。裁判闘争を基軸とする水俣病運動の成果として、被害者と加害者のあいだで政治的和解が達成された。それでもまだ水俣病問題は完全に解決されておらず、現代社会に生きる私たちの問題として今後も忘れてはならない。こういうことを訴えたい、と考証館全体で表現しています。

また、考証館を建てただけじゃなくて、それとともに彼らがいう「考証館運動」というものを

活動の中心に据えました。これは、考証館の運営だけではなくて、機関誌の発行や、出張授業、水俣病学習の支援、さらには「水俣まち案内」などが含まれます（写真12）。水俣まち案内とは、相思社のスタッフがガイド役となり、考証館を拠点にして水俣病事件に関連する場所を案内して回る活動です。訪問者の興味にあわせていくつかコースがあり、有料で実施しています。

最後に、簡単に考証館の機能をまとめたいと思います。まず、水俣病に関する啓蒙活動の拠点という機能があります。とりわけ水俣まち案内では、水俣地域全体がエコミュージアムとなり、人びとを案内して回る際の拠点として考証館が活躍します。また、地域の方や、かつて地域からよそに移り住んだ方などが対象になりますが、水俣病に関して相談を受ける窓口にもなっています。考証館は一貫して被害者の立場から水俣病について展示していますから、行政の立場から展



集会棟で語り部



海辺でまち案内



考证館案内

写真 12

平井 京之介

示をおこなつて いる水俣市立水俣病資料館を批判するような役目も果たすで しょう。そしてなにより、被害者の水俣病に関する知識を記録し蓄積する装置になつて います。考証館が資料を収集し、保存し、展示して きたからこそ、水俣病が今、「負の遺産」として注目されつつあるということが、確実にいえると思 うのです。

民間所在の被災資料から

地域文化を読み解く

葉山 茂（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員）

今日は「民間所在の被災資料から地域文化を読み解く」と題して、私が所属している国立歴史民俗博物館（歴博）が、東北地方太平洋沖地震の被災地のひとつである気仙沼で携わってきた活動の話をします。

二〇一一年五月以降、歴博は気仙沼で、津波で被災した個人の住宅の家財を集めて保全する作業をしてきました。ここではその活動の紹介をし、被災現場で集めて保全した資料群のなかから、ハガキ資料に注目をして、その分析の結果を紹介し、民間所在の被災資料から地域文化を読み解く意義を考えます。

私たち歴博のメンバーが保全活動の対象としたのは、気仙沼市小々汐地区にある尾形家住宅という、一軒の個人住宅です。小々汐地区は宮城県の一番北にある気仙沼市の集落の一つです。気仙沼市の市街地は、気仙沼湾の南西側に広がっています。小々汐は気仙沼湾を挟んで気仙沼市の市街地の対岸にあります（図1）。その集落で中心的な役割を担つてきた尾形家の住宅で私たち





図1 小々汐の位置



写真2 被災して屋根だけが残った
尾形家住宅



写真1 被災前の尾形家住宅
(勝田徹撮影)

は活動をしてきました。

尾形家住宅は茅葺き屋根の住宅です。前面が一二・五間、およそ二三メートルある家です（写真1）。この住宅は建てられてからちょうど一〇〇年目を迎えていましたが、東北地方太平洋沖地震による津波で一〇〇メートル流され、屋根が残りました（写真2）。居住部分は津波に流れて倒壊しましたが、結果的に多くの家財が流失せずに屋根の下に残っていました。そこで私たちはこの屋根の下に残った家財を集めることになりました。

この家が活動の対象になつた背景には、私たちの博物館の展示計画がありました。歴博は民俗展示をリニューアルする事業の一環として、尾形家住宅の再現展示を計画していました。尾形家住宅は江戸時代後期のこの地域の住宅の形態を残していました。そこで、生活空間、信仰空間としての日本の家屋の典型例としてこの住宅の再現模型をつくることになりました。

調査は二〇〇八年から進めていました。二〇一三年に公開する予定で調査をしていましたが、本格的な調査をする直前に津波が来て、住宅は被災しました。災害後、調査でお世話をついていたことや尾形家住宅の家財を保全することが地域の生活・文化の足跡を残すことにつながるとの見通しから、歴博の研究者が尾形家で被災した家財を拾うことになりました。尾形家住宅は地域を代表するイエであつたことがその判断の要因となりました。

尾形家を対象とした家財の保全活動の成果は、二つの展示として公開しました。ひとつは常設の展示で、尾形家住宅を部分的に再現する模型です。当初の計画通り二〇一三年に、私たちの博物館で公開しました。もう一つは「東日本大震災と気仙沼の生活文化」という特集展示です。常

設の再現模型を公開するまでの過程を展示することを目的としました。どちらも、被災地である気仙沼市からは遠く離れた千葉県にある私たちの博物館での公開となりました。その分、現在も、被災前の調査や被災後の活動の成果をいかに地域に還元していくのか、どのようにして地域の文化資源にしていくのかが、私たちに課せられた課題として残っています。

さて、私たちが活動の対象とした尾形家について詳しくみましょう。尾形家は集落の政治的、経済的中心を担つてきました家です。尾形家は江戸時代、イワシ網の網元として発展しました。

小々汐は、同族集団が集まってできた集落であると言われています。詳細にみると、必ずしも同族という言葉では片付けられない複雑な関係性が見えてきますが、ここでは同族集団の集落として話をします。被災前、小々汐には五四戸の家がありましたが、それらの家が尾形家と結びついていました。

この家は、政治的には江戸時代には、肝入という役職を担つていました。肝入は一般的には庄屋にあたります。大正時代になると村議会議員や村長を務めました。このように尾形家は、地域のなかで政治的に重要な地位を担つてきました。

尾形家は網元としてイワシ網を営み地域の人びとを労働者として雇うことで、地域の経済的な中心になり、また議会など政治にも関わることで、地域の政治的な中心にもなつていきました。地域のなかで、経済的にも政治的にも中心になることで、尾形家には多くの人びとが出入りするようになり、結果的に尾形家が地域の文化的な中心を担うことになりました。

一軒の住宅を文化財レスキューの対象にすることは、文化財レスキュー活動が公益性をもつた

活動であるという前提からみると、少し奇妙なことに感じるかもしれません。住宅は一義的には家族のプライベート空間です。したがってその住宅のなかにある物質文化も家族の生活を支える私物と捉えることができます。しかし同時に住宅は、集落内外の人が出入りし、交渉に用いられる空間であると考えると、公的な空間としての性格も帶びているとも言えます。人びとが出入りすることで、家を中心とした文化が成り立ち、人間関係が作られていくという意味で、住宅は集落内外の人びとの結節点ととらえることができます。

そうした性格を帯びた住宅は、一義的にはプライベート空間ですから、個人の活動の結果が反映されるというのはもちろんですが、同時に地域の人びとが活動してきた経過が、民具や文書などの物質文化というかたちで、蓄積されるという特徴があります。いつてみれば、一軒の住宅は地域の蔵の役割も果たしているのです。つまりプライベートな住宅という空間の物質文化を救うこととは、個人の活動の結果を救うとともに、地域の人びとの生活の一側面を救うという意味で、公的な活動に発展していく可能性をもつてているのです。

私たちは一軒の家に公的な側面を見出して、文化財レスキュー活動をしてきました。被災の現場から家財を応急処置の場所に運ぶ役割は歴博が担いましたが、クリーニングや資料整理の作業については気仙沼市教育委員会と市民の方々に協力していただきました。また資料保全の方法については、国立民族学博物館（民博）の先生方の助けを借りました。その結果、気仙沼市での文化財レスキュー活動については、歴博が資料分析を担い、民博が資料環境保全の構築に関する調査研究をおこなう体制ができました。そして、それぞれ展示、出版、講演などで成果を報告する



写真3 市民参加による尾形家資料の整理作業

とともに、その成果を気仙沼市に還す流れができました。

活動に参加した市民の方々は、気仙沼市教育委員会が気仙沼市シルバー人材センターに依頼して募集した方々です。結果として、気仙沼市での文化財レスキュー活動は、博物館の専門家のみではなく、市民が参加して進める事業になりました（写真3）。資料の洗浄、簡単な修復、資料の整理、資料リストの作成の全ての工程に、市民の方々が参加しました。そのなかで、参加した市民の方々が考えたり、みたり、過去に発見したりしたことをまとめておいて、私たちに教える流れができました。気仙沼市の活動は、市民の方々が地域文化の再発見という意味で大きな役割を担つてきたのです。作業の過程で、地域に関するさまざまな事柄を我々に伝えてくださり、それをわれわれが受け取つて、新しい調査をする循環ができるようになりました。

作業の結果、尾形家から救い資料化した家財は一万九八〇〇点余りになりました。資料はモノ資料と紙資料に分けられます。モノ資料のうち、住宅建材がおよそ二五〇〇点、民具が二〇〇〇点、ハガキが五〇〇〇点、手紙封書が五三〇〇点、領収書その他が四五〇〇点になりました。

こうした資料はせつかく救つて保管しても、活用を考えなければ死蔵になってしまいます。皆が存在を忘れて、収蔵庫だけが満杯になつているという状況です。そこで、どう活用できるかたち

につくりあげていくかが課題となります。資料を活かすには、物質文化・文書資料を残す状態から一歩踏み込んで、それらの資料を意味付け、地域の文化的な資源にすることが必要になります。以下では、そうした作業のなかから、ハガキ資料に注目して、地域のどのような文化がわかつてきたのかを紹介したいと思います。



写真4 被災後的小々汐における大規模な土地の改変と景観変化

ハガキ資料を対象とした分析調査をするようになつた背景として、二〇一一年以降高台移転や、防潮堤建設などにより、地域の生活空間が劇的に変化するという状況が生じたことがあります。こうした劇的な変化が工学的な知識を背景に急速に進んでいく一方で、地域ではその変化を十分に受けとめられていない、という現実があります。

例として尾形家住宅があつた場所の変化をとりあげてみたいと思います。写真4の赤い矢印の部分に尾形家住宅がありました。しかし、現在は写真にみられるように土が盛られて、道路ができあがりつつあります。こうした変化は、一見すると記憶に関係ないようですが、景観の変化は過去の営みを回想する手掛かりを失うことにつながるのではないかと思います。

ここでは、高台移転や防潮堤建設などの善し悪しの議論はしませんが、人々に支えられてきた

地域の生活文化は、景観の急激な変化とともに忘れられてしまうかもしれません。そこで三陸の漁村という数十年に一度の頻度で被災を受けるような地域で、津波災害をどのように乗り越えて来たのかを明らかにし、地域の現在の文脈とは異なる災害復興の姿があつたことを明らかにしたいと考えました。

人びとが災害をどう切り抜けてきたのかを知ろうとするとき、ハガキ資料は有効な手段となります。ハガキは一枚一枚に消印が入っており、それぞれのハガキが投函された日時が判別しやすいこと、文面に時代ごとの地域や家の関心事が反映され、また差し出し人や、内容から家族や地域内の人びとの移動が把握しやすいという特徴があります。このハガキ資料の重要性を発見したのは、資料の洗浄や整理をする市民の方々です。

彼らは救つたハガキのなかに、災害を見舞うためのものがあることに気がつきました。私は作業をする方々からその情報を教えてもらつて、内容を読み込むなかで地域の社会関係を知る目的でハガキ資料が使えることに気がつきました。その後、五〇〇枚近い資料を整理するなかで時系列に並べて、内容を把握し、家や集落の変化を復元できることがわかりました。

尾形家から救つたハガキ資料群の特徴として、よそから尾形家に届いたものだけでなく、尾形家から外に出て活動している家族に宛てたハガキも残つていたことが挙げられます。尾形家人びとは、軍隊や進学などでよその土地に出たとき、出先で受け取ったハガキを残しておき、出先を引き払うときに実家に持ち帰っていたようです。家で受け取つたものと、家から投函したものとの両方が残ることで、どのような話題が家族間で行き来していたのかが明らかになります。

謹
賀
新
年

舊年中は格別の御引立を蒙り難有奉存候
尙本年も倍舊の御幸願徳に希上候

正月
元日

廣島縣
沖田屋
安藝郡
音戸町

漁網商
今河野格一商店

印紙製造元

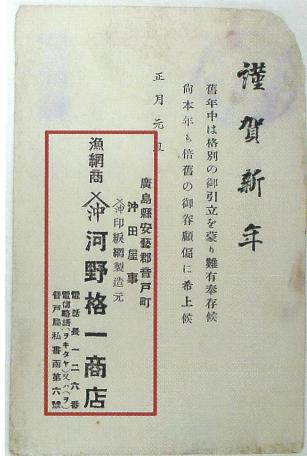


写真5 漁網会社から尾形家に送られた年賀ハガキ

そこで、ハガキから過去の生活を掘り出してみようと考えました。以下では明治末期から昭和二〇年の終戦までの期間に尾形家に届いたり、尾形家から送つたりしたハガキに注目します。この期間に注目するのは、一九三三（昭和八）年に昭和三陸大津波があつたからです。その前後で生活がどう変わつていったのかをみておきます。一九三三年までのハガキをみると、ハガキに書かれる内容は外部との事務連絡、年賀状が多くなっています。一九三四四年から一九四五年では、家族の状況を知らせる内容が多くなります。ハガキにどのように社会関係が表れるのか、家の仕事がどのように表れるのかについて、二つの事例を示します。

まず、一九三三年までのハガキです。これは広島県の音戸町から送られた年賀ハガキです（写真5）。イワシ網に使う漁網を売る漁網会社が送つたものです。つぎに三四四年以降の家族の状況を伝えるハガキのなかでは、「昨日はカキを剥きました。一本三円から、一升四合ほど出ます」

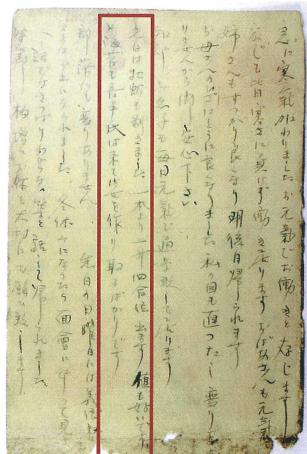


写真6 家族から士官学校に進学した長男に送った家の近況を知らせるハガキ

という記述がみられます（写真6）。このように、ハガキには生業活動の様子が克明に書かれていました。このハガキは一九三四年に長男が仙台の陸軍学校に進学し、家を空けるのですが、その間に次男が長男に宛てて書いたものです。事細かに生業の報告をしているのが特徴です。このハガキからわかることは、長男が軍隊に出ていること、次男が長男の代わりをしていることです。次男の記述から家の生業活動の様子、集落内での社会関係が見えてきます。

そこでハガキに見える一九二五年から一九四五年の尾形家の家族と家の生業の変化をみます。まず家族の変化ですが、この間の尾形家は、結婚適齢期の娘が外へ出る、あるいは、青年期の前当主とその兄弟が軍隊に入る、出征するということにより、家を支える人がどんどん減っていくという時期です。簡単にいうと一九三三年に前当主であった祖父が亡くなります。この人の死が尾形家の人員の変化に大きな影響を与えます。一九三三年に津波がありました。津波の発生によつて漁業から撤退していきます。一九三四四年に長男が陸軍の学校に入つていきます。三八年には次男、三男も軍入りの道を選んで行きます。この状況を少し詳しくみます。これは尾形家の家族の状況の変化を表したもので、変化のあつた年ごとに家系図で動きを表しています（図2）。

一九二五～三四年の変化です。二五年には一〇人いた人口が、三三年にはナンバー1のおじいさんにある人が亡くなつて一人減ります。図のようになンバー3は6～11の父親ですが、この時点ですでに亡くなっています。一九二五年に亡くなつていますが、関係がわかるようにここでは図示しています。

ナンバー1は、ナンバー3が若くして亡くなつたため、ナンバー3に代つて家族の父親役を担

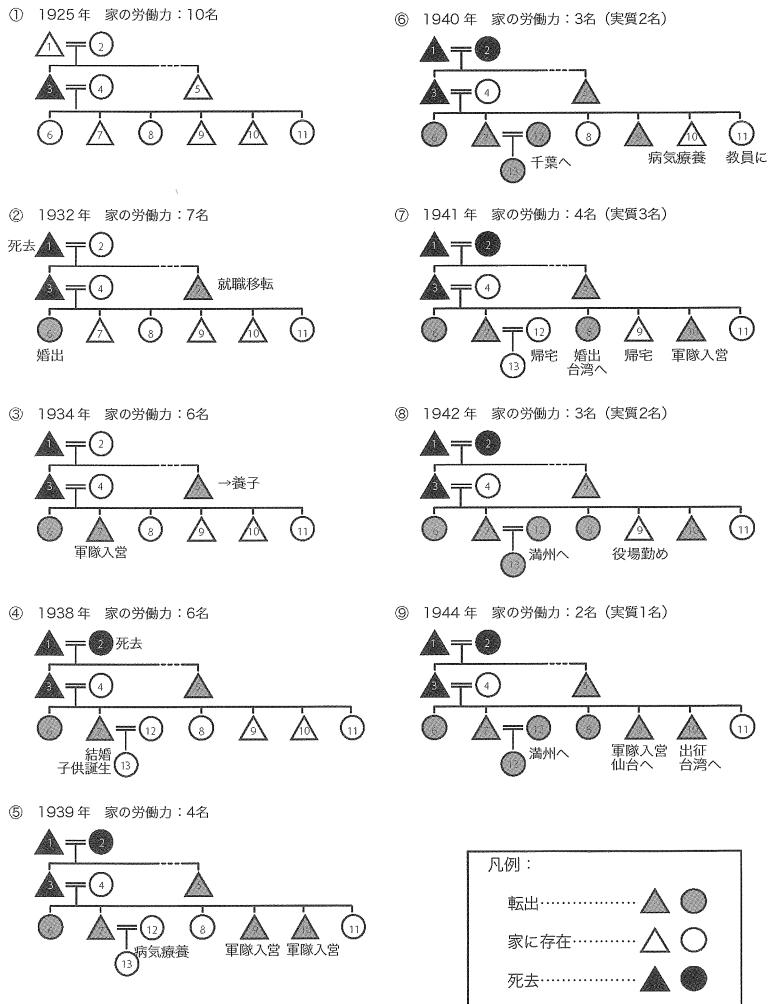


図2 尾形家の家族の移動（1925～1945年）一尾形家はがき資料より作成

つっていました。そしてこの人が、尾形家のイワシ網漁の経営を仕切つていきましたが、亡くなつたことで経営が縮小していきます。それを決定づけたのが二三年の津波被害です。この津波で漁網などが損傷しています。

この津波のあと、長男にあたるナンバー6が軍隊の仕官になることを志して仙台へ出て行きました。婚出や就職によつて家を出た人もあり、尾形家で家業を担つて働く人数は六人になりました。次に三八～四〇年の変化です。三八年に長男が結婚したことに伴つて新たにナンバー12が家族に加わりますが、三九年にナンバー12は病気になります。三八年には、9と10の人がそれぞれ仙台と東京にある陸軍の士官学校に入ります。それによつて尾形家の労働力は四人に減ります。

四〇年になるとナンバー10の人が病気療養で帰つてきて、ナンバー7とナンバー12が千葉へ出ていってしまいます。結果労働できる人が三人になります。これが四一～四四年の変化ですが、この時期、尾形の人びとは地域外へ出たり地域に戻つたりをくり返していました。そして結果として、尾形家の労働人口は減つてきます。四二年にはナンバー6が満州に派遣となり、ナンバー12がナンバー6とともに満州に渡り、尾形家に残つた人は三人になりました。ナンバー11は教員になりますので、実質家業を担うことのできる人は一人になります。四四年には、この世代のお母さんにある4の人だけが残つて、もう一人残つたナンバー11は教師をしてるので、家の労働力は一人という状況になりました。この状況になると、尾形家では、生業が成り立たなくなりました。

以上のように、ハガキに注目すると、人びとが津波災害の前後にどのように動いていたのか、

no.	日付	投函地	宛先	差出人	宛名	内容
4575	昭和・不明	広島県安芸郡音戸町	小々汐	河野格一商店	定七（貞七）	広告—その後注文がないが、どうか
4545	不明	広島県安芸郡音戸町	小々汐	河野格一商店	貞七	年賀
4559	不明	広島県安芸郡音戸町	小々汐	河野格一商店	貞七	年賀
4574	不明	広島県安芸郡音戸町	小々汐	河野格一商店	貞七	通信—問い合わせの網の注文のお願い
4556	不明.02.10	三重県四日市市	小々汐	三重製綱合資会社	貞七	通信—注文の不備についてのお願い
4573	1923.08.02	広島県安芸郡音戸町	小々汐	河野格一商店	貞七	広告—その後注文がないが、どうか
4551	1923.08.25	広島県安芸郡音戸町	小々汐	河野格一商店	貞七	通信—昨日借りた傘の扱い
4424	1924.05.06	気仙沼町	小々汐	麻屋商店	貞七	広告—白ツゲ網を特価で提供する
4446	1925.03.09	広島県安芸郡音戸町	小々汐	河野格一商店	貞七	網のセールス
4476	1925.05.09	気仙沼町	小々汐	奥田利喜松商店	貞七	網のセールス
4407	1925.10.02	広島県安芸郡音戸町	小々汐	河野格一商店	貞七	網を出荷した
4523	1926.01.01	気仙沼町	小々汐	奥田利喜松商店	貞七	年賀
4558	1933.03.03	広島県安芸郡音戸町	小々汐	音戸漁網株式会社	貞七	津波見舞い
5427	1936.01.01	広島県安芸郡音戸町	小々汐	河野格一商店	貞七	年賀

14件中：広島県—10件、三重県—1件、気仙沼—3件

表1 漁網会社から尾形家に送られたハガキ

どこに移動して、家族の形態がどのように変化したのかが克明に見えてきます。

次にハガキからみえる社会関係に注目してみましょう。生業に関連して漁網会社からのハガキに注目すると、広島県から一〇通、三重から一通、氣仙沼から三通が届いていることがわかります（表1）。これらのハガキは氣仙沼内部だけでなく、地域を越えた外部との関わりが密接であつたことを示しています。

写真7は尾形家がイワシ網漁をやめて七年後に、イワシ網漁を止めたあとの漁業権の状況について尾形家が問い合わせた回答のハガキです。このハガキが書かれたのは一九四〇年です。尾形家からの漁業権の問い合わせに対して、このハガキでは、の海面利用を尾形家にも誘ったものの、家庭の事情で辞退しており、尾形家の漁業権は消滅している旨が書かれています。一九三二年に大黒柱であ

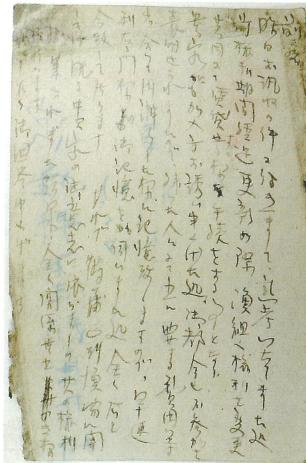


写真7 漁業権の確認依頼に対する回答のハガキ

尾形家のハガキ資料が示すことを整理しましよう。昭和初期から終戦の尾形家は、イワシ網漁の経営が悪化して、一家の大黒柱が死去し、さらに津波の被害に遭いました。津波をきっかけに尾形家はイワシ網漁の経営をやめます。そして、海の活動から離れ、田畠に労働力を集中していきます。同時に外部の社会、軍隊の士官になるという方法で家の再興を目指しました。長男が満州にいき、三男は台湾に出征しています。ハガキをもとに一つの家族の災害に対する対処をみると、災害

つた祖父が死去したことで、尾形家では一時的に混乱が起きますが、その混乱のなかで漁業から離れる選択をすることになります。

イワシ網漁をやめたあと、尾形家はこの地域で津波被害後に広まつたカキ養殖にも関わります。実際には尾形家はカキ養殖をせず、分家に手伝つてもらう形での参入でしたが、戦争により分家の労働力提供も厳しくなつてきたと判断して、カキ養殖もやめます。

以上のこととは、尾形家は海とともに生きて來たのですが、災害をきっかけに海から徐々に離れていたことを示しています。海から離れる代わりに、尾形家は農業に力をいれます。一九三五年～三九年にかけての期間、海から離れ漁業の話題が減つていく代わりに、ハガキでは農業の話題が出てくるようになります（表2）。

no.	日付	表記地	発先	差出人	宛名	内容	おもな活動	
							農業	漁業
5175	1935.07.19	小々汐	仙台	次男	長男	夫人お嬢様で、美徳をいた。		
5205	1935.04.22	小々汐	仙台	次男	長男	田のクロソリ、苗づくり、麦の育成、漁業の父、義理親父		
5210	1935.01.01	小々汐	仙台	次男	長男	時代は大したことないばかりか、苗代、田代、大作代		
5229	1935.09.03	小々汐	仙台	次男	長男	お盆前の前の暮取り、娘が嫁子とみなされる。斎、漬け干すで入浴。喜多川屋製糸量販部		
5236	1935.08.10	小々汐	仙台	次男	長男	召みに黒鯛が飛び立つたのでした。海水が流れが大きめ、海水が流れました。オオクビドウが水が流って石垣が洗い立た。		
5245	1935.09.27	小々汐	仙台	次男	長男	お母さん(海野)が死んでから、お母の隣町のおわる		
5247	1935.07.28	小々汐	仙台	次男	長男	お母さん(海野)が死んでから、お母の隣町のおわる		
5277	1935.11.03	小々汐	仙台	次男	長男	サツコ酒をいろいろ。お母の泥引は終った。妻も終った		
5278	1935.06.14	小々汐	仙台	次男	長男	お母の夫婦が食事して、併せて亡くなった。		
5279	1935.12.02	小々汐	仙台	次男	長男	雪が降りました。風の吹く年だつた。		
5281	1935.12.09	小々汐	仙台	次男	長男	雪が降りました。太田の母が泊りに来た。隣のシンチャヤが亡くなつた。		
5345	1935.12.17	小々汐	仙台	次男	長男	雪が4日続いて、雪が降りました。朝までお風呂で寝て、隣のエビス講		
5347	1935.11.16	小々汐	仙台	次男	長男	作は毎日けている。今は海水藻がちょうどいい。家の畠田へ帰る。地図、飛行機		
5351	1935.04.22	小々汐	仙台	次男	長男	ゴカンが豊作でした。馬鹿が少しついている。		
5553	1936.01.11	小々汐	仙台	次男	長男	スハキが終った。隣子店が始また。		
5648	1937.10.31	小々汐	仙台	次男	長男	おばさん(おじいさん)さしげき。日曜海水が終った。先日お盆祭、一日八幡神社に夕張りした。		
5666	1937.12.07	小々汐	仙台	次男	長男	カキ剥きをした。おばあちゃんが4日出でない。海水も平安が出来てはせを作ったのであるばかり		
5709	1938.01.13	小々汐	仙台	次男	長男	お母の夫婦が来ました。娘が黙るのでので手が足りて困っている。		
5724	1938.01.20	小々汐	仙台	次男	長男	田端のお母さんが豊作でした。見物をして貰いました。明日はGW風呂なるもののは無くなつた。		
5743	1938.03.06	小々汐	仙台	次男	長男	田端のお母さんが豊作でした。お母がお出でをして寂しい。		
5839	1939.01.30	千葉	東京	次男	長男	明日は隣居の農業者さんで手伝いに行く		
5860	1939.08.19	千葉	小々汐	次男	母	軍人になったからには最初から思ってはらつて僵しかった		
5872	1939.11.01	千葉	東京	次男	三男	義理親父やおじいさん(おじいさん)お母さん(お母さん)から優しくあった。		
5902	1939.11.04	千葉	小々汐	次男	三男	身の心が少しむかつく。元気のいいおじいさん(おじいさん)お母さん(お母さん)から優しくあった。		

全体：26件（おもな話題の内訳：農業12件、漁業7件、家族6件、行事6件、その他3件）

表2 1935~1939年の間に家から長男に送ったハガキの内容

前の生業を再興するのではなく、災害をきっかけに生業の方針を大きく変えたことがみえてきます。一般にいま災害が起こると元に戻そうという話が出てきて、いかに生活を復旧するかという話になるのですが、過去の人びとの動きをみると、災害を超えて新しい活動に挑戦していく流れがあるようみえます。

以上の話をまとめます。歴博は宮城県での活動をしてきました。その活動の特徴は、気仙沼市教育委員会の協力を得て、地域で生活してきた市民の方と協業することによって進んできたことにあります。市民参加は私たち歴博の立場からすると戦略的な結果ではなく、偶然の産物でした。しかし市民参加を得たことで、私たちは市民の方々がこれまでの生活で培ってきた経験、記憶、知識に直接触れる機会を多く持ちました。そして、地域の人びとの視点からの情報を、整理作業や研究に反映することができるようになりました。

こうした活動はいわば、参与観察型のフィールドワークであるとも言えます。時間を共有し、ともに作業をし、課題を解決する方法を探っていくことで、文字情報だけではない身体感覚によつて地域の方々が理解している事柄に少しずつではありますが接近できるようになつてきました。民間所在の被災資料から地域文化を読み解くことは、展示、論文、市民講座などで成果を公開することを念頭におきながら、こうした身体感覚の部分を含む地域の人びとの感情や生活の構築の仕方にせまつていく嘗みなのだと考えます。まだまだ課題を多く残していますが、今後もこの活動を継続していきたいと考えています。

刺繡の復興から探る帰郷への道

胡 家瑜（国立台湾大学前教授）

私は胡と申します。国立台湾大学人類学部と人類学博物館に所属しています。今日はここに来れたことを嬉しく思います。

私の方からは台湾における博物館がいかに災害の体験に取り組んでいるかについてお話をいたします。今日のテーマですが、「刺繡の復興から探る帰郷への道——小林村の再建過程における博物館の役割」です。

小林村というところは、台湾で二〇〇九年の大きな台風、日本では

台風八号、台湾での呼び方はモーラコット台風ですが、この台風で壊

滅しました。発生したのが八月八日なので“ハチハチ台風”とも呼ばれています。この台風によって台湾の山間部が大きなダメージを受けました。小林村は、高雄県甲仙郷という山間部にありますて、川に接しています（図1）。台風で小林村の裏の山が土砂崩れで全部落ちてしまい、村がまるごと埋まり、五〇〇人がなくなりました。村で一番村のはずれにあつた家屋だけが残さ





図1 被災前的小林村

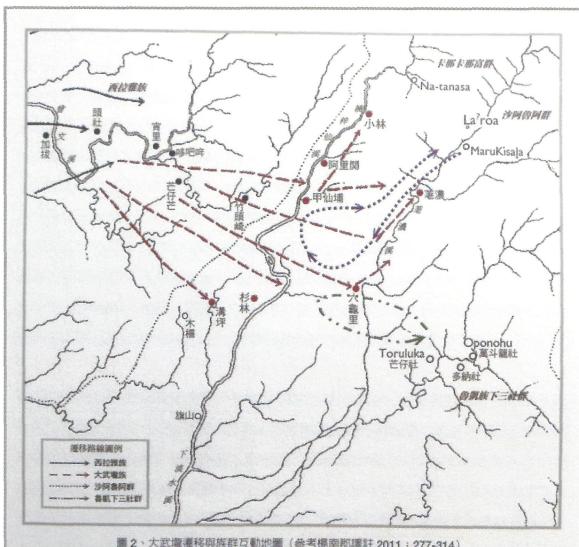


図2 平埔族の移動経路図

れて、今はお寺になっています。この災害が発生する前は、台湾の人は小林村についてあまり知りませんでした。山間部に位置し、辺鄙な場所で、平埔族が住んでいたエリアでした。高雄県と隣の嘉義県の境に位置している村で漢民族が入ってきてから、徐々に平埔族の文化やアイデンティティを失っていきました。平埔族は漢民族が入ってからは、仕方なく、自分の居場所を移動し

なくてはならなかつたという事情があります。



写真1 小林村の平埔族の人々による調査風景

図2に平埔族が移動した経路を示します。当時の台北帝国大学、今の台湾大学の前身だった大学が作成しました。当時の調査では移動していくた人びとの部族の名前は大武龜族と呼ばれています。元々この人たちは台南の平野部に住んでいました。図2の矢印のように台南の平野部から徐々に山間部へ移動して、最終的には先程紹介した、楠梓溪流の上流に住みました。たくさんのグループをつくっていましたが、おそらく一九一〇年、あるいは二〇〇〇年に、今の小林村のところに移住していました。国民政府がこちらにきてから、村に名前をつけようとしたときに、当時ここに駐在していた日本の小林さんという警察官の名前を使いました。

台湾では、一九九〇年代になると、原住民も自分の文化やアイデンティティを探しはじめます。もちろん、小林村の平埔族も自分たちの文化を取り戻そうという動きがありました。一九九九年の台風が発生する前には、小林村の人たちが私たちの博物館を訪れて、彼ら等の元々の祖先の残したものを探そうとしていました（写真1）。どうして私が勤務している台湾大学の人類学博物館にきたかというと、自分たちの部族の集落のなかでは、すでに五〇年代、六〇年代以前のものがみつかなかつたからです。その後、文化財に関する講座活動や平埔族の伝統の夜祭りの再開などに取り組みました。また、小学校の空き教室を利用して、見つかった資



図3 3箇所に分散した小林村

料や文献などを集めて資料室にするという活動をおこないました。しかし、このような活動をしていた場所も台風でなくなつてしましました。なお、災害発生時には、最初に救助したのはもちろん命や財産ですが、文化財の救出もしょうとしていました。

残された住民は元々の小林村には住めなくなりたので、分散して三つの拠点に移りました（図3）。元々の小林村にもつとも近い位置につくられたコミュニティが五里埔小林です。あと日光小林や小愛小林という二つのコミュニティがつくれられました。このコミュニティは、元の小林村からはかなり離れていて、車で約一時間の距離です。これらの新しい場所に移住した村人は、政府が提供した家で生活できますが、土地の所有権を持つていません。また、農業をできる土地もありません。農業をしたければ、ほかの土地を借りるしかありません。そうなると、借地のコストが高くなり、負担が大きくなります。ほとんどが農業を生業としていた村人たちが、これから生業をどう立てればいいのかが問

題になつてゐるのです。

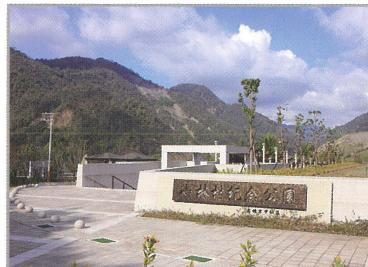


写真2 小林記念公園

元々の小林村では新しく家は立てず、小林記念公園をつくりました（写真2）。被災した小林村の復興過程では、さまざまな討論をしました。そのなかでよくでてきたのが、村の再建、あるいは村をきれいにするとともに、平埔族の文化をこの災害をきっかけに復興しようという話ができてきました。小林村の人びとは台風被害による喪失感がひどかったのです。この喪失感のなかには命、自分の土地、記憶、元々もつていた文化資産がなくなつたという気持ちが強くありました。のちにこの小林平埔族の文化博物館を設立するときには、この博物館が、平埔族の文化復興のひとつの中核になればと考えました。そして、住人が主体となつて、博物館の職員はあくまでもサポート的な役で、来館者に平埔族の文化を広く知つてもらうようなものにしました。また、この文化博物館を通して、地元の人たちの経済面のお手伝いができるいかと考えました。このような思いで小林平埔族群文物館という博物館を設立しました。博物館の場所は、もとの小林村に一番近い、五里埔小林に設置しました。博物館の設立は、所在地の高雄市の歴史博物館が主導し、私が所属している国立台湾大学の人類博物館が協力をしています。

小林平埔族群文物館では、原住民の物質文化の研究をたくさんしました。わたしは、小林村の昔の文物を保存することが公共の博物館の一番のポジションだと思つています。展示場は、大き

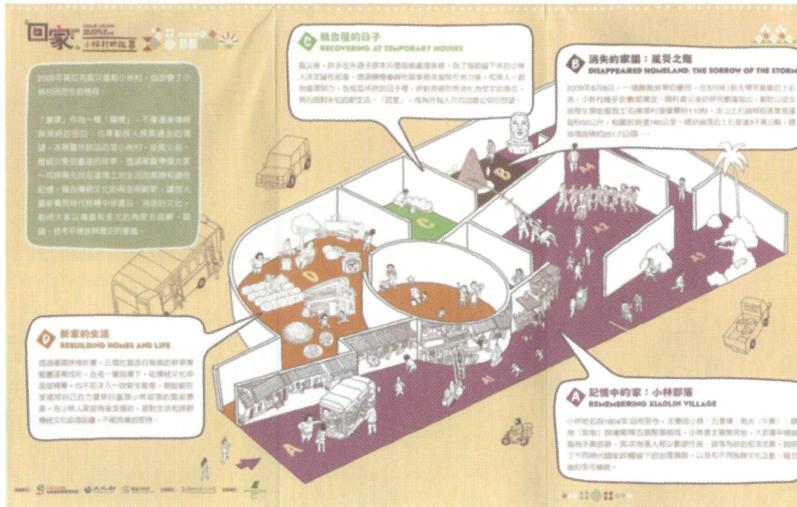


図4 小林平埔族群文物館の展示場図

く四つに分けています（図4）。実をいうと、これも私たち側の博物館の事業からいうと最初の計画からはかなり離れた結果になっています。ただし、この博物館設立の際の一一番の思いは、先ほど申し上げたように、住民が参加できるように考えていましたので、このプランを採用したということになります。入口から、最初にA「記憶の中の家、小林部落」というテーマから展示が始まります。次にB「災害の痛み——家園の消失」にはいります。つまり、Bは、災害のことを語る展示ゾーンですが、とても小さなスペースとなっています。そのあとに、C「プレハブに住んでいた日々」、D「新しい家での生活」となります。もともと、私たちの構想では、この台風の灾害がいかに小林村に影響したのか、そこを入口として展示を紹介したいと思っていました。しかし、村民たちとの話し合いのな

かでは、彼らがそういったエリアをつくることを拒否しました。なぜかというと、こちらの文物館は彼らが住むエリアに設置するので、毎日、目に触れることがあります。彼らの文化を示すものはほとんどが失われましたが、その失われた文化は懐かしいものなのです。そこで、かなり大きな面積を占めることとなつたのです。なお、失われた昔の家の復元家屋では、小林村の昔の生活の様子を展示しています。飲食、祭りの様子、農業など生業の様子、そして彼らが一番に大切に思つてゐる刺繡を展示しています。

こちらが展示場の様子です（写真3）。ここでは、彼らがとても懐かしいと思い、これが自分たちの生活風景だと思う町の様子を復元しています。一部はビデオなどマルチメディアなどの装



写真3 昔の小林村の再現展示



写真4 刺繡の展示



写真5 人類博物館が提供している服飾展示

置を利用して祭りの様子も再現しています。小林村の現存の衣服は、刺繡を多用するという特徴があるので、刺繡の展示をしています（写真4）。この展示では、台湾大学の人類学博物館が所蔵している刺繡の服装を借用し、展示しています（写真5）。一〇〇年近く前に作られた刺繡の作品ですが、実は地元の村民の目に触れるのは初めてでした。台風に関するコーナーは、おそらくこの会場の面積の四分の一程度の小さなものです。そして、そのコーナーのなかにはたいした資料はありません。これは、村民の要望で具体的な写真や映像はあまり展示したくないという事情です。毎日、目に触れる文物館なので、そこでもう一度亡くなつた家族やふるさとの記憶を思い出したくないということが理由でした。ここでの展示品は、例えば、カレンダーが置かれています、その日付は災害が発生した日でした。土砂崩れが発生した時刻で止まつたままの時計もあります。テレビの展示では、雨によって信号がとざされていて、その画面がなくなつたという画面になつています。とても抽象的な手法で、村が瞬間的に全部なくなつたことを示しています。また、もうひとつ重要なテーマの「再建の道」では、地元の村民がいかに従来の生活を立ち直して、今的生活を作つているかということをみてもらう仕掛けになつています。

このような博物館を設立していくなかで、私たち台湾大学人類学が携わつていったのが刺繡の研究でした。私たちがやつていた研究は博物館が所蔵していたものだけでなく、そのほか、台湾国内八つの博物館に関連する刺繡のコレクションがありますので、それらも含めて刺繡に関する研究結果をまとめ、図録を出版しました。この図録では、合計七〇件くらい大武壠の刺繡に関連する研究をまとめ、それぞれの作品について簡単に分析し、紹介をしています。実は、日本の天

理参考館には五五件の小林村に所属している平埔族の刺繡作品が所蔵されています。



写真6 刺繡調査



写真7 刺繡の勉強会

この図録を出版したときの意図ですが、刺繡がひとつの技術として地元の生業となり、この刺繡の技術で村を活性化できればと考えていました。ただし、最初は、地元の女性たちはあまり興味を示してくれませんでした。日々の生活にいっぱいいっぱいで、そこに刺繡なんて、という感じでした。また、刺繡には時間がかかるので、そんなに時間をかけて、お金になるかわからないものを勉強する気はないという意見でした。図録では、全部電子化して、展示方法も見られるような形にして画像を出していました。そして、出版した図録は、小林村の一軒一軒に贈りました。図録を贈った理由は、祖先が残した重要な刺繡の文物で、みんなの記念に手元においてもらいたいという思いがあつたからです。意外なことに、本が出版されて一ヶ月後に問い合わせの電話がありました。特に若い人がこの図録を見て、自分の家で刺繡を始めたようになりました。刺繡を小林村で普及しようと思つたときは、最初、私たちは、政府などから補助金をもらってソーシャルワーカーとしてこの刺繡を広めようと考えていましたが、住民が



写真8 新しく作られた刺繡の作品

消極的な反応だったのでうまくいきませんでした。意外にも出版されたものをみて、若い人からの意見で自らやりたいうことになつたのです。彼女たちは、図録を見て、自分の祖先たちがこんなにも素晴らしい文様を作ってくれたのだから、これがなくなってしまうのはもったいないといつてくれました。そこで、台北の博物館にいって実際にみて刺繡の勉強をしたいという若い人の連絡を私は受け、案内することにしました。そして、部族の若い人たちが一、三回グループをつくつて、台北の博物館にきてくれました（写真6）。さらに自分たちで刺繡の先生をお願いして、村にきて教えてもらうことをしました（写真7）。ここでは、昼間は各自仕事して、夜、集会所などで刺繡の技術の研究をしていました。そして、一年後に彼等から成果を見せたいという連絡を受け、訪れました。訪れると図録の刺繡のようにすばらしいものを作ってくれていました（写真8）。このように刺繡に挑戦しようとするというのは、ただ単に文化を復興しようというよりも、災害の痛みから立ち直る癒しを求めたいというほうが大きかったのではないかと私は思っています。その例として、家族は皆亡くなり、一人生き残った方がいます。彼女は普段仕事が終わって家に戻ると一人になるので、図録を見て、ひとつひとつ図録に載っている通りに刺繡をやってみようと思いました。彼女が言うにはこの図録の刺繡をしているときには、集中できる、ほかのことを考えなくて済む、自分がなんらかのかたちで、過去とつながることを



写真10 スニーカーに入れられた刺繡



写真9 テラスに描かれた刺繡の文様

とができると言つていました。

このような刺繡は、新しい生活用品や道具のなかにも応用されできました。例えば、これが再建された新しい家ですが、その二階のテラスに刺繡の文様が描かれています（写真9）。また、もともと農業をやっていた人は、新しいものを栽培しなくてはいけませんので、ウメやウコンなど新しい経済作物を栽培します。その商品の新しいパッケージにも刺繡の文様が使われています。さつき紹介していく文物館ですが、そのショップのなかでも刺繡に関連する商品がお土産として売られています。私、とても感動したのは、刺繡が彼らの生活のなかに溶け込んで、本当にいろんなところに見られるということです。例えば、お母さんが、子どもの衣類やスニーカー、普段生活で身につけるものにちょっとした刺繡を入れています（写真10）。自分の愛する人のために刺繡するのが一番大切だとお母さんが言つっていました。自分の家族、友人にきれいなものを身につけてもらいたいと。そして、彼らがいま作っている刺繡は研究で他の部族とまったく違った文様があるとわかりました。例えば、花火のような文様（写真11）は、近辺によくみられるアザミからきたイメージです。現在、



写真 11 アザミをイメージした文様

この刺繡の文様は、自分のたちの文様として、ほかの企業に大量生産されることを防ぐために特許を申請登録しているところです。刺繡をひとつの文化資産として運用している動きです。これは地元の住民が、刺繡は自分たちの文化であると認識しているということを示しているといえます。現在、刺繡は、小林村の人たちが過去を体験する技術となっています。何回か彼らはマスコミからインタビューを受けましたが、レポーター達に対して、刺繡を通してふるさとに戻る道を探りたいといつていきました。伝統のお祭りのときには、できれば伝統の衣装を着たい、その上に刺繡されているものがより美しくありたいということを思っています。

衣装も私が出版した図録を参考にして、正しい文様を勉強して、あるいは正しい着方を学んでいます。そして、図録を参考にして作り直した服装で、祭りをおこなっています。

このような文化の再興に携わってきて、いくつかの反省点もあります。過去の博物館が文物を収集するとき、往々にしてそれらがもともと所属している場所から切り離して、別のところで展示することになります。そうした博物館に収藏された文物は、もともとの所在している地方の文化や生活とは関連性がなくなってしまいます。ただし、そうした関連性がなくなつたものでも、もう一度、文化が所在していた地域であらためて文化として認識される可能性もあります。つまり、

地方の人びとが文物と接触する機会さえあれば、もう一度の生活のなかにその文物を取り戻すことができるのです。また、もうひとつ気がついたことは、博物館に収蔵された文物は、その地方を復興するためのツールとして使うことができ、もう一度、地元の人材育成に使えるものだと認識しました。また、その地元の人の行動を促すためには、具体的に目に触れるものがあれば、直感的に行動につながるものになると思います。もちろんそのなかで一番重要なのが、地域の人びとが自ら参加したいと思つてもらうことです。その地域の主体性が成立してから、持続できるものとなつていくでしょう。

このような動きのなかで、いくつか考えたことがあります。その被災地の文化財の救出はおそらく最初に博物館が関わります。また、救出した文化財の展示を通して一般の人に災害の経験を共有してもらうことも大切です。ただし、長期的な目でみると、被害者の観点から、実はそれ以外にもたくさんやることがあります。ひとつは、ダメージを受けた心の治療、これはおそらく集団的にすれば、ある程度の確立した方向性がみえ、同じような動きがとれるのではないかと思います。もうひとつは被害者の人びとが過去の生活や記憶がなくなってしまうことに対して、とても焦りを感じているかもしれませんので、そういう文化的な葛藤に対するケアも彼らには重要です。また雇用の機会、経済的な価値を持つていて商品の開発なども大切です。そして、なによりも被害者が一番気にしているのは過去の根源、自分のルーツはどこにあるのか、自分の独自性はどこにあるのか、存在価値はどこにあるのかということです。今は村のホームページがありますして、そこに掲載している言葉に、「私が刺繡していると私が存在しています。」とあります。

さきほど言つていた図録は今日お持ちしましたので、みんなの館長にお贈りしたいと思いま
す。別府大学の博物館にもご入用でしたらお贈りいたします。
以上、私の今日の発表でした。ありがとうございました。

討論

話者 平井京之介（国立民族学博物館教授）

葉山 茂（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員）

胡 家瑜（国立台湾大学前教授）
コーディネーター 日高 真吾（国立民族学博物館准教授）

曰高：国立民族学博物館で平井先生と同じように総研大でも指導しております日高ともうします。災害の経験から学ぶ博物館活動ということについてお三方の発表について聞いていただきましたが、このテーマに沿ったかたちで、もう一度発表者のみなさんのご意見をお聞きしたいと思います。

最初にお一人ずつにお聞きしたいことがありますので、質問していきたいと思います。

平井先生のご発表は相思社における水俣病被害者支援の歴史を展示し、人間の引き起こした災害である水俣病という事件に対しての社会の関わり方の提示、あるいは、そのあり方について来館者にどうしたらいいんだろうということを問う展示をおこなつたと、まさに実践してきた人たちだからできる展示をご紹介いただいたというものでした。この平井先生の発表では、相思社の展示を科学的権威ではなく民族誌的権威が特徴だとおっしゃっていましたが、この科学的権威というのは具体的にどういうことを指しているのでしょうか。

平井：今回、時間がなくて詳しく述べて説明できなかつたのですが、科学的権威というのは水俣市立水俣病資料館の展示について述べていることあります。この資料館でどういう展示がなされているかというと、科学的なデータや顕微鏡写真を使って科学的な根拠を示して、それによつて、伝えようとする内容を真実らしく提示しているわけです。それに対して、相思社がやつてある考証館の方では、むしろ生の人間の叫び声というか、そういうものを前面に出した展示によつて真実らしさを出していよいよ見えるということです。権威というのは「authority」という英語を訳したものですが、「訴える力の元」とか、「真実らしさの源」といった意味合いで使つています。

日高：ありがとうございます。平井先生の今日のご発表のテーマにもなつていました手作り資料館のすすめという点について、どういったことがお勧めなのかをあらためて教えていただけますでしょうか。

平井：言いたかったことをうまく伝えられなくて、すみませんでした。相思社というNGOがそもそもなにをしていたかというと、水俣病被害者の支援者として活動していくわけで



日高真吾



第1部の討論の様子



平井京之介



葉山茂

す。被害者の支援活動のなかで集めた知識や資料、データ、経験をずっと蓄積してきて、あるとき、九〇年代に入つて、被害者と加害者、さらには行政とのあいだで一定の和解が成立した時期に、今度は水俣病を伝える活動をはじめるこことなつたのですが、そのときに効果を発揮したのが自分たちがつくった手作り資料館です。はじめは資料館といつていいのかわからないようなものだつたけれど、それを中心に活動の幅を広げていつて、自分たちがしてきた運動の延長線上で、いわゆる資料館や博物館の一般的な活動の枠組みからみ出すような、力強い「博物館活動」をしている。そういうことをお話したいと思って用意してきたのですが、すみません、時間配分をまちがつて、うまく話せませんでした。

曰高・積極的な博物館活動をするというのは市民参加型の博物館活動にもつながっていく、実践的な例じゃないのかなと思います。ありがとうございました。

続きまして葉山さんの方からは今日はハガキという個人的な通信の記録から、実際に過去に起
こつた津波をどう乗り越えてきたのか、ということで、尾形家がずっとやつてきた漁業という家業
にしがみつくのではなく、新たに農業に転換していって、その危機を乗り越えた、これもひとつの大
復興のあり方のモデルではないかということをご紹介いただきました。そのなかで、このような
尾形家の記憶、あるいは記録に結びついていったのは、実は、葉山さんたちが一緒に活動してい
た市民の方々の整理作業によつての気付きが大きな要因だったということで、いわゆる市民協同
型の博物館作業、そういう事例だつたかと思います。

もうひとつ、現在、このシンポジウムのもとになつてゐる私たちの研究会で、気仙沼の生活文
化に着目して、学校などで利用できるような博物館教育キットみたいなものを作ろうと考えてい
ます。このことについてご紹介いただけますでしょうか。

葉山・気仙沼の尾形家が、漁業をしていたということからはじまつて、その漁業を使って何か、
学校教育に貢献できないかという話になり、魚食教育を気仙沼で展開できないかを考えています。
その話は当初想定していた尾形家の資料を活用するという話からは離れていくつています。市内の
学校で使う教材と考えたときには、もう少し広い視点から地域の漁業を見ることが必要だと
いう判断からです。気仙沼という場所で、人びとが生きようとしたときに、海との関わりを密接
にすることは一つの選択肢だつたわけですが、その関わりがどうであつたのか、魚はどういうも
のを獲つていたのか、その魚はどこで穫つてゐるのかということです。今の気仙沼の子どもたち
は、こうしたことをほとんど知らないという状況になりつつあります。気仙沼は漁業の町と言わ



胡家瑜

れていますが、現在は水産加工業の町としての性格が強くなつております、人びとの視点が海から離れて行つてはいる状況がありますので、海についての知識を深めるような教育キットをつくりたいと思つています。

曰高…ありがとうございます。博物館をベースとした研究者が

災害を研究対象とした場合、地域の人びとに災害の経験をどのように伝えていくのかという役割がある一方で、私たちのようにその地域の文化について学びを得て、その学びの結果を地域のなかへ還元する役割も担つていいます。これも災害の経験から、博物館が学んでいる活動だと思いますけれど、そういう地域、あるいは博物館というものが、総合的に関わっていくことは、重要じゃないのかなと思います。

そして、次に胡先生です。本当に遠いところからお越しいただいてどうもありがとうございます。実はこの夏に私も本日ご紹介いただいた小林村へいきました。刺繡のグッズをおみやげに買って、嫁さんに渡しました。今日の先生のお話は、災害に対して博物館がどのように取り組むのかということについて、さまざまな角度から取り組まれ、被災した方々とともに歩みをすすめてこられたこと、そして先生たちの研究成果がひとつにつながって、小林村再建に重要な役割を果たそうとしている刺繡の文化に地域の皆さん改めて気づいて、その活動を積極的に盛り上げていつているというお話をご紹介いただきました。

今日ご紹介いただいた活動は、やはり継続性が求められていくと思うのですが、先生あるいは台湾大学による小林村のみなさんとの協同プロジェクトが今、計画されていましたら、ご紹介いただけますでしょうか。

胡　…ご質問ありがとうございました。実はこれも話したかったのですが、時間切れで話せなくなっていたのです。今は小林村のコミュニティー発展協会と協定を結んで、彼らが私たちの博物館に来て、一緒にプロジェクトを進めるところです。今、私たちが計画している展示ですが、90年前に博物館が収蔵した刺繡作品と現代の若い人たちが作つた刺繡作品を合同でなにか新しい展示をできないかと構想を立てています。そしてこの展示でなにを重要とするかということは、私たちではなく村民達に自分で決めてもらいたいと思っています。

そして彼らが期待しているもの、頭のなかに描いているものを表現してもらうために博物館では、プロのデザイナーを招聘して、支援したいと思つています。また、台湾大学の人類学博物館は都会に位置している場所ですので、この場所の利点を利用して、よりたくさん的人に小林村の刺繡のすばらしさを知つてもらいたいです。小林村は山間部にあって、なかなか一般の人が頻繁には訪れない場所ですので、もっとたくさんの人みてもらいたいですね。

そして、台風の災害がもうすこしで一〇周年になります。そこで、さつき言つた展示を記念事業の一環として織り込んでいきたいのですけれども、展示だけでなく、ほかの活動も含めて、小林村の立ち直った様子をみなさんによつてもらいたいです。

日高　…このセッションの三人の先生方の発表は、研究者と市民が協同しながら博物館活動を開く

するということが、ひとつ の ポイントになつて いるな ど いうことがわから りました。研究者とい うものは、研究調査をすることを仕事として いるのですが、このよ うな研究活動は、研究所の興味だけ で一方的に情報を取りにいくと うようなことでは ないと思 います。現在、人文学とい う学問が、社会に対し てどのような研究成果の還元をしていくのかとい うこと を 大きく問われるようになつて います。そ ういつた問 いに 対して、今日ご発表いた だいた 研究者と地域が協同した文化活動の実践事例は、ひとつ の回答モデルとして 提示できるのではないかと思 います。

ただし、これらの活動を実践していくのは、さきほど飯沼先生より、言 うは易し、為すは難し というコメントの通りで、研究者として必要な研究時間の工夫、研究成果の発信の仕方の工夫が高度なレベルで求められる部分だと思 います。このよ うな感覚で地域研究を進めていくとい つた姿勢が必要ではないかと感じたところです。ちよ うど時間もま いりましたので、このセッショ ンを終わりたいと思 います。

どうもありがとうございました。

第2部 大学・博物館から地域文化を考える

地域の文化財保護における大学の役割

渡辺 智恵美（別府大学教授）

－複合的な文化財情報の構築と活用のために

別府大学の渡辺と申します。よろしくお願ひいたします。私の発表は、少し、みなさまのご発表とは毛色がちがうのですが、今日は、昨年度からはじめている文部科学省による私立大学ブランディング事業について別府大学の取り組みを紹介します。別府大学では、この事業に採択され、二〇一六年から二〇一八年度まで、「九州における文化遺産保護研究の拠点形成のための基盤整備事業」という名称で事業を進めています。

本事業では、別府大学が九州内の自治体と連携して、文化遺産の保存・保護のための技術的研究や文化財に関する職員に対するリカレント教育を進めて、恒常的に文化財保護力を向上させる環境を整えることを目的としています。例えば、昨今さまざまな災害が発生し、大分でも七月に豪雨があり被災しました。そのあとの台風でも被害が出たというような状況がありますが、この



つは在校生に対して、豊富な知識と高度な技術を備えること、もうひとつのねらいは、図1のように大学を中心に、自治体や民間の文化財関連の組織とお互いにつながるネットワークを構築します。また、他の研究機関や大学と連携し、自治体や民間の文化財関連

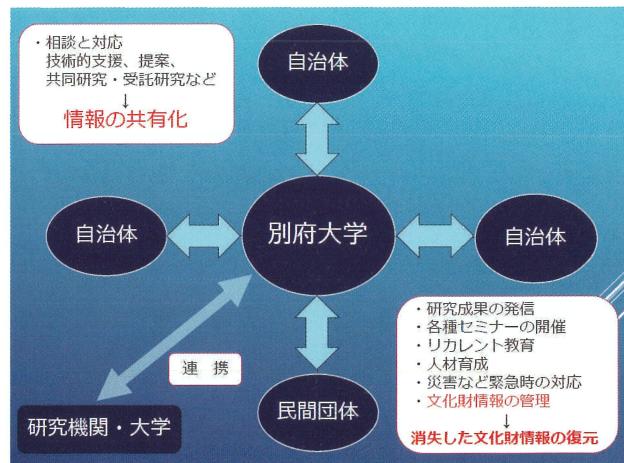


図1 「九州における文化遺産保護研究の拠点形成のための基盤整備事業」の射程モデル

ような災害時においても拠点となることを目指しています。あわせて、複合的な文化財情報の構築を目指しています。文化財科学分野で使用する調査・分析機器を新規に導入し、既存の装置と組み合わせながら、地域との連携、共同研究や受託研究を通してより高度な研究をおこなう、そこで得られた文化財情報を共有していくといふと考えています。また人的資源の活用にも取り組みます。別府大学は、考古学が昔から盛んであり、地方公共団体にたくさんの卒業生が就職しております。このような人材を活用して文化財関連のネットワークを構築することやこれらの人材も含めて文化財に関わる方々にリカレント教育を実施します。大学にまた戻ってきてもらつて一緒に学んでもらうこと、もうひとつ

渡辺 翁恵美

の機関から出てくる文化財保護の課題や相談に對して、対応や提案をする、あるいは技術的な支援を実施します。さらに、これらの活動を発展させて共同研究をおこない、その成果を両者で共有することを目指します。このような研究結果を発信したり、セミナーを開催したりすることでも、皆さんに広報するとともに、リカレン特教育による人材育成をおこないます。

また、別府大学では被災文化財に対して、救済ボランティア活動をしていますが、これに加えて新しく始まつたこの事業で、文化財情報を管理する環境を整えることを計画しています。例えば、ある地域が被災してしまい、その地域の文化財やそれに關するデータが消失しても、その情報を復元することができるようになることをを目指しています。つまり、大学が管理しているデータをお渡しすることによって、被災した文化財のさまざまな情報が復元できるというようなことを目指しております。

では、文化財情報の共有化のメリットとしてどういうことがあるかということをお話します。通常は、大学が持つていてる機器などを利用して、複合的なデータを蓄積していきます。ここでは人的資源の活用と育成がおこなわれます。例えば、学生による地域文化財の調査がおこなわれることで、文化財保存のための情報が提供されることとなり、さらに学生自身が経験を積むことで、人材の育成へつながります。また、非常時ににおける、これは先ほど申し上げました災害時の情報の消失に対して、文化財情報を地域と大学で分散管理ができる体制が整うことが実現できます。また、文化財レスキュー活動の迅速化にも繋がります。これはどういうことかといいますと、被災してしまつた場合、被災地域の方からどこに相談すればいいか分からぬといふこと

がよく聞かれます。そういうたどきに大学に問い合わせれば、その対策についていろいろな提案ができる、あるいは専門的にやつてある機関を紹介することができます、より早く文化財を救済する体制を作ることができます。そして、これらのこととは、大学を通した広域連携の強化へとつながる、こういうことがメリットとしてあげられます。このような活動を通して、大学は自治体との橋渡し的な役割、つまり、コーディネーターとしての役割を担うことになります。

次に、複合的な文化財情報についてお話ししたいと思います。従来の文化財情報は、わりと平面的な情報が多かったということがあります。例えば、考古学で言うと、実測図であつたり写真であつたりというようなことです。あるいは映像で残っていることもあります、二次元の情報がほとんどでした。最近はX線CTを使った画像情報の3D化が実現し、また三次元計測というかたちで、ものを立体的にとらえることができる技術が導入されています。また、得られたデータを立体プリントして、レプリカを作ることができるようにになりました。複合的なデータを作ることで、一番大きな効果としては、形状の復元が可能であるということだと思います。3D技術を用いた立体的な記録と文化財の材質や構造などの情報、そして従来の情報と組み合わせたものが複合的な文化財情報ということになります。

それでは、現在、別府大学にどういう機器が設置されていて、どういう活動がおこなわれているかについてお話していきたいと思います。まず、史学・文化財学科には、文化財を自然科学的な見地から調査するために、X線透過試験装置、蛍光X線分析装置（据置型・可搬型）、X線回折装置、デジタル実体顕微鏡、走査型電子顕微鏡が設置されています。今回、新たに三次元計測



写真2 X線透過試験装置

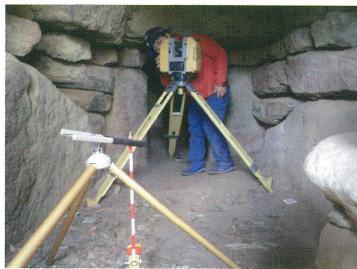


写真1 三次元計測装置による古墳石室調査

装置やデジタル画像が得られるX線透過装置が導入されました。簡単に装置の概要について紹介します。最初に三次元計測装置についてですが、現在、三種類設置されています。そのひとつは、遺跡やお城の石垣、建造物、あるいは古墳の石室内（写真1）や磨崖仏など、動かせないようなもの（不動産文化財）の調査をおこなう装置です。また、小型の三次元計測装置は、小さなサイズの文化財、考古遺物などを調査の対象にしています。例えば、鋳型や弥生時代の青銅器の鋳型などを測定し、取得したデータから、立体プリンタを使って青銅器のレプリカをつくることができます。非接触で文化財のデータをとることができることで、いろいろなところで活用されております。

X線透過試験装置は、主に埋蔵文化財の損傷の検査ということです、文化財の健康診断といいますか、そういうことに役立てる機器として利用しています（写真2）。

蛍光X線分析装置は、無機物、つまり鉱物や金属でできた文化財の材質を調べることができます。壁画や日本画の絵の具として使用されている顔料は、元々が鉱物ですので、この装置で調べることができます。それらを製作技法の推定にも役立ててお

ります。九州は装飾古墳という石に絵を描いた古墳がたくさんありますので、装飾された絵の具の原料を調べることができます。例えば、装飾古墳内に赤い絵の具があるといいましても、水銀で作った顔料なのか、鉛でつくった顔料なのか、鉄で作った顔料なのかといふ、見た目ではわからぬ部分について、この装置を使いますと確実なことがわかります。

X線回析装置は、顔料や石、金属などの結晶状態・組成を知ることができます。例えば、金属製の文化財などはいろいろな鏽が発生します。そういうたどりに、一時的できる水溶性の鏽(FeOOH)なのか、あるいは、四酸化三鉄(Fe_3O_4)ができるのか、あるいは他のもの、別府は海が近いし、温泉があるという環境から硫黄と結合した鏽なのかななど、そういうことがわかる装置です。



写真3 デジタル実態顕微鏡



写真4 走査型電子顕微鏡

デジタル実体顕微鏡（写真3）は、文化財の表面の情報を拡大することができます。例えば、古墳時代の金メッキしたのに模様を彫っている鍍金のあとを観察する場合、実体ですので、肉眼で見たままのものを拡大して観ることができます。通常の顕微鏡ですと、100倍、200倍にしてしまうと、焦点の合う範囲がとても狭くなります。コンピューター処理をして、観察している部分全体に焦点が合っている画像を得ることができます。この観察結果から、製作工程でありますとか、製作技法を見出していくことができます。

走査型電子顕微鏡（写真4）は、倍率が200倍以上のものを調べる際や、元素マッピング機能をつけておりますので、文化財の表面にどのような元素が分布しているのかを画像で観ることができます。例えば、細かな鋸のできかたなどを観察することができます。

以上のような装置で得られる情報と従来の情報とも組み合わせることで、複合的な文化財情報を得られるということです。イメージとしては、文化財をさまざまな角度から調べて、それをデジタルデータ化するといふものです。そして、これらのデータを蓄積することによって個々の文化財情報を増加させていくことができるということになります。

以上で発表を終わります。

歴史文化資料保全ネットワーク事業から考える

天野 真志（国立歴史民俗博物館特任准教授）

地域文化研究

ご紹介いただきました、国立歴史民俗博物館特任准教授の天野と申します。今回のシンポジウムのテーマである「地域文化の再発見」に関連して、人間文化研究機構では「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」というものを推進することになりました。本日は、地域文化研究の現状と課題に対して、この事業でどのようなことが見込まれるのかについて、私の経験や考えを踏まえてお話ししようと思います。



◎ 「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」について

二〇一七年度から、「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」が立ち上がりました。本事業では、全国各地に点在している歴史的・文化的な資料を調査し、それらを保全

するための研究を進めていきます。また、資料情報などのデータを集約し、自然災害などの非常時に活用するとともに、地域研究を促進するための基盤を形成します。さらには歴史文化研究および資料保存に関する教育プログラムを作成し、地域文化継承の担い手を育成することを目指しています。

二〇一八年度より本格的に始動するので具体的な取り組みはこれからになりますが、日本各地の大学と連携し、地域の歴史文化資料を継承するとともに、地域社会における歴史文化の継承と創成に向けた大学の教育研究機能強化を図っていくことが大目標として掲げられています。そのために、まずは人間文化研究機構が神戸大学、東北大學と密に連携し、この三拠点を中心として、現在全国に展開される「資料ネット」と総称される活動を軸に全国的な広域ネットワークを構築していくこととしています。このネットワークを構築することによって、例えば自然災害などで消滅の危機を迎える歴史文化資料を保全するための相互支援体制として機能させていくことも考えています。すなわち、人間文化研究機構、東北大、神戸大が中核となつて、地域社会の歴史文化の継承と創成を全国的に推進すること、とくに、全国に広がりを見せつのある「資料ネット」活動を支援するかたちで、それを推進している大学などの研究・教育活動、社会貢献の機能強化をはかることが本事業の大きな主眼となっています。

◎ 「資料ネット」活動の展開

ここまで、「資料ネット」という言葉を何度か用いています。ここでいう「資料ネット」とは、

主に歴史研究者が中心となつて地域社会に伝来する歴史文化資料を保存・継承するためのボランティア団体の総称を指しています。

「資料ネット」活動の発端は、一九九五年の阪神・淡路大震災がきっかけとなつています。大規模な地震にともない、様々な被害が発生するなかで、公的機関に所蔵されず個人宅などに伝来する多くの歴史文化資料が消滅の危機に直面しました。国宝や重要文化財、県・市町村指定の文化財などと違い、文化財指定を受けていない膨大な歴史文化資料は、災害時になかなか救済の対象とされづらい状況にあります。これらを救済して、地域の歴史文化を象徴する資料として保存・継承しようという取り組みが、神戸大学を中心に進められ、一九九五年に神戸大学に事務局を置く「歴史資料ネットワーク」が発足しました。その後、各地で自然災害が発生するたびに、神戸の取り組みに倣った「資料ネット」活動が全国各地にひろがり、現在までに二四団体が組織されました。二〇〇三年には宮城県でも宮城県北部地震が発生し、これをきっかけとして、宮城歴史資料保全ネットワークが作られました。二〇〇四年にも新潟県中越地震に新潟歴史資料救済ネットワークというものが立ちあがりました。最近だと熊本地震の発生にともない、熊本被災史料レスキューネットワークが発足しました。

阪神淡路大震災時、国レベルでも文化財レスキュー事業が進められていましたが、「資料ネット」が対象とするのは、館蔵資料ではない、内容や価値が必ずしも明確でないものです。歴史的・文化的・美術的に重要なことが広く知られていれば、所蔵者や周辺の方がそれをなんとか守ろうという意思が働くかもしれません。しかし、古文書などの文字記録は、全国各地に正確



図1 宮城資料ネットの活動

な数を把握することができないくらい膨大に存在しています。しかも古いものは崩し字で書かれていて、容易には内容を把握判読することが困難です。そのため、自然災害などでお宅が被害を受け、復旧に向けて片付けを進める際に出てきても、それが歴史的・文化的な価値があるかどうか認知されないままに捨てられてしまうという危険性があります。こうした危機に対して、いわば歴史文化資料の災害対策として「資料ネット」活動が展開し、被害を受けた個人宅の資料が消滅しないよう所蔵者や地域の方とコミュニケーションを進めていきました。二〇一一年の東日本大震災のときも、被災各地で「資料ネット」活動が推進されていました。「資料ネット」活動は、必ずしも災害時のみを対象とした取り組みではありません。図1は、宮城資料ネットの活動ですが、右上の図は市民と実施している古文書の解説講座です。私は二〇一七年六月まで東北大學に勤務しており、宮城資料ネットの事務局も担当していました。二〇一一年以降、宮城資料ネットは津

波で被害を受けた古文書などのクリーニング作業を継続的に実施していますが、作業に参加されている方の多くは崩し字が読めませんでした。しかし、作業していくなかで、そこに書かれたものが何なのかを知りたいという欲求がわいてきたようで、そのお手伝いとして、古文書講座をおこなうようになりました。ここで勉強している方たちは多くは二〇一一年以降のお付き合いですが、二年くらい経つとかなり読めるようになります。現在では内容の検討までできるようになり、それぞれの関心に基づいて地域の歴史を調べるに至った方もいます。

また、各地域で保全した資料は、研究活用だけでなく、そこから浮かび上がる歴史像を地域と共有する活動もおこなっています。図1の右下も宮城資料ネットの活動ですが、活動を実施した各地でこうした講演会などを開き、調査活動によって確認されたものがどんな資料で、どのような地域の歴史文化像を象徴するものなのかをお伝えしています。活動の性格や規模などは各地で相違がありますが、「資料ネット」活動は、自然災害から地域の歴史文化資料を救済するだけではなく、それらを通して地域社会とコミュニケーションを図ること、調査成果を地域と共有し、新たな歴史文化像を展望することが共通点として指摘できると思います。

冒頭でご紹介した人間文化研究機構のネットワーク事業は、こうした資料ネット活動を促進させるための役割が想定されています。ここでひとつポイントとなるのは、多くの「資料ネット」が古文書などの文字資料を専門とする歴史研究者を中心に組織されていることです。「資料ネット」活動では、決して古文書などの文字資料に限定した保存・継承活動を進めている訳ではありません。しかし、活動を進めるに際しては、自身の研究分野に偏ってしまいがちで、それは専門

家としてはある意味当然のことでもあります。「資料ネット」に限らず、地域の歴史文化を総体的に保存・継承しようと考へた場合、どうしても特定の分野単独での活動には限界が生じます。そこで必要になるのがネットワークです。特定の分野では把握しきれない多様な歴史文化の諸相を理解し継承するために、「資料ネット」活動も含め多様な価値観に基づく連携、すなわちネットワークの構築が求められます。この事業で求められるのは、こうした現在進行形で取り組んでいる地域調査や研究活動を多面的に支援し、多様な歴史文化像を継承することであろうと思います。

◎歴史文化資料と地域文化像

少し踏み込んだ話題として、これを具体的にどんなかたちでやつていけばよいのか、とくに地域社会のなかで歴史文化を描くことに対しても、どのようなことが求められているのかを検討してみます。特に「資料ネット」活動というなかで、必ずテーマになるのが古文書です。いわゆる古文書資料、文字資料を媒体とした研究を地域に還元していくのがテーマになります。少し歴史研究を軸にしながら、地域社会と歴史研究との関わり、およびその役割について考えてみたいと思います。

「資料ネット」活動も基本的に同じですが、一般的に歴史研究において古文書の調査では、主に個人宅に伝来している古文書の状況を調査することから始まります。こうした調査経験を持つ方の多くが共有する課題として、「古文書はありますか」と尋ねると、そんなものはありません

と言わることです。しかし、そこでお宅のご当主とお話をしながらお持ちのものを拝見すると、大量の古文書が出てくることがあります。つまり、われわれが古文書ないしは歴史資料と考えているものと、所蔵者や地域のなかで認知しているものとの間に認識のズレが生じているということです。このことは、一九九五年の阪神・淡路大震災以降「資料ネット」活動を先導してきた奥村弘さんも指摘しています。この状況について当時奥村さんは、「歴史研究者と市民との間の歴史資料をめぐる認識のズレ」と表現しています（奥村弘「現代都市社会の歴史意識と歴史学の課題」『日本史研究』四一六号、一九九七年、奥村「大震災と歴史資料保存」吉川弘文館、二〇一二年に再録）。すなわち、同じ地域の歴史文化を対象にしていながらも、その根拠となるモノに対する認識が大きく異なっていること、さらに、そこから描き出される歴史文化像、地域社会の語られ方も変わってくるということです。

この奥村さんの指摘から二〇年が過ぎましたが、現在歴史文化を語るための資料は随分多様になつてきただけではないかと思います。もちろん、前近代の歴史研究に際しては、いわゆる古文書などの文字資料は不可欠ですが、絵画資料なども積極的に活用されています。また、地域を軸にした歴史文化像の発掘という点では、例えば災害の記憶を後世に残すための震災資料と呼ばれるものなども、資料的な意義が注目されています。

このように多様な歴史文化を象徴する資料を調査・保存し、地域文化のさまざまな姿を描き出そうとする取り組みが広がりつつあります。「資料ネット」活動は、こうした多様な地域文化を再認識するために、特定のイメージだけではない、地域の歴史経過、多様な文化を重視していく

取り組みでもあります。どうしても「資料ネット」活動は、災害対策という側面が注目されがちですが、それに限らず、時代的、空間的な変遷を踏まえた歴史文化像を再構築していく役割も、長い目でみると展望しているのではないかと思います。

◎地域文化の変遷と捉え方

日本列島各地に伝来する歴史文化がどれほど多様で豊かであるかを再認識し、その多様性を保存・継承するために、「資料ネット」活動などの様々な取り組みが進展しているのだと思います。こうした状況を踏まえ、少しだけ私の調査経験からご紹介したいと思います。

「資料ネット」活動ではありませんが、私は二〇〇五年から秋田県の角館町という小さな町で資料調査をしております。角館で非常に有名なのは武家屋敷通りです。現在は、「角館伝統的建造物群保存地区」となっていますが、春になるとこの通りに桜が咲き、毎年全国から多くの観光客が訪れています。また、九月には、「角館祭りのやま行事」というお祭りが有名です。これは最近、ユネスコの無形文化遺産に登録されましたが、町にある神明社と薬師堂それぞれに地区ごとで曳山を見せに行き、その途中で曳山同士が向かい合った時に通行の優先権を交渉します。その交渉が決裂すると曳山をぶつけ合う、というお祭りで、三日間にわたっておこなわれます。このお祭りは町をあげて盛り上がるもので、ある種角館のアイデンティティともいえるのかもしれません。

一般に、角館の歴史文化というのは武家屋敷群と曳山行事が象徴的に語られていますが、この地域にはこれ以外にも様々な歴史文化が残されています。おおよそ現在の角館町の原型は、江



図2

で角館や秋田、さらにはそれ以外の地域の文化人と交流していました。また、どうやら同じような規模で塾を経営し、相互交流をしていた形跡がこの町で確認され、そこで集約された情報が秋田領内、さらには他領域を繋ぐ結節点として機能していたことがうかがえます。そうしてみると、当時の角館は、いわゆる知的拠点としての役割を果たしていました。しかし、こうした歴史は、現在ではほとんどの人に共有されていません。現在の社会と断絶してしまった過去のできごとは、なかなか地域のなかで認識・共有されず、埋没していく傾向にあります。人間生活は常に可変的ですので、全てを連續性で理解するのは困難ですが、江戸時代以

戸時代に佐竹氏が現在の茨城県から秋田へ転封したことになります。角館もその後城下町が形成され、今も残る武家屋敷や曳山行事もその過程で生まれていきました。

現在、どのような人達がどのような文化を育んでいったのかを理解するために、武家屋敷の一角にある個人のお宅に調査をしています。現在も調査していますが、そこには大量の古文書が伝来しておりました。興味深い情報は数え切れないほど

あるのですが、どうも一八世紀から一九世紀にかけて、このお宅の塾を経営していたようで、そこで角館や秋田、さらにはそれ以外の地域の文化人と交流していました。また、どうやら同じよう

(図2)

来継承されているように見える曳山行事も、近年ではかつて曳山を出していなかつた地区、具体的には見学する側であつた武家屋敷の住民も参加するようになつたといいます。微かな変化のよう見えて、長期的に見ていくと、そこには地域文化の大きな転換であつたということもあります。こうした過去のできごとをどのようにして現在を生きる地域住民や今後の地域社会に伝えていくことができるのか、重層的な文化が蓄積している地域のなかで、再発見した地域文化をどのように新たな蓄積として組み込むことができるのか、いろいろと思案しているところです。

◎ネットワーク事業と地域文化研究

最後に、あらためて「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」の問題に戻り、ここまで紹介したいくつかの事例を踏まえて、一連の課題に対し大学がどのような役割を果たしていくことが求められるのかについて話して終わりたいと思います。

この事業は、二〇一七年度からの開始ですが、本格的には二〇一八年度からになります。現在、各地で「資料ネット」活動を推進している大学を中心に行ながって、各地域で直面している課題などのご意見をいただきながら、その対処法を考えているところです。

具体的にはこれから集約していくのですが、現時点で印象的であったのは、どの地域でも特定の種類の資料のみを対象として考へている訳ではないということです。この事業でも「歴史文化資料」と謳つているように、保存と継承の対象は多様であることを前提にしています。いわゆるドキュメントとしての文字資料だけではなく、多様な文化的なものも対象化していくことが求め

られています。そうすると、「資料ネット」活動で主対象となつてゐる文字資料以外も含め、総合的な調査・保存・継承のあり方を想定しなければいけません。

また、「資料ネット」活動では、主に民間所在の資料を対象とし、それを個人宅などで保存・継承することを想定しています。その場合、次に課題となるのは地域や個人宅でどのようにして保存していくかを考えないといけません。それは、モノそのものを保存するのか、情報として保存するのか、かたちは変えて文化として伝えていくのか。対象となる地域社会に応じたかたちで方法を考えていかないといけないと思います。地域社会に最終的にどうやって共有するのか。葉山さんのお話にあつたように、最終的に地域に成果として還していく、データを公表していくということが求められると思います。

それを総合していくつて、地域像を最終的にどうやって捉えていくのか。この問題は膨大な課題と困難が待ち受けていますが、それもひとつずつ乗り越えながら考えていく必要があります。そのために、ひとつは、「資料ネット」活動というものが、現状としては歴史研究が中核的な活動主体になつています。それ自体は悪いことではありませんが、地域文化総体を捉える場合、そこに限定されない多様な価値観というのを取り込んでいかなければならぬと思つています。特にそれが、例えば今回のテーマであります「地域文化の再発見」を考えた場合、民俗行事から再発見する歴史像というのも出てきたりします。お祭り行事の過程で、古文書資料だけでは理解できない文化的な再解釈が可能な場合もあると思いますし、またその逆もあると思います。最終的に、この地域のそういうものを踏まえて地域文化総体として、どう残りかたを考えるか、それを将

来どのように伝えていくのか、こうした総合的な課題において、大学の役割、特に地域の大学が果たすべき役割は決して少なくないと思います。また、多面性を考えていくと、地域単体では足りないものがどうしても出てきます。そういうものを他地域から、さらに歴博や民博のような機関から補完し合う、それがネットワーク事業の中核的な役割として果たしていくべきではないかと考えています。これは今から始まる事業ですので、私も課題を羅列した程度になりますが、これからこれを歴博としても、人間文化研究機構としても考えていただきたいと思っています。

博物館による歴史学と地方史の再発見

—国立台湾歴史博物館を事例として

謝 仕淵（国立台湾歴史博物館副館長）

国立台湾歴史博物館から來た謝と申します。本日はこの機会を設けてくださつて、ありがとうございます。

本日の話は二つのテーマがあります。ひとつは博物館から見た歴史学の可能性です。それから博物館からどういうふうに地域史を再発見できるかという点です。地域史の再発見については、今進行している実例を取り上げます。

まず、みなさまに知つていただきたいのは、台湾の博物館は、この二〇年間で、さまざまな変化をたどつてきました。そこで、ここでは博物館の研究やコレクションが、社会や文化に対してもんなる影響を及ぼしているかを考えたいと思います。みなさんも御存知の通り、伝統的な博物館と来館者との関係は、従来、博物館が研究し、来館者が学習し、応用するというパートンでした。しかし、新しい博物館の概念が提起されつつ、現在、博物館が一



謝 仕淵

方的に社会に発信していくくというようなこれまでのかたちは、双方向で学習するかたちに変換で
きることが可能ではないかと私は考えはじめました。

私は博物館のなかで働いている歴史の研究家です。したがって、博物館で研究している知識を
いかに応用していくかということを考えなければなりません。私が働いている国立台湾歴史博物
館では、一方に発信するシステムからお互いに協力しあうシステムへと変えていくことを考えな
ければなりません。そして、このような博物館での活動は、今まで大学や研究機構でやってき
た台湾の歴史に対する認識にも新しい資料や視点を提起できると思います。これから、国立台湾
歴史博物館がどんな課題に直面しており、どのような活動をやっているのかについて紹介します。

台湾史の研究と日本史の研究を比較すると、直面している課題がかなり異なっています。なぜ
かというと、台湾史を研究するときにわれわれが利用できる文献資料は、台湾の観点から書かれ
ているものがかなり少ないのであります。例えば、台湾史を研究するときによく使われている文献資
料には、『四庫全書』があります。清の時代に乾隆帝が編纂させた、中国最大の漢籍書籍叢書で
す。そのなかには、台湾に関する書籍が幾つかあります。しかし、これらの本で書かれている台
湾のことは、かなり偏っていたものです。例えば、台湾は周囲を海に囲まれている島なので、海
の資源をよく利用し、海との関係もかなり深いです。しかし『四庫全書』のなかに所収されてい
る台湾に関する本には、生業に関しては農業に関することばかり書かれています。台湾はオラン
ダに統治された時代があり、このときにはすでに塩造りの生業が確立していました。しかし、こ
のような事実は、最近ようやく、台湾での塩造りに関する研究成果の文献が出てきたという状況

です。つまり、台湾のそれぞれの時代にあった生活文化に関する文献がとても少ないので。そのため、台湾の大学における歴史研究は、生活に関する歴史資料をあまり利用できませんでした。同時に、伝統的な歴史資料のほか、民間生活に関する資料も重要視されていません。また、これらの資料がどこにあるのかもわからない状況となっていたのです。このようなことを背景に、私の博物館だけでなく、ほかの歴史博物館においても、断ち切られた歴史資料をどのように探し出すのか、どのように取り戻すのかという課題に直面しているのです。

この三〇年間に、歴史の研究に対して、少しずつ社会史や生活史に関する研究が進められてきました。そして、多様な資料がどんどん発掘されていきました。そのようななか、日本の研究者の協力をえながら、日本時代の資料を多く発見し、解読してきました。そこで、私たちの博物館では、これら発掘された資料を整理し、データに蓄積するという役割を担うことになりました。また、蓄積したデータをどのように公共の利用に供するかも、私たちの仕事としていきました。特に最近一〇年間の資料は、レコードやラジオやテレビなど音声に関する資料や映像資料などが大量に集まりました。現在、これらをどのように活用していくかを考えているところです。

博物館で蓄積してきた歴史学の資料や成果は、社会に還元しなければなりません。もちろん、伝統的な歴史学を進めなければなりません。これは、歴史学の基本です。ただ重要なのは、今までの歴史資料のなかの不足のある部分は補足していくなければなりません。特に、民間生活に関する資料です。また、日本統治時代に残った資料に注視することも必要です。歴史学者のカール・ベッカー氏が一九三〇年に「人はそれぞれの歴史学者である」という発言をされています。この



図1 展示ポスター

言葉は、われわれの博物館に大きな影響を与えました。博物館は、人々が自分の歴史に気づき、自分の歴史を語ることができるように、協力すべきだとわれわれは思っています。それから私たちが、しっかりと認識すべきことは、歴史知識というものは単なる過去の解釈だけではなく、今の社会との関係性を考慮しなければならないということです。

以上述べたように、本格な歴史研究を進めること、人々が自分の歴史を語つてもらうこと、また歴史と社会との関係性を考慮すること、このような三つの視点から総合的に研究を進めていくことが、博物館を通して進める歴史学のあり方ではないかと考えています。それでは、われわれの博物館において、歴史学をどうやって実現していくのかについて、いくつかの事例を紹介したいと思います。

図1は、これは昔、台湾の人たちが河川の洪水や氾濫から避難するために、竹でつくった家屋を担いで、逃げていくことを紹介する展示会のポスターです。この展示会は、日高先生はご覧になつたと思います。それほど、大きな展示会ではありません。この竹製の移動式の家屋は、台南にある台江地域にあるのですが、ちょうど国立台湾歴史博物館が所在するところにあります。なぜ、このような移動式の家屋があつたかといいますと、一七〇年前に

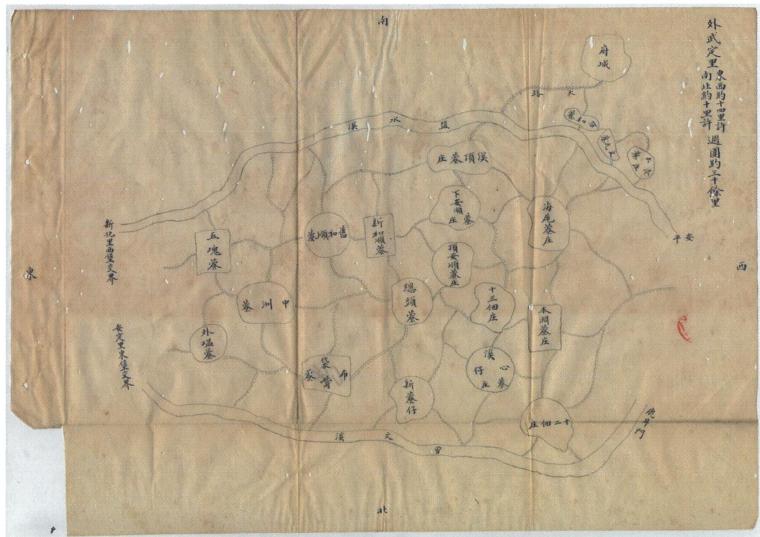


図2 国立台湾歴史博物館周辺の古地図

ここは海でした。一七〇年前に陸地になつて、貧しい人たちがここに移住してきました。貧しいから、なかなか自分のちゃんとした家屋をつくることができず、こうした移動式の家屋が発展することになりました。貧しいので、竹という安い材料で家屋を作ってきたのですが、五〇～六〇年代になつて、海に堤防が作られましたし、七〇～八〇年代は経済発展に伴つて、こういった竹製の家屋は消えていき、現在、この竹製の家屋を作れるのは、李養さんしかいません。この家屋は一〇〇年くらいの歴史があるのですが、現在は、その技術が失われる危機に瀕しています。

図2をご覧ください。国立台湾歴史博物館の周辺の古地図です。図の下の方には、毎年、氾濫する渓流があつて、図の上にはもう一本の川があります。私の博物館はこ



写真2 竹製家屋の模型



写真1 展示会場の様子

の図の上の川の地域にあたります。私たちが展示会を構想していたときには、こういった竹製の家屋の伝統技術と、それから川の氾濫による水害、それから歴史的な記憶がどういうふうな関係性があるのかということに着眼しました。

写真1は、展示会場の様子です。展示場の一一番奥に置かれているのは竹製家屋の模型（写真2）で、壁面に展示しているのが竹製家屋の壁です。こぢんまりとした展示会ですが、台湾の各地からたくさんの人たちが見学しにきました。また、この展示では、年配の方々のなかにある竹製家屋の生活経験が歴史的資料として博物館に伝えられました。先週、この展示会は終了しましたが、やはりこういった生活経験の展示会をすることによって、いろいろな情報が得られるメリットがありますので、これから巡回展として、台江地域の三カ所をまわることになっています。このような展示会をすることによって、建築工芸と自然環境がどういう関係性があるのか、われわれの生活環境と自然環境がどのように関係していくのかという、現代的な問題を再考するということにつながりました。ここでは、先ほど紹介したように、竹製家屋の建築技術を持つてているのが李養さん



写真3 李養さん

(写真3) 一人しかいないということも含めて考えないといけません。李養さんの技術を継承するのか、あるいはどう継承していくのかも考えなければならない課題です。李養さんは、展示会では家屋の壁しか作らなかつたのですが、その後、自宅の隣に竹製家屋を再現することを考えるようになりました。また、竹製の家屋の建築技術をどう現代の建築に応用していくかという話も出てきました。台江地域はもうすでに渓流の氾濫もありませんし、竹製の家屋に住むということもなくなつてきたわけですが、このよううに展示会をおこない、家屋を再現することによって、地域にどのような意味をもたらしてくれるのかということについて、私たち博物館は再考しなければなりません。

もうひとつの事例は、昨年台南で発生した地震（写真4）のときに博物館がとつた活動です。時間がせまつてるので詳しくお話をきませんが、一九九九年に発生した中部大地震で直面したのは、文化財に関するレスキューでした。一方、去年発生した地震では、一般の人々が持つていたものに注目しました。ここでは、救済に関する記憶、災害に直面したときにどんな記憶があるのか、その記憶を保存する観点から博物館で考えながら活動しました（写真5）。

今日は、歴史的な材料を活用し、整理するという課題を解決するのは、私たち博物館と歴史学の役割だということをお話しました。また、歴史的な再現では、現在への配慮や、文化的な復興



写真4 2016年の台南地震



写真5 国立台湾歴史博物館による文化財レスキュー

とか、民族意識、環境意識との関係性も考えなければならないということをお示しました。そして、「博物館歴史学」がもつてている観点は、もっとコンピューションのツールを使って、社会と対話をしていくことを考えなければいけないということをお伝えしたかったことです。
以上で、私の話を終わります。ありがとうございました。

討論

話者 渡辺智恵美（別府大学教授）

天野 真志（国立歴史民俗博物館特任准教授）
謝 仕淵（国立台湾歴史博物館副館長）

川村 清志（国立歴史民俗博物館准教授）

川村：さつきからすでに何人か登壇されていましたが、国立歴史民俗博物館というのは千葉県の佐倉市にあります。日高先生、吉田先生の民族学博物館は大阪にあります。民博は人類学を中心にして世界の文化について研究するほうで、歴博は歴史が付くように、原始古代から現代までの歴史について研究する博物館にわれわれは所属しておりますし、その上に人間文化研究機構という上部組織が覆いかぶさっています。

そういうわけで、さつそくご発表ありがとうございました。時間もあまりございませんので、それぞれのご発表に沿って話ををしていこうと思います。内容的にも寺村先生がそれぞれの発表のあとにコンパクトにまとめていただいているので、私の感じた感想に加えるかたちで少し質問させていただきたいと思います。

今日のご発表は、やや乱暴なまとめ方になりますが、それぞれのキーワードでまとめるところ、最

初に渡辺先生からご発表いただいた内容は、文化財の保存、修復に関する技術的な問題を中心にして発表していただいた、いわばテクノロジーのレベルですね。二番目の天野先生のご発表は、主に文化財レスキューをおこなう上でのネットワークの問題であります。そして三番目の謝先生のお話は、レスキューされた資料の展示や研究を通じて発信された知識、研究そのものの具体的な内容が中心でした。これらは論点の中心が各々に分かれているというだけで、三人の先生方は、ネットワークの話も技術や教育の話も、そして地域の意識の問題もそれぞれに含み込みながら、重点を変えてご発表いただいたというふうに理解をしました。

最初の渡辺先生にお話いただいた、さまざまなもの器の問題が非常に興味深く、お話を聞いたのですが、ひとつご説明いただきたいのは、別府大学のなかでは当たり前なのかもしませんが、今日お話をされたような装置、非常に理系的な知識が必要かと思うのですが、そういうのは学生さんへの教育やカリキュラムのなかではどのように位置づけておられるのかな、と。かなり専門的な技術を伴う作業の必要性を発信していくなかで、自



川村清志



第2部の討論の様子

治体や一般の人たちが、どのように理解し、享受するような体裁になつてゐるのかな、ということを補足していただけたと助かります。



渡辺智恵美

渡辺・文系の大学で不足しがちなところはあるのですけれども、別府大学ではいわゆる考古学・文化財科学コースという授業の一環で、分析機器等を使っております。実習授業のなかでも学生に操作方法を教えますし、もう少し専門的になる卒業研究、大学院の研究でも実際に使つて文化財にアプローチして、自然科学的な手法でもつて文化財をどうみていくのかを考えます。歴史、文化財というのはいろいろな研究方法があると思うのですね。特に私どもの大学では地方公共団体や博物館の文化財専門職につく学生もたくさんおりますので、いろいろな状況に対応ができるようになります。例えば発掘現場においても、遺物の応急処置をしなければいけないとか、災害のときに応急措置をしなければいけないと、長い目でみると文化財の保存を考えるときに、そういういつた知識が役に立つてくるということで、自分の専門分野のほかに文化財を保存するための知識を持つっている守備範囲の広い人材を育てることができます。ここが別府大学の教育の特徴であり、強みであると思います。外部に対しては、なにかありましたら、ちょっと形状や材質がよくわからないのだけど、ということになれば、こちらの機器で分析をやつたりしながら明らかにして、それでそれを一緒に考え、というようななどころです。

川村・ありがとうございました。では次に天野さんからは、秋田の事例を交えながら、おもに歴史資料ネットワーク、古文書資料あるいは文献資料を中心とする一般の市民の人たちを巻き込むかたちでの歴史資料の保存であつたりとか、自分たちの地域を知る活動に活用することについて、お話をいただいたと思うのですが、ひとつは、一部のご発表や午前中の飯沼先生のお話とも重なるのですが、資料ネットワークが盛んな県と盛んでない県があるようですね。つまりこういう組織は非常にゆるやかな組織ですし、それを神戸大学や東北大学といった拠点となる機関、人間文化研究機構などもその一つになつてやつていこうという話なんですが、それらはどのように円滑に継続していけるのか、組織として活発に活動するための方法論やモチベーションというようなものについて、お考えがあればお聞かせいただきたいです。もう一つは秋田の具体的な事例研究の延長のなかで語られた、地域のなかでの地元びいきというか、自分たちの歴史認識に偏りがある、それと研究者との間にズレがある。これは天野さんのご意見というか立場でかまわないのであるが、どうやって埋めていけるのか、あるいは資料ネットの活動はそういうものにもつながっているのか、ということがあれば教えてください。

天野・ご指摘のとおり、いわゆる資料ネットと呼ばれる団体は、それぞれ活動に差がありますし、四七都道府県中で資料ネットが存在しないところも多数存在します。資料ネットがある地域でも神戸や新潟や宮城のように活発なところもあれば、そうでないところもある。人間文化研究機構の事業としては、資料ネット活動との連携を軸に、これらの活動をどう活性化していくのかというものがテーマになると思います。個人的な見解でもありますが、資料ネット活動というのはひと



天野真志

つの形態であると思います。資料ネットを軸に展開できる地域に関しては、それが活性化していけるような取り組みを展望して、宮城や神戸と密な連携をはかつて地域の検証が期待されます。ただ、必ずしも資料ネットという形態に限定されず、それぞれの地域に即応した新しい文化活動に発展していくのであれば、必ずしも資料ネットというものでなくともいいのではないか、というふうに思っています。

資料ネットは古文書しか対象にしないじゃないか、ということを言われたりします。もちろん、資料ネットは古文書などの文字資料以外にも関心を持つていますが、歴史研究者が中心であるという資料ネットの特徴上、文字資料が主対象になっています。地域社会に伝来する多様な対象を想定した場合、資料ネットを飛び越えて大きな展開になつていく地域があつてもいいでしょうし、その際に人間文化研究機構や国立歴史民俗博物館がこうした事業を開拓する意味はあるのではないかと思います。その意味では、資料ネット活動は地域社会の歴史文化にアプローチする上でのきつかけになるのではと考えております。

次に、地域の意識と研究者のズレについてです。換言すれば、考え方や価値観の違いということになりますが、その背景を考えてみると、ひとつにはそれぞれで捉えられてきた歴史像、文化像の差ではないかと思います。たとえば古文書を通して描かれる歴史像と、それ以外のものから紡ぎ出された地域像との違いですね。地域のなかで、歴史文化の断面として描かれているものの断

面の違いがそこにあるのではないでしようか。そこには、地域産業や観光政策の過程で喧伝されたお国自慢的なものもあれば、アカデミズムが一面的な評価で構築してしまった地域像もあるでしょう。これらを相対化していくことも重要でしようが、個人的には、こうした多様な地域像やそのズレも組み込んだかたちで、これらも一種の文化として捉え直してもいいのかなとは考えております。これに関しては具体的な結論がすぐに出るとは思ってませんし、かなりの時間がかかることがあります。ことだと思ひます。地域像は可変的ですので、それを想定した上でもっと大きなレベルでの文化として考えをひろげていくのもいいのかなと思つております。

川村：確かにすぐに答えの出る話ではないかと、特に後半は思うのですが、この点はおそらく次の謝先生の問題ともつながっていく話であるかと思うんですね。そこで、先ほどお話をした、知識と研究の内容とネットワーク、そういうものが合わさってできあがつてくるのは謝先生がお話をされたパブリックな場なんですね。つまり公共圏みたいなものを私たちはこれから、大学や博物館、市民、自治体を巻き込んで、いかに作つていくかということになるかと思うのですが、謝先生には先ほど台南地震の話、時間がなかつたかと思うのですが、あのお話は多分、一部の葉山さんの話のなかに出てきた個人の家を対象とすること、つまり公的には「文化財」ではないものを対象としたという話と重なると思うので、台湾でそういう実践をされた事例についてもう少しお伺いしたいと思います。

もうひとつは竹籠の家とか、私も映像をやっていますから、映像を地域に還すという活動から得られてくるもの、そこでは天野さんが言つて いるような、地域とのズレがとくになかったのか

どうかをお伺いしたいと思います。

謝



謝仕淵

…まず非文化財を説明するときに、どのように考えるのか
というのは、興味深い課題ではないかと思います。私たちが博物館のなかでこの非文化財をどう扱うかを議論するときに、二つの考え方があります。ひとつは、例えば去年の台南大地震に関する記録で、そのなかにメディアの記録があります。このメディアの記録というのは台湾の特別な現象かもしませんが、ひとつの観点しかありませんでした。ですのでメディアはひとつ
つの観点しかなかったのですが、住民の被災した記憶、あるいは様々な考え方は博物館がしつかり受け止め、重視しなければならないというふうに思います。だからこの非文化財にどう直面するかということを討論するときにまず、このような記憶はさまざまな観点から、考えなければならぬというのがあります。

それからもうひとつ討論したことは、レスキューされた生活の物件です。具体的には写真が多かったのですが、この写真は、人びとのそれぞれの記憶、それぞれの思い出が含まれているものですが、これらが地震に対する傷の癒しのなかでどのように使われているのかというのが、まだわからぬんですね。なぜかとすると台南大地震はまだ一年しか経っていないので、これからどういうふうになつていくのかは、これから考えていきたいところです。

それから映像ですね。最近は映像がデジタルになつていて、データやデジカメに保存さ

れていますが、これからこれをどのように使っていくのかというのは、技術的な課題も出てくると思いますので、ここは博物館が慎重な対応をとらなければいけません。映像に関して、地方の歴史や各国の歴史にどう使っていくのかということは、台湾では二〇～三〇年代は家族のアルバムを作るというのがブームでした。だいたい写真に撮つて残されてきたのですが、文字はあまり残っていません。ですから、このようなものをどう読み取つていくのかというのが博物館の役割ではないかと思います。

川村・いまおっしゃっていた、多元的な見方や、発表のときも繰返しお話された、歴史といふのは解釈するだけでなく、現代の状況と常に対応させて考えなければいけないということが課題だと思いました。まだまだ議論したいところもあるのですが、すでに時間を超過しておりますので、ここで終わりたいと思います。

『市民参加型』で地域を学ぶ

—その背景、課題、可能性—

加藤 謙一（金沢美術工芸大学美術工芸研究所学芸員）

金沢美術工芸大学の加藤と申します。今日は「『市民参加型』で地域を学ぶ—その背景、課題、可能性—」と題して報告いたします。今日お話をさせていただくのは要旨集にも書いていますが、前職として二〇〇八年から二〇一二年まで勤務した長崎歴史文化博物館での活動となります。（写真1）タイトルに、カッコ書きで「市民参加型」というふうに書いておりますが、少し広い範囲でこの言葉を理解して、今日の報告とさせていただいております。その内容は、「利用者が能動的に博物館資源と関わりをもち、それを使いこなそうとする意欲に基づき展開される様々な活動」と捉えたいと思います。今日の報告のなかではおもに、博物館ボランティアの方々、学校の教師、この二つの立場の方をいわゆる市民参加型の主人公と位置づけております。通常、学校の教師といいますと、学校教育のなかで、組織として博物館と関わるというふうになりますが、た





写真1 長崎歴史文化博物館

だ、その現場で起こりますいろいろな活動というのは、最終的にはその教師の意欲や関心という個人的なものに拘るところがとても大きいと感じています。そこで市民参加型のひとつのあり方として、学校の教師というのも位置づけていくことになります。

そして、今日の実践報告では、学校教育における地域文化学習が抱えている課題のひとつを博物館がどのように解決し、支援できるのかというアプローチでさまざまな取り組みをおこなった事例をご紹介させていただきたいと思います。前半ではその実践の事例を、後半では実践のなかで直面した課題をどう現場の担当者が考えて解決の方向に模索をしていったかについてご報告いたします。

今回関わりました三者は、ボランティア、教師、博物館の担当者、ということになります。それぞれが博物館での市民参加型の活動にどのような立場から関わっているかを簡単にまとめます。多くのボランティアの方々は、地域の歴史や文化に対しても非常に愛着をもっています。そういう自分たちの愛着に根ざして獲得したさまざまな知識や関心を来館者に伝えたいということが、活動のモチベーションとなっています。また、学校の教師の皆さんには、今回は特に小学校六年生の歴史学習で博物館を使う場合を取り上げていますが、地元の子どもたちのなかにも長崎の歴史や自分たちのまちの文化にまだまだ接する機会のない子どもたちが非常に多いということについて、

危機感を持つておられます。そういうった先生方が、子どもたちに地域の歴史や文化に親しむ機会を与えていきたいということで博物館との連携に協力をしてくださいましたことになつたわけです。博物館担当者のほうでは、長崎という観光地でもありますし、市内の狭いエリアのなかにさまざまな史蹟が点在して集約されている、そういう地域の特性もありましたので、いわゆる長崎の過去の姿について、博物館展示を通じて紹介する、そして史蹟が存在する現在の景観や、歴史的なさまざまな情報と博物館展示をつなげるような実践をしたいと考えていました。そういうたなかで、今回の活動が生まれるわけです。

これは教師の立場からの背景的な話になるのですが、さきほど長崎の子どもたちが自分たちのまちのことをなかなか知る機会がない、史蹟に脚を運ぶ機会がないという話をしましたが、その要因の一つとなつてているのが、平成の大合併です。一九九五年に特例法が施行されて以降、二〇〇五年、二〇〇六年をピークに全国で合併が進みます。長崎市では、周辺の香焼町・伊王島町・高島町・野母崎町・三和町・外海町 琴海町が長崎市に編入されました。旧長崎市内の学校に勤める教師でさえ、中心部の史蹟になじみの薄い子どもたちが多いという話をしていたのですが、さらに外側の地域も編入されたことで、自分たちの地域の歴史や文化を学ぶための知識や経験には、市内中心部の子どもたちとその周囲の子ども達との間に大きな格差が生じているということが実際ありました。そうしたなかで、今回の実践のことを考えていくことになつたわけです。

一方、博物館側でも今回の報告に至る背景には次のような点がありました。長崎歴史文化博物館は、地域の文化資源を博物館展示と結びつけることで、もともと小学校六年生の総合的な学習

の時間で利用されることが多くありました。それは単に長崎の見学で終わるのではなく、そのあとに熊本市を訪れる修学旅行と組み合わせて展開する学習です。つまり長崎の歴史や文化を学びつつ、その経験を踏まえて、修学旅行先の熊本で、再びさまざまな歴史学習をおこなう。帰ってきて、それらを比較して、長崎にはこういう特徴があるんだとか、こういう良さがあるんだといふのを認識するというゴールを持ちながらおこなわれる学習が多かつたという点があります。

こうした学習では、午前中に博物館の見学をして、午後から市内を回るという見学のスタイルが以前からありました。ただ、その両者の間にあまり関連性がありませんでした。博物館では常設の展示室をとりあえずざっと見て、長崎の歴史を大掴みに理解して、午後は午前の博物館見学と直接関わらず、自分たちの行きたいコースを選んで出かけるというものでした。つまり午前の博物館活動と午後の市内見学との間にはある種の断絶があつたわけです。それらをもつとうまく有機的につなげる見学プログラムができるないかという思いが博物館側にはありました。私たちの博物館側で一番やりたかったのは、やはりこの点でした。博物館で地域の文化資源の歴史的背景や、自分たちが今から見学にいく長崎の街の過去の姿を学んだ上で、午後から実際に今生きている史蹟、歴史的な場所にいって、博物館で学んだことをもとに現在と過去を現場でつなげる。そこで、「過去にはこういう場所だったかなー」と想像し考え、最終的に情報をまとめ、感想を編集発信するというプログラムです。そういうことができるようになると良いなと考えていたわけです。

さきほどから史蹟といつていますが、長崎市内周の徒歩圏内には、中国との交流を示す史蹟と

実践事例

1. 動機付け「じげもんクイズ」→「じげもん」レベルを上げる。
2. 博物館見学（午前）＊4つの見学コース
 - (1) 旧居留地
 - (2) 唐人屋敷・中華街
 - (3) 出島
 - (4) 昔の街並み・石橋
3. 「長崎さるく：市内フィールドワーク」（午後）
4. 市内の風景画（図工）、ガイドマップづくり（国語）
5. 修学旅行で熊本市内見学→まとめ
6. 理想的な長崎の修学旅行コースを提案

写真2

して、現在の中華街がありますが、ここはもともと中国との交易品を納めておく倉庫として、海を埋め立てて造られた場所です。出島は、今は周囲が埋め立てられてしまっていますが、かつては扇型をした人工の島で、オランダの東インド会社の貿易の拠点となつていつた場所です。また、市中心部を流れる中島川には多くの石橋が架けられていますが、ここも中国との交流を示す歴史的な景観のひとつとなっています。

また、江戸時代が終わつて近代化が起りますと、西洋の人たちが居留地にやつてきますので、さまざまな人たちが流入してきます。こうした中で大浦天主堂のようなキリスト教の教会も建てられることとなります。このように時代を超えて、いろいろな国や地域の要素が混在して現在のまちの景観を形成しているのが長崎の大きな特徴であります。

今日、入口でお配りした長崎再発見という資料があります（本報告末に掲載）。この資料は、長崎市立西城山小学校の先生が作られた授業計画です。全部で三五時間の授業ですが、学習内容の一番はじめに長崎市内のことどれだけ知っているかを問う「じげもんクイズ」を子どもたちに出します。「じげもん」とは「地元の人」を意味する方言です。結果はやはり、みんな知らな

いことが多い。それをひとつめの動機づけにして、今からじげもんレベルをあげていこうじゃないかとなるわけです。博物館が関わる部分は二番目の博物館見学です。午前中に博物館の見学をして、その後に四つのコースを設定しました（写真2）。

この一～四番の見学コースというのが、午後の「長崎さるく 市内フィールドワーク」と書いてあります。これのそれぞれと連携、関連してくることになります。「さるく」というのは長崎の方言で、「ぶらぶら歩く」という意味になります。市内各所をぶらぶら歩くということなのですが、ただ歩くだけでなく、長崎市には自分の脚で史蹟を巡るための「長崎さるく」という観光インフラができあがっています。コースが設定されたパンフレットが用意されており、自分たちだけで歩くこともできますし、さるくガイドというボランティアが案内してくれる仕組みも整備されています。おもに修学旅行でくる子ども達や観光で訪れる人たちが「長崎さるく」を利用して散策しています。

この学習では、博物館の見学と長崎さるくを組み合わせることになります。帰ったあとには、图画工作の時間に市内の風景を描いたり、ガイドマップを国語の授業で作ったりします。修学旅行で熊本市内を見学したあとに、それをまとめて、最後は理想的な長崎の修学旅行コースを提案するという形でひとつの授業が流れていきます。

子どもたちの終わったときの感想をいくつかご紹介します。

- ・ボランティアの人へ教えてもらった眼鏡橋の作り方や、中国から伝わったことなどにびっくり

りしました。さらにわからないことなどがあつたら、またガイドさんに聞いてみようと思ひます。

- ・博物館の見学で、貿易を中国や他の外国ともしていて、お互に協力しあつてゐることがわかりました。さるくでガイドさんといった場所は外國と幕府の関係をよく示す場所でした。長崎が日本全体の出発点だとわかりました。すこしじげもんレベルがあがりました。
- ・博物館での三分の二ほどが気になることばかりでした。そのうちの五分の一はさるくで説明することができるので、さるくをがんばりたい。

結果的にこれだけだとちょっと難しいと思うのですが、一応、子どもたちの前半の見学と後半のさるくの活動をつなげながら、いろんなことを知ることができたので、町を巡るほかのコースにもいつてみたいと。これをきっかけにほかのところもみてみたいということを考えてくれるようになりました。

こちらは国語の授業で作るガイドマップの一部です。子どもたちでガイドマップをまとめていきます。これはグラバー邸の見学、こちらはチャイナタウン長崎というタイトルで新地中華街の見学を想定したものです。四つ切りの画用紙に子どもたちがこんなガイドマップを作りました。このようにいろいろな切り口で町の中を巡れるような仕組みができています。これはオランダ坂ですから、旧居留地を巡る子どもたちということです。（写真3～6）

この学習を終えた学校の先生方からは次のような感想をいただきました。



写真3 ガイドマップ（グラバー園）

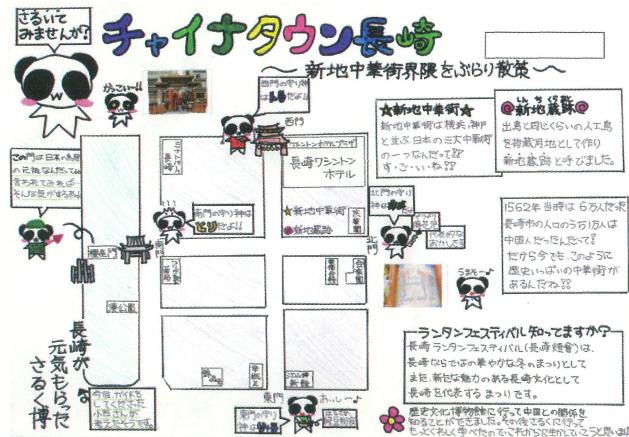


写真4 ガイドマップ（中華街）

・博物館で得た情報とフィールドワークで得た情報をまとめることができた。博物館での学習がきっかけで、地元への歴史への関心が高まつた子どもたちがいた。

- ・家で家族との会話のなかでじげもんクイズに相当する長崎に関するクイズを話題にあげるような子どもたちもいた。
- ・学習が終わつたあと夏休みの旅行で行つた先で、今までおもちやを買つていた子が歴史の

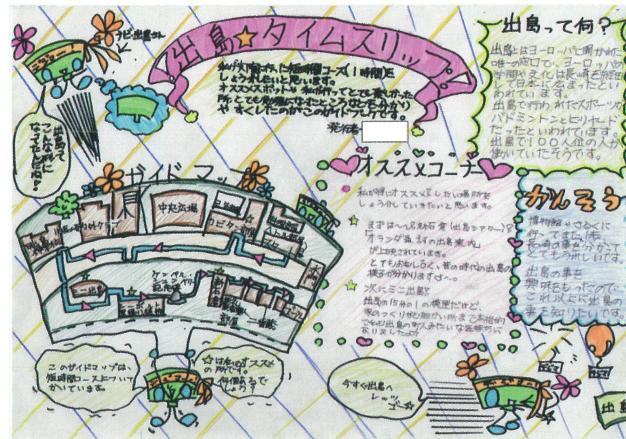


写真5 ガイドマップ（出島）



写真6 ガイドマップ（中島川の石橋）

関連のものを買うようになっていた。

- ・普段のなにげない景観から、昔の姿を想像することができることに気がついた子どもたちもいた。

- ・忙しい授業のなかで効率的に学校の外での学習をやらなければいけないので、一日で博物館と現地を結びつけて学ぶことのできるプログラムはとてもありがたい。

このように、さまざまな成果があつたことから、同様の見学プログラムは、その後も多くの中学校で内容を少しづつ変えながらおこなっています。そのなかでやはり博物館ボランティアや教師たちからは、課題も提示されるようになります。博物館ボランティアの人たちから出たのは、子どもたちへの案内方法に対する不安です。一般的の来館者であれば、だいたいしやべっていることを理解してもらえるが、子どもたちの場合は知識レベル、もつてている情報がどんなものなのか分からず、子どもたちへの案内に不安を持つボランティアもいました。一方、教師からは、ボランティアの案内方法に対する改善点を指摘する声もありました。見学中に、資料を「見る」ということと、ボランティアさんの話を「聞く」ということ、そしてワークシートなどに情報を「書く」、この三つの行為をボランティアの方たちは、子どもたちの様子を見ながら組立てることができず、結果、子どもたちが混乱したり、見学に集中できないといったことが見受けられました。また、実際の授業計画と、展示解説の詳細な擦り合わせの必要性を再認識される場面もありました。例えば教師が教室でおこなう見学の振り返りの授業の中で子どもたち自身に気付いてもらいたいと



写真8 展示リニューアル検討作業



写真7 学芸員による研究報告

思っていた事柄を、ボランティアさんたちが、展示の現場で話をしてしまった。つまり仕込んでおいたネタがばれてしまったために授業計画自体が大きな変更を迫られることが生じたのです。

私たちの方ではこのような事態を受けて二〇一一年にボランティアのスキルアップ研修を計五回おこないました。このうち「教師の視点から見た博物館学習」という研修では、実際に学校の先生に来ていただき自分がどういったことを博物館での学習に期待して子どもたちを博物館に連れてきているのか、をお話してもらう機会をもちました。

ボランティアと教師とのあいだで相互理解、お互いの考え方を理解し合う場を博物館側で設定したわけです。その他には学校向けのガイドボランティアと博物館担当者が月例でさまざまな情報交換をおこない、現場で起きている困難や博物館側が知っている新しい情報を提供する場を設けました。

もうひとつ学校の教師向けのプログラムを二〇〇七年から続けています。協力校パートナーズプログラムというものです。協力校は、博物館の近隣の小中学校を協力校とし、そこから教師を一人出してもらうものです。パートナーズは学校の距離如何に関わらず、教師のなかで、博物館と関わってみたいと思う方に自由



写真9 年度末に開催する実践報告会

意志で入っていただくものです。このプログラムを年六回おこない、お互にいろいろな実践の事例や情報交換をする機会を設けました。各回では、特別展の見学、学芸員による研究成果の報告とそれに関わる展示の解説、実践事例の報告会、常設展示リニューアルの検討、ボランティアとの情報交換などをおこなっています。年度末の最終回では、このような報告会をおこなつて、

取り組んだ活動の成果の発信と共有をおこなっています（写真7～9）。

このプログラムの大きな特徴は、緩やかな自由意志に基づく教師と博物館担当者は、「人」による結びつきにあります。多くの場合、学校と博物館の連携の仕組みは教育委員会から教育現場に要請があり、結果、学校と博物館という「組織」どうしの連携になりがちですが、そこを「人」で結びつけなくてはいけないだらうということで、こういう形をとっています。ここまで紹介してきましたが、市民参加型の活動というものについて私なりに今回のご報告を通じて考えたのは、歴史学習を通じて地域文化を発見する機会に博物館が関わっていくことの意義です。ご紹介した活動では、博物館の展示と現地をつなぐことで、地域文化が持つていている歴

史的な深度に気づく、つまり現在に生きる歴史的景観から過去の姿に思いを巡らし想像するとい
うまなさしを子どもたちが獲得するきっかけになつたと考えます。

博物館担当者としては、人びとの中にある「博物館と関わりたい」という意欲を見いだす努力
とともに、時には「そそのかし」していくことも必要であると思つています。一方で意欲があるか
らこそ双方の思いを調整する作業が博物館側には求められるということになると思います。今回
は、博物館担当者である私たちの方で、異なる立場の参加者が相互交流できる場づくりと、その
調整をおこなつたということも含めて、市民参加型の事例として報告させていただきました。

6年	単元名「長崎再発見」	5月～10月	35時間
目標	自分たちの郷土長崎のよさを見つける活動や修学旅行先の歴史や文化にふれる活動を通して、自分たちの郷土のよさを発見したり、郷土のすばらしさを発信したりすることができるようになる。さらにはこの学習を通して、長崎に対する郷土愛を持てるようにする。		
学習内容	時間	指導上の留意点・参考事項	評価・他教科関連
1 郷土長崎の文化や歴史について調べる計画を立てる。	3	○修学旅行のオリエンテーションの場で、修学旅行先はおろか、郷土長崎について知らないことが多いことに「じげもんクイズ」を出し、気づかせる。 ＜修学旅行プレゼンテーション＞ ○長崎歴史文化博物館見学や長崎さるくへの参加をする計画や準備をする。 ※長崎さるくのコースを複数設定し、それに合わせた博物館内での見学ができるように事前打ち合わせが必要	(1)
2 長崎歴史文化博物館見学・長崎さるくへの参加をする。	6	○コース別に博物館内での見学が午後、現地で確認できるように見学の計画を立てておく。 ○各コースにデジカメを貸し出し、見学したポイントを撮影させ、後のガイドマップ作りに生かせるようにする。同時に、図工の風景画に生かせる風景も撮らせておく。	(2) 図工「私の町」(風景画)
3 「博物館・さるく」で自分が見学したコースをガイドマップにまとめ、それぞれのコースごとにその魅力を紹介しあう。	6	○異なるコースの児童が入るようグループを作り、各コースの魅力紹介を行う。	(3) 国語「ガイドブックを作ろう」
4 修学旅行の自主研修の計画を立てる。	5	○ガイドマップや施設案内等を調べさせ、コース取りをさせる。	(2) 修学旅行
5 修学旅行で自主研修を行う。	8	○各コースにデジカメを貸し出し、見学したポイントを撮影させ、後のガイドマップ作りに生かせるようにする。	(3)
6 見学したコースをガイドマップにまとめ、それぞれのコースごとにその魅力を紹介しあう。	5	○郷土長崎との違いや共通点等も常に意識をさせながらガイドマップに表現できるようにする。	(4)
7 理想的な長崎の修学旅行コースを提案し、西城フェスタで紙上発表する。	2	○西城フェスタで紙上発表をする準備を行う。郷土長崎への魅力や思いをまとめ、理想的な修学旅行コースを提案する。	西城フェスタ
評価規準	(1)郷土長崎を関心を持ち、郷土のよさを発見し、その魅力を発信しようという態度を持つことができたか。(関心・意欲・態度) (2)見学で実際に見聞きしたり、自分自身が感じたりした内容をコース図等と結びつながら長崎や修学旅行先の歴史文化のイメージを捉えることができたか。(問題解決力) (3)自分自身が感じた各コースの魅力が相手に伝わるようにガイドマップに盛り込み、読み手を引きつけるような工夫をすることことができたか。(コミュニケーション力) (4)郷土長崎の魅力に気付いたり、愛着を持つことができたか。(自分の生活を見つめる力)		

長崎市立西城山小学校教諭作成の授業計画

多世代協業を通した地域文化の発見と継承

「特別展『工芸継承』の活動から

小谷 竜介（東北歴史博物館学芸員）

東北歴史博物館の小谷です。さきほどの加藤先生が学校のボランティアという話でしたが、私の場合は多世代協業ということで、高校生、大学生、職人そして学芸員の協業についてお話をさせていただきます。学校と博物館というのは比較的親和性が高く、そこでどのような協業の環境を作っていくのか、ということを私はここ一五年くらいとりくんでまいりました。加藤先生の学校の先生と個人の関係をつなぐというのは大変おもしろい話だったと思うのですが、私の方では、これまであまり博物館と関わらない人たち、すなわち高校生・大学生との関わりを考えてみようという話をさせていただきます。

こちらのポスター（写真1）ですが、今年の一～二月に「工芸継承」という展覧会をやりました。この展覧会では世代を超えた人たちが参加するワークショップを開催して、展示を作る試み



をしました。その話をさせていただきます。

展示作りに先立つて、まず前提としまして、展示の主体となる「工芸指導所」について説明します。この組織は、昭和三年といいますから、今から一〇〇年近く前になりますが、宮城県の仙台市に作られた商工省（現在の通商産業省）が設立した、国立の工芸を研究する研究所です。工芸指導所の目指した目的は、美術工芸とは異なる産業工芸というものを確立するというものになります。昭和三年にできた国立の研究機関になりますので、日本中の工芸やデザインに関するトップレベルの研究者を集めた組織になります。そのため、なんで仙台なんていなかに就職しないわけないんだということで、みんなが嫌がっていまして、昭和一六年にはあっさりと本所が東京へ移っていきます。最終的に重要なのは昭和四六年に正式に製品科学研究所という名前に組織替えとなり、「工芸」の文字がなくなつた点です。国が工芸を研究するのは昭和四六年までの期間であつたということです。日本のデザイン研究では、近代デザインを生み出したのがこの工芸指導所ということで大きく評価をされているのですが、その組織の存在自体がもう四〇年も五〇年も前の話なので、デザインに関わる人たちももう覚えていない。仙台の



写真1 工芸継承展ポスター

織替えとなり、「工芸」の文字がなくなつた点です。国が工芸を研究するのは昭和四六年までの期間であつたということです。日本のデザイン研究では、近代デザインを生み出したのがこの工芸指導所ということで大きく評価をされているのですが、その組織の存在自体がもう四〇年も五〇年も前の話なので、デザインに関わる人たちももう覚えていない。仙台の

人たちもそういうものが仙台にあつたことも覚えていないことがあります。

私の勤めている博物館は宮城県立で、仙台市の隣の多賀城というところにあります。県立の博物館として、宮城県にあつた工芸指導所、その活動を紹介するためには、各地に残る工芸指導所に関する資料を一堂に会して並べるというのが一般的の展覧会になります。ただ、予算面でもまだ、そのような展示を行うには資料調査の面でも時期尚早であると考え、まずは、その存在を多くの人に知つてもらうことに力点をおいた展覧会を行うことにしました。そのための仕掛けとして展示ワークショップを開いて、どういう展示構成で、どういうふうにモノを並べていったらしいのか、というところから、参加者と考えるワークショップをおこなつて、展覧会を作り上げようと考えました。ただし、いきなり工芸指導所の展覧会をやりますから集まつて下さいといつても、参加者が集まるわけがないので、「ものづくり」をキーワードにして、手作業でものを作っていく、そういうことに興味のある人に、そこから工芸指導所を知つてもらい、その活動を考えてもうかたちでの展開を考え、参加者を集めました。それは、単に工芸指導所を過去にこんなものがあつたんです、という紹介をするだけでなく、それをもつと今の人たちの感性を活かしたものづくりを通して、工芸を根本から考えていく場にしたいと思ったのです。そこで工芸を継承するという、展覧会の名前も見いだされていきました。

写真2がワークショップの様子です。うしろにあるこれが展示品になつていく、工芸指導所で作っていた試作品に関する資料です。それをこの彼は手に持ち、実際に資料に触れて、これつてどういうことだろうとか、こういう見るからに若そうな人から、多世代協業ですから、そうで



写真2 ワークショップの様子

はない人までです。参加者としては、職人、実際ものづくりをやっている、ろくろをひいたりする職人。東北工業大学というおもにプロダクトデザインをやっている子たちなので、美術館とは親和性が高いのですが、あまり歴史博物館には興味がない人たちの院生、学生。それから東北学院大学のおもに歴史学科の学生ですから、歴史博物館が好きな人たちだけど、プロダクトデザインには興味のない人たち。そして一応県内の全高校生に案内を出したのですが、のつてきてくれたのは宮城県工業高校のインテリア科で、いわゆるプロダクトデザインを勉強している生徒。そして学芸員。それから検討会議委員と書きましたが、大学の先生や職人の師匠というような人に、アドバイザリー的に入ってもらいました。

実際どういうワークショップをやろうかと考えたときに、通常、私たち学校教育の場というのは、先生がいて生徒がいますから、先生は教える人で、生徒は教わる人、そこには一方方向の会話しか基本的にはないわけですね。なので、そういうものを超えていこうということをやりましょう、プロとアマチュアの差はなしでやっていきましょう、さきほど肩書きを出しましたが、この展覧会でやっている行為には基本的には名前は五十音順で出します。職人というカテゴリーで人の名前は出さずに、全員がフラットに、高校生であろうと、職人だろうと学芸員だろうと皆五十音順に名前を出す。だけども、アマチュアとプロ

は超えるんだけども、かならず忘れてはいけないのは、対等にはならないということです。プロにはプロの知っていることがある。プロの職人は、ろくろを回すことでは誰もかなわないわけですし、われわれは学芸員として展示をやることに関してはプロである。高校生はそういうところではプロを評価する。一方で、フラットに意見を出し合うというところはやる。そういうところでの尊重をお互いに大事にしました。これをやってみると意外に影響が大きかったのは、われわれプロの側で、アマチュアの人と真剣に話をすると、「あ、そういうふうに見えるのか」と思うことがとても多く、そういうところでいえば、われわれの方が勉強する場だったんですね。

では、ものづくりをどういうふうに考えていくかということで、討論を中心に構成と、資料を手にとって触りながら検討する、この二つを大きな柱に据えてワークショップを進めました。そこでは工芸品はどういうものなんだろうか、工芸指導所ってどういう活動をしていたんだろうか、といったことをみんなで考へるということに力をいれました。そして、一連の議論の中からインスピレーションを得た作品を作つていきました。それはどういうものか、それが工芸指導所とどういうふうにつながるのか、そういうことについて、討論を通して学生たちと職人たちとわれわれで話合つて、そこから最終的に展示という形にもつていくのですが、まずは、ものづくりがキーワードですので、どういうものづくりをしようかということを考えることを通して工芸指導所を考えていきます。

実際の問題として、こういうものを並べたときに学生の意見もなかなかいいものもあると思うつとも、昭和三〇年ころ、つまり五〇年以前の最新のデザイン品なので、今からいうととても

小谷 竜介



写真3 ワークショップに参加した高校生

もうひとつ大きなネタだったかなと思つていま
す。こちらの写真4で、左が職人です。右の二人
が大学生です。タンス職人に漆塗りを教わつて
いるところですが、大学生ということもあって、こ
のチームはほとんど大学生が作ることになりまし

やほつたいたいデザインの試作品が多数を占めます。現在プロダクトデザインの勉強をしている学生たちはあまり過去の歴史に興味がないかもしませんが、デザインの悪さを指摘しがちになりました。そこで、今の観点から評価してどうする、ということをディスカッションで指摘し、もう一度五〇年前の思考に戻つてみようよ、というようなことをやつて議論を積み重ねました。

次に実際のものづくりを紹介しましょう。ワークショップでは工芸指導所の活動や伝統的な技術をキーワードに盛り込みながら議論を進めていきました。そこでは伝統とはなんのだろうかということも一緒に考えました。伝統工芸の作家たちに学生が入っていますが、職人たちは反対にそんな大学生や高校生から提案されることやアイデアが新鮮だったようで、嬉々として製作に取り組んでいました。少し話がそれますが、写真3のこの子は宮城県で生まれ育った高校生ですが、東北歴史博物館を知つていた?と訊いたら、はじめて来ました、と。一七年間宮城県にいても知られてない博物館の学芸員はなかなかつらいな、と思いながらも、東北工大の学生に来たことあつた?と訊いても、ない、というのがほとんどでした。まさに博物館とのつきあいがない人と博物館でつきあうという、このプロジェクトの



写真5 展示チームの活動



写真4 タンスチームの製作活動

た。この職人二人はほとんど師匠状態で、俺の背中を見て覚えろ、みたいなことを平気でいうわけです。それにくらいついて、二ヶ月ほど工房に通つて、漆を塗つたり、木工をしたりして、タンスをひとつ作るということをやつていました。

このもの作りの作業と並行して、展示作りを進めました（写真5）。展示作りは特に興味がある六人ぐらいの大学生とわれわれ学芸員が中心となって展示チームを結成して進めました。最初の取組が展示コンセプトをつくることです。これは参加型展示でやつてくださいというときに、こちらの方で、ある程度、こんな感じで構成されるだろうという素案がありました。そういうものを提示した上でワークショップに臨み、ワークショップのディスカッションを踏まえて、展示チームのみなでキーワードを出し合い、コンセプトを作り上げ、他のワークショップのメンバーに諮りました。さらに、それをもとに展示プランを作り上げるために、工芸指導所の作品を評価し、展示品を選定しました。そして最終的には展示平面を切つていくということもこのチームでやりました。昨日、胡先生の、地元の人と話したら全然違う展示構成になつたというお話をきいて、激しく同意をしたのですが、私の展覧会



写真6 展示制作の様子

も考えていたものとは全然違う、こんな展覧会になっちゃった、というもので、それが楽しかつたのですが、そういうかたちで展示を作る、構成を作つて平面を作るというところまでやりました。当然ながら展示を作りあげます。これがうちの展示室ですが、高校生、大学生、職人が中に入つて、その場でこうやつて、木工の職人が材料となる木をもつてきて、展示のプランまでが自分たちで考えて作るというところまでやりました。

ワークショップ全体を通してずっと議論してきたのが、工芸品とはいつたいなんなんだろうか、その工芸品というのは、美術工芸、産業工芸、等々含めて、工芸といわれているものは、どういふたものなんだろう、ということです。そしてワークショップとして全員で導きだした結論として、「暮らしを豊かにする工芸」というこの言葉にいきつきました。持つて楽しく、使つて楽しい工芸。部屋に飾つておくだけでうれしくなるものもあれば、実際に毎日手に取つて食器として使う。持つことで、見ていることで暮らしが豊かになつていくことが、工芸、というようなかたちで定義をしてみました。それは、さまざまな工芸品、工芸指導所が作り出そうとしたもの、今回自分たちが作ろうとしているものすべてに当てはまるのではないかということで生み出した言葉です。この言葉は学芸員が考えたわけでも、サジエスチョンしたわけでもなくして、大学生や職人のなかで自然に生まれてきた言葉でした。そういうものを作つてきて、それを後世に伝えていきま

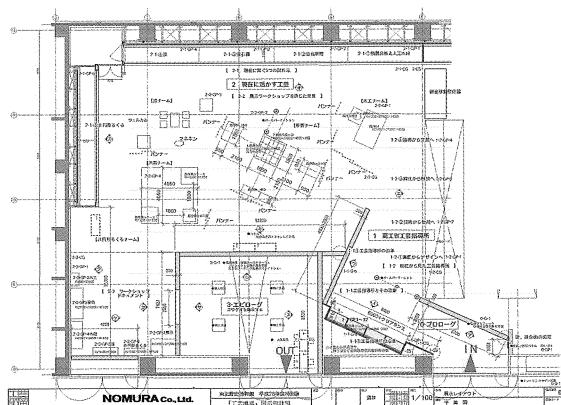


図1 完成した展示平面図

しょうよ」ということが、「工芸継承」という展覧会の
ひとつの結論となるわけです。

の使い方を説明しているところですね。展示解説のときにも学生たちに参加してもらつたのですが、その場でお気に入りの一品を説明してといえば、即座にすらすらとはじめたので、今の学校教育はすごいな、と思ったのですが、そういうのも含めて、皆が自分の意見をもちながら、展示資料と関わりものを作つていくということをやりました。

小谷 竜介



写真8 学生による展示解説



写真7 学生による展示解説

ちなみに写真8が先ほど職人に教えられたながら学生が一生懸命漆を塗っていたものです。タンスの技術を使ってアタッシュケースとキャリーケースを作りました。これは大変衝撃的で、彼はこれをあとで家に持つて帰つて仙台駅でゴロゴロと転がしていたら、全然関係ない女子高生からヤバイといわれて恥ずかしかったことがあります。

このワークショップの取組の肝要な点は、あえてですが目標設定をこつちも用意してあつたことです。逃げ道としての最低こういう展覧会はできるんだというものを用意した上で、どういうふうにオチをつけるんだというところまではあんまり考えないようにしていました。その場の流れのなかで決める。重要なのは予定がたたない企画ということですね。こうなるという目標があつて、こうならなければならないというものではなくて、みんなで話合つて、じゃあ、こういう落しどころができるよね、ゴールとして一月一四日という日付は決まっていましたので、そこまでにこれならできるよね、というものを合意しながら展示を作つていきました。なので、やりながら、後で考えると本当は重要だったことを落したというところもあります。



写真9 ドキュメントのポスター

こうした取組をしながら気がついたのはこの展示をつくる取組で、実際にできあがった展示室が重要なのではなく、展示をつくるプロセス、ものを作っていく一連のプロセス 자체が、この展示のワークショップの一番重要だったところだと。このパネルは高校生二人がどういうふうにものづくりの過程で思考しかを示したものです。この線が高校生達の悩みを表しているんだそうです。さつきの制服を來ていた子はあまり悩まずにすりつといって、できあがったところから少し悩むのですが、こちらの子はずっと悩み続けていて、というところを展示として表現している。これがドキュメントと呼んでいる部分で使つたもので、はじめは私たちがんばりましたー、くらいでこのドキュメントのコーナーを考えていたのですが、この展示ができるまでのドキュメントを展示する部分をどう表現するかについてみながものすごく考えてくれて、こういうポスター（写真9）をつくるということをやりました。

じつはここがこのポスターが展示のキモだということができあがつてみてわかつたということです。それは多分、深い体験を通した発見ということで、プロセスの部分の深い体験と言えるのではと思つています。参加型展示というのが、私が考えると、それは与えられたことをするしかない体験であつたり、与えられたりしたことに自らを見いだしていく体験、できうることをできる範囲でおこなう責任ある体験、というのが参加型展示というふうにいえるのではないかと思ひます。そこでは深い体験ということで、多様な価値観と、経験を有する多様な人たちがプロセ

小谷 竜介

スを共有することにより、実現されるものであり、それゆえに通常では実現できない体験となって発見につながっていくのかなというふうに思っています。

最後に、ここでの発見というのは工芸の発見であり、地域文化の発見でもあると言えるのではなかと思います。普段あまり博物館を利用しない学生や人びとに對して地域の博物館が、そういう発見をみせる場になつているということを参加を通して知つてもらうというのはとても重要だつたろうなと思っています。工芸と博物館を知つてもらう場に一連の過程を通してできたのではありませんかと思います。

私のほうとしても博物館というのはそうした体験を生み出す場にもつと積極的にしていくなければならない。展示ということである程度の発見はあるのですが、もっと深い発見をしてもらえる場を作つて行かなければならぬし、そのための仕掛け作りをやつていく必要があるんだろうな、と改めて実感した次第でもありました。

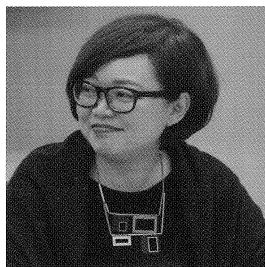
地域文化の再発見、地域社会の再構築

—台湾の市民が主体となる文化活動の方法と意義

黄 貞燕（国立台北芸術大学博物館研究所助教授）

台北芸術大学の黄と申します。よろしくおねがいいたします。今日は台湾で市民が主体となる地域文化活動の概要とその意義を紹介したいと思います。主な事例は、近年、注目を集めた、高雄市で活動しているNPO団体の「打狗文史再興会社」のことです。

この団体がやっていることを理解していただくためには、台湾における歴史と社会との関係について簡単に説明しておく必要があります。台湾の現在の市民活動を理解するためには、知つておきたいことが三つがあります。まず、台湾は世界で一番長い戒厳時期を持つ国とのことです。これに対する反動として、一九八四年の戒厳令の解除によつて、民間の声があちこちからあがりました。過去、禁止されていた地域の歴史の調査などは活発となり、とくに個人が自分の関心をもとに自力でおこなう歴史調査が各地でたちあがりました。地域の歴史調査を通して、自分自身や地域へのアイデ



ンティティを探したいという目的が多かったです。仕事ではなく自力で歴史調査を行われる方は、台湾では“文史工作者”と呼ばれ、このような方が集まつた団体を“文史工作室”と呼んでいます。文史工作者や文史工作室の数の多さと活躍は、台湾特有の現象だと言えます。

次は、台湾の公立博物館には、歴史をテーマとする館が少ないことです。すなわち、地域の歴史史料やものを集めて管理や研究、活用する機構が少ないので、歴史に対する認識は深くなりにくいです。

そして、戒厳令解除になつて三〇周年となつた現在、台湾において歴史を語ることは、いまだ政治的な問題や資料が少ない問題などに直面しています。例えば、小学校や中学校のカリキュラムのなかで台湾の歴史をどう語るのか、どういった視点で語るべきなのかが今でも議論が数多くされています。

その一方、国の文化政策としては、市民社会や市民参加への重要視がますます高まっていくことです。例えば、二〇一六年に台湾の文化資産保存法の修正のなかで、市民参加がより重要視されることになりました。ここでは、文化資産の指定や登録の事前作業では、公聴会を開くことが必要となり、審査するときには、一般市民がオブザーバーとして参加できるように、また、その様子をwebで生中継がおこなわれるようになり、要請をしています。

このような背景があつたので、台湾では、市民による文化活動の活発さは、特別な意味があります。現在、市民による文化活動はいくつかの特徴があります。まずひとつに市民が身の周りにある“古いもの”にとても関心を持ち、そして関連する保存活動が活発におこなわれていること

があげられます。市民が関心を寄せる古いものは、例えば家屋、町並み、伝統的な生活技術とそれに携わっている職人さんなどです。おもしろいことにこれら古いものには、法律のなかで文化資産と位置づけられているものは少ないです。ほとんどが身のまわりにある歴史を感じられるものです。しかし、学校教育のなかでは学べない、公式に出版された地域を紹介する本のなかにも書かれていないものが多いです。そこで、民間団体は、これらの古いものはどういうものなのか、どういった歴史がふくまれているのかということに興味をもつのです。つまり、自分が生活している町の過去への関心が高いのです。

ふたつの特徴は、NPOは、団体自身の在り方はさまざまで、それぞれの活動の目標も異なっています。それぞれのNPO、団体が成立した要因には必ず具体的な社会問題があるということがはつきりとしています。三つめの特徴は、NPOが関心をもつ歴史は、単なる歴史的な認識だけではなく、往々にして町の開発や居住の権利、文化の権利などの価値観が絡んでいるということがあげられます。

それでは、市民による文化活動のいくつかの事例を紹介します。まず、政府と民間が協力して立ち上がった活動の例です。中壢市の中平という町には、日本統治時代に建てられた官舎があり、長年放置されて使われていませんでした。そこで、民間団体が保存活動をおこなつて政府に修繕してもらいました。修繕したこの元官舎は、政府と民間団体がいろんな話し合いをして、町の歴史を紹介する場として再利用することとなり、「中平故事館」と呼ばれています。まとまつた町の歴史というより、町の年配の人々に教えてもらった、比較的身近な生活風景に関する物語を紹介

しています。



写真1 旧鉄道工場

次は、ほぼ完全に民間だけで展開したと言つてよい文化保存活動です。ある民間団体は、台湾の「花磚」という模様が焼かれたブリックタイルに注目して二十年以上をかけて各地にある壊れた古い建物から花磚を収集してデータベースを作り続けています。花磚は、台湾の漢民族が作った煉瓦の建物の装飾としてよく使われていたものです。過去に作つた花磚は技術レベルが世界で一番高いものだつたと言われています。最近、この民間団体は、台湾中部の嘉義にある廃業した材木店を丸ごと買い取りまして花磚を展示する「台湾花磚博物館」にしました。この博物館の設置と運営は、今とても流行つているクラウドファンディングの手法で、民間からの寄付金を集めてやっています。

次に民間と政府が対立している事例です。ここは、現在の台北市のどまんなかの繁華街に位置している車両や線路を修理する鉄道工場だつたところです（写真1）。この工場は一九三一年に建てられましたが、その前身は清時代まで遡ることができ、台湾の鉄道産業の歴史がうかがわれる施設です。大都市のなかで、元のままで保存されており、珍しいことでもあります。その一部は、市指定の古蹟となっています。その所管機関である台湾の交通



写真2 高校生たちの清掃グループ

な古蹟の再利用は、最善策だと思います。

もうひとつ面白い例がありまして、民間と政府の対抗ではなく、生徒と学校側との対抗です。台湾中部にある彰化高校の生徒たちによる文化保存活動です。学校構内には昭和一〇年に建てられた、当時の小学校の建物がありました。戦後の彰化高校がこれらの建物を基にして始まりました。最近、学校はこれら古い建物を壊して新しい体育館を作ろうという計画があり、教育部から一億三〇〇台湾元の補助金が出されました。しかし、生徒たちが反発し、建物を保護する活動が

部鉄道局は、古蹟に指定された部分を美術館として再利用して、ほかは商業機能があるエリアとして再開発することを考えていきました。このような企画は、とても反発を受けっていました。なぜかというと台北には過去にも同じ手法で古蹟を再利用する事例があったのですが、古蹟の歴史や文化よりも、商業的な利益が重視され、しかも商業エリアの運営が、大企業に有利な条件となっているという不満もありました。そのため、そのようなことを繰り返したくないということで反対運動が起つたのです。このような民間団体による抗議が起つた後、最終的には、一部ではなく、工場全体を保存して国指定の古蹟とし、そのうえで、ここを拠点とした国立鉄道博物館が設置されました。このよう

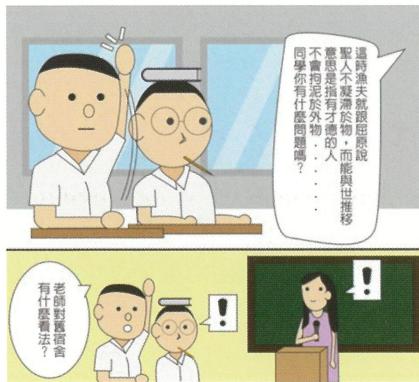


図1 高校生によるフェースブックのページ

おこなわれました。彼らは、いかにこれらの建物を文化財指定の対象にできるのか、その申請の方法まで勉強しました。そして高校生達がみんなで古い建物の掃除をしながら、どうしてこの寮を保存しなければいけないのか、保存する意味がどこにあるのかを話し合っています（写真2）。彼らはフェースブックのページを立ち上げまして、自分たちの活動の様子を紹介しています。そのなかには、この保存運動に関する議論の内容、自分の思いを漫画にして載せて、よりたくさん的一般の人たちに自分たちの考え方を知つてもらう努力をもっています（図1）。

私はオブザーバーとして、これらの活動を見てきました。そのなかでよく考えていたことは、違う時代、違う文脈だとしたら、同じ決断をしたのかという疑問を持ちました。高校生は古い建物を保存しようとしていますが、その結果、学校生活にとつてより重要な、新しく使いやすい体育館の建設はできなくなりました。先ほどの鉄道工場の問題もそうですが、台北のどまんなかの広い敷地の建物を古蹟としてそのまま保存して、しかも国の鉄道博物館に転用されるという結果は、莫大なお金がかかるうえに、運営でもさまざまな課題に直面します。私は、古いものを積極的に保存することに反対するではありません。ただし、違う文脈で考えた場合、違う結果が出るかもしないと思います。例えば、



図2 浜線から哈瑪星へ

辺にある歴史を無視したくないという一心だけです。

少し脱線して補足したいのですが、現在各地の市民運動で保存の対象となっているものは、日本の統治時代の官僚の宿舎や有名人の家などが多いです。これらの住宅は、当時の台湾人にとって簡単に接近できる場所ではなく、親しみのあるものではないのです。当時の人々の生活のなかで、親しみのある建物は、官舎や郵便局や駅などですが、しかし、これらの建物は日本時代の権威的な象徴と見られ、戦後間もなく取り壊されたものが多かつたです。その結果、当時の個人の家は、過去の歴史の証拠と見られ、保存に力をいれて、小さい博物館やレストランなどに再活用され、いまの人々の生活のなかでよく出会う空間となっています。

次の事例は、高雄の「哈瑪星」というエリアの事例です。「哈瑪星」とは一九〇〇年に打狗

もし国は、鉄道博物館を作ろうとしたら、いまの鉄道工場は、一番ふさわしい拠点になれるのでしょうか。また、古い建物に宿されている歴史の保存と新しい体育館の建設の両立できる案がないわけはないでしょう。前述した二つの事例に見た、古い鉄道工場や古い建物などの保存に対して市民の強い意志は、今まで重要視されていない歴史や忘れてきた歴史の証拠をできるだけ守りたいという気持ちがいっぱいあつたことを語ってくれました。高校生達の言葉を借りてみると、自分たちの行動のきっかけは、自分の身邊にある歴史を無視したくないという一心だけです。



図3 哈瑪星エリア

(今のが高雄）と台南の間の鉄道が開通した後、新鮮な海産物を輸送するために南鼓山港の新浜埠頭まで敷いた支線「浜線」の発音からの当て字で、この周辺のエリアの呼び名となります（図2）。一九〇八年に打狗港（古い高雄港）が開港しました。一九一二年にこの周辺が埋め立てられ、高雄初の都市計画エリアの「新濱町」となりました。新濱町は高雄の発祥の地であり、港、鉄道と連動したさまざまな商・産業はここに集まって賑やかでした。「高雄で最初の」と冠される近代的な機関、例えば郵便局、学校、ホテルなどは、ここに多くありました。そして、戦後になってこのエリアでは、ある時期、四五本の線路が通っていたという非常に大きな鉄道基地がありましたが、現在、現役ではありません。

このエリア（図3）は、高雄の歴史を振り返る時には、不可欠な存在ですが、このエリアに残つた建物や建設の保存やその歴史を語る市民運動は、

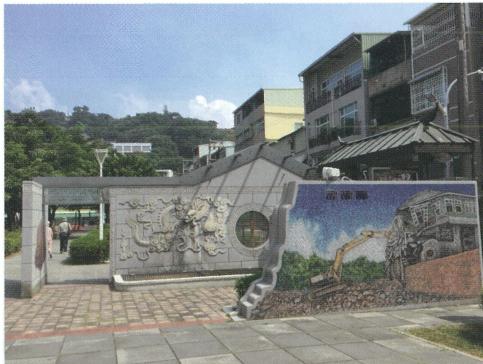


写真3 記念公園内のモザイク

とを主張を提起しました。

そして、二〇〇〇年になつてから市民運動はより活発に行われるようになりました。二〇〇九年、日本統治時代の旅館だった「四海之家」の取り壊しに対する抗議活動がありました。「四海之家」は、当時、とても立派でいわゆる国際的な大きなホテルでした。(ここはもともと国から歴史的建造物として指定されたのですが、隣にある小学校が、キャンバスを拡大できなくなるとして、ホテルを全部取り壊したのです。民間団体が抗議した末に、記念公園ができました。そして、この

一九八〇年代後半以来絶えずに行われてきています。その代表的な存在は、「哈瑪星^{コミニティ}社區工作室」という民間団体です。この団体は、昔の古い写真展を開催したり、地元誌を発行したり、まちづくりのイベントなどを開催しています。一九九八年、高雄市がやろうとした地下鉄の駅の計画は、鉄道線路の基地がダメージを受けることとなります。哈瑪星社区工作室は、これに反対することをきっかけとして、規模を大きくして「哈瑪星文化協会」と改名しました。そして抗議のため、「白い帆」というイベントを開催しました。鉄道線路の基地の保存に賛同する方が白い衣装を着てこの基地に集まり、白い帆をあげて、保存を訴え、この鉄道線路の基地と周辺を「哈瑪星鉄道文化園区」にするこ



写真5 労働者をイメージしたアート



写真4 重工業をイメージしたアート

記念公園のなかには、このホテルが取り壊されている様子がモザイクで描かれています（写真3）。一〇一〇年、古い高雄駅を壊す計画に対する抗議運動が始まり、いまも続けられています。二〇一二年、駅前に日本時代に残されていた建築群があります。それを全部取り壊すという計画が立てられたので、それらを保存するため、「打狗文史再興会社」という新しい民間団体が結成され、市民運動の新しいやり方を次々と見せてきました。後で紹介します。

哈瑪星では、自治体の文化活動と民間の文化活動は、併存しており、それぞれの立場の違いが顕著に表れていました。そこで、自治体と民間が立ち上げていた博物館、資料館の比較、それぞれの団体が作っている案内地図を比較して紹介したいと思います。

哈瑪星鉄道文化園区の右手のところにある昔の港の倉庫群を自治体が改造して『駁二芸術特別園区』と名づけられ、現代アートのギャラリーがあつたり、文化産業（art creative industry）のお店があつたりします。高雄市は重工業都市なので、ここで展示されるアートは、その重工業的なティエスト（写真4）、あるいはその労働者と関連するもの（写真5）の展示を意識しておこなっています。隣の民家の壁までもが労働者を象徴する絵が描かれていています。写真6



写真7 鉄道館の展示



写真6 鉄道館全景



写真9 台湾鉄道物語館の展示



写真8 台湾鉄道物語館全景



図4 政府作成の哈瑪星文化地区の観光マップ

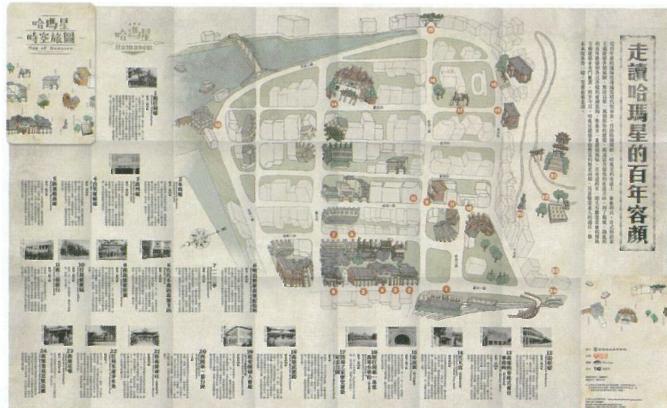


図5 NPO作成の哈瑪星文化地区の観光マップ

は、駁二芸術特別園区のなかに自治体が設置した鉄道館です。この館内では大掛かりな模型がありまして（写真7）、日本統治時代から現在まで、それぞれの時代を代表する鉄道や沿線の都市のスポットを模型で表しています。そのほか、ミニトレインが設置されていて大変人気です。この博物館全体の経営の方針は、やはり懐かしさを体験してもらい、楽しく娛樂的な要素をとても重視しています。

哈瑪星鉄道文化園区の左手のところにある昔の高雄駅の建物を民間団体が「台湾鉄道物語館」として運営しています（写真8）。小さい館ですが、文献や資料やモノがたくさん持っています。例えば、以前、駅におかれていた黒板で、昔の駅員が書いたメッセージがそのまま残っています（写真9）。そして、昔の時刻表やチケットや駅で使われていた参考資料などもありました。

次に政府側と民間の施設がそれぞれ作成した案内地図を比較します。最初に政府が作った地図（図4）、これは、観光目的というのが大きく表示され、近くの買い物情報や観光スポットが載せられています。一方、民間のNPOが作ったものは、歴史的な建造物やスポットが紹介さ

れています（図5）。

さきほど、紹介した打狗文史再興会社の話に戻りましょう。そのメンバーは、地元の住人や大學生、あるいは高雄出身者や高雄を研究する研究者で構成されています。建築群の保存運動のあと、彼らはこのエリア内でさまざまな活動を展開しました。そのなかで、一番有名なのが「木工教室」と「町の考古計画」です。木工教室では、ベテランの職人について木工の技術を学ぶわけですが、数回の授業を受けたのち、みなさんはちゃんと木製の窓枠を作れるようになります。また、町の考古活動についてですが、この活動はいわゆるフィールドワークの簡易版です。参加す



写真 10 打狗文史再興会社



写真 11 日本統治時代の高尾市のマーク



写真 12 打狗文史再興会社の展示



写真13 収集された家具類



写真14 修繕対象の旧家



写真15 修繕した窓枠

るメンバーは、自分で町を探索できるように教えられます。打狗文史再興会社は、古い民家を拠点としています（写真10）。玄関の暖簾にあるマークですが、これは日本統治時代の高雄市のマークです（写真11）。そのなかで今までおこなってきた活動の記録写真だつたり、活動に関する資料だつたりを展示しています（写真12）。また、駅前のエリアを整備したのちに出てきた木材や、民間の家のなかにあつた家具を集めています（写真13）。先ほど紹介した木工教室の最初の大きな目的は、この拠点の隣にあるこの古い家を修繕するためでした（写真14）。ここはもともとほぼ何も残されておらず、壁あるいは骨組みだけが残されていました。もちろんこの建物はいわゆる文化資産というまでのものではないですが、これを修理するために、専門家にお願いする補助金はもらえません。彼らは時間をかけて自分たちの手作りというかたちで、少しずつ



写真 16 打狗文史再興会社が製作した窓の庇

つ修繕していくと考えています。現在、一階の窓を修繕し終えたところです（写真15）。また彼らは自分たちが習得した木工技術をつかって、近所の住民のために窓に庇を作つてあげています（写真16）。その目的は木工教室の参加者たちは、習得した技術がコミュニティのなかで活用できるように、自分たちも地元との関連性をより深めていけるようにしたいということがあります。

打狗文史再興会社の活動への評価に関して、最近台湾でとても流行っている旅番組の内容を通して窺うことができると思います。この番組の案内役は有名な作家です。その旅番組のなかで哈瑪星エリアを紹介するとき、打狗文史再興会社の存在が取り上げられました（図6）。つまり旅番組の制作側の観点からは、哈瑪星エリアの紹介では、地元の古い建築などだけではなく、こちらの民間団体の活動がこのエリアを認識するためにいい切り口だと認識されていたようです。

打狗文史再興会社の活動は、今までのやり方と違つた、新しい考え方とやり方を見せました。先に紹介した例のように、白い帆をあげることや、また人を動員して壁に絵を描くことなど、こういったような市民活動の共通点は簡単で楽しそうで誰でも参加できることでしょう。そして、たくさん的人が集まることができ、一緒に加えるということが重要でした。打狗文史再興会社がやつていることは、幾つかの戦略があると思います。まずは、彼らの活動は生活に根付いた尺度に戻り、参加者に歴史や文化を観察し体験する能力を育てます。二つ目は、彼らの活動は、非

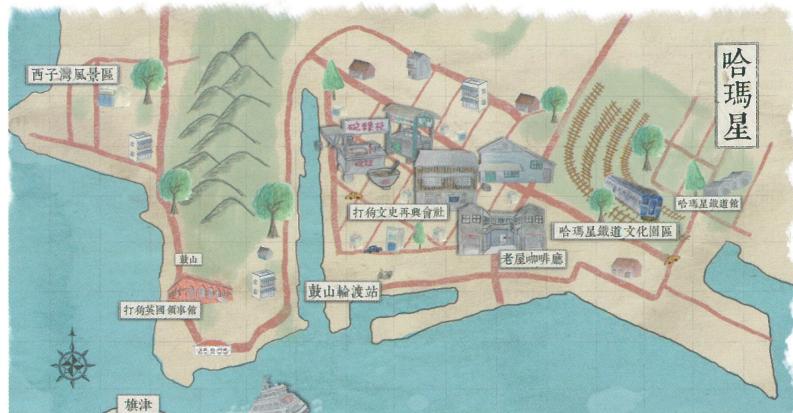


図6 旅番組でとりあげられた打狗文史再興会社

典型的な文化資産の保存と言え、実践による歴史意識の内在化を狙っています。そして、コミュニケーションーサービスをやり、町との交流を進めながら、町の歴史を調べ、や勉強したことをコミュニティの日常の活動として位置づけて定着していくことを狙っています。最後に、自分の組織を大きくするのではなく、多様性がある活動を通してさまざまな参加者が集まり、ネットワークを広げていくことを目指しています。

以上で私のプレゼンを終わります。

討論

話者 加藤 謙一（金沢美術工芸大学美術工芸研究所学芸員）

小谷 竜介

（東北歴史博物館学芸員）

黄 貞燕

（国立台北芸術大学博物館研究所助教授）

コーディネーター

武知 邦博

（枚方市立旧田中家鑄物民俗資料館学芸員）

武知：それでは第三部「市民とともに考える地域文化」のディスカッションをはじめたいと思います。コーディネーターの枚方市立旧田中家鑄物民俗資料館で学芸員をしている武知邦博と申します。

私の勤める枚方市立旧田中家鑄物民俗資料館は、大阪の枚方という、京都と大阪の境にある町にあります。もともとは農村地域でしたが、工場の誘致と大阪のベッドタウンとして開発された結果、新住民が多くを占める人口四〇万人の町です。こうした地域の博物館施設に勤めておりまして、みんなの地域と博物館活動の発表は刺激になりました。多岐に渡るご発表でしたが、加藤先生のお話が、教師と博物館学芸員とボランティアの三者の活動についてのお話だったと思います。小谷先生は過去の工芸指導所の試作品を足がかりに、現在の若者である職人や高校生大學生と、博物館の学芸員が協業して、作品や展示を生み出すというお話しだったと思います。黄

先生は高雄の人びと、もしくは台湾の人びとの、歴史を活用した町づくりをしていくお話をしました。三者の先生方、いずれも、歴史がキーワードになると思います。

では少し、質問をさせていただきたいのですが、加藤先生、この長崎歴史文化博物館で学校の先生に来てもらつて、研修等を行われたとのことでしたが、対象としている学校というのは何校くらいあって、実際その研究会に来られたのは何名くらいだつたでしょうか。

加藤…後半急ぎましたのでそのあたりきちんとお話をできなかつたのですが、協力校パートナーズプログラムというひとつの中組みのなかに違つた形で集まつた先生方、協力校、パートナーズで構成されています。協力校は博物館周辺の小学校で四校ほど、中学校で二校ほどありました。そこから、先生お一人を出していただきたいとお願いしています。パートナーズは博物館を見学された先生のなかで、この人だつたら、声をかけたらおもしろがってくれるかな、というような先生をある意味一本釣りしまして、前々から声をかけて、来年度またパートナーズの募集がありますので協力してください、ということでお



武知邦博



第3部の討論の様子



小谷竜介

声がけをさせていただいた先生です。年度でけつこう変わりますが、多いときで二〇人くらい、少なくとも一〇数名おられると思います。先生方は県内いろんなところに赴任されますので、長崎市内中心ですが、離島に行かれたような先生も登録されている方がおりますので、そういう意味では長崎全域から来られているという形になっていたかと思います。

武知

・もうひとつ質問したいのですが、合併によつて新たに長崎市民になつた、今まで長崎市ではない地域のひとたちは、長

崎中心部のことをあまり知らないとおっしゃっていたと思いますが、合併前は自分たちの地域ではなかつた長崎市街のことを勉強しなくてはいけなくなつたことに対する反応はありましたか。

加藤・具体的な反応は私たちのところには届いていないのですが、長崎の場合の特徴として、長

崎の地元のことを学ぶということイコール、六年生の社会科のなかの江戸時代や近代の話を学ぶということとかなり重なつてくる部分があるというのが事実としてあります。長崎市の周辺の子どもたちも当然、出島や鎖国のことを学ぶのですが、そのときの地元のまちのなかにそのことがあつたというのに距離感が、中心部の子どもたちと周辺部の子どもたちに差があつただらうとは思ひます。

武知・ありがとうございます。わたしの町も、さきほど申しましたが、一気に新しい住民が増え



加藤謙一

た経緯があります。ところが博物館で扱っている資料というのは必ずしもその人たちの先祖の資料ではない、新住民に旧来の資料、歴史をどう位置づけて伝えていくのかということが気になりましたので質問させていただきました。

小谷先生にですが、学生さんや若い職人さんたち、博物館に興味を持つていなさそうな人たちに、工芸指導所の資料をみせて、それを展示などに発展させるといった取り組みをしておられましたが、彼らは過去の資料にどういったイメージをもつようになりましたか。

小谷・大きいのは、過去のものを今と同じスケールで、今の判断でみてはいけないということを知ったことだと思います。今の基準だと当時の最新鋭のデザインは非常にダサイ。そうではなくて過去は過去のものと理解するということが一番大きくて、歴史教育においてもうひとつ必要なことだと思います。

武知・歴史を考えるときに現在とつなげて考えるほうが面白みも増しますし、歴史に興味のない人たちにとっては、つなげてしまうことによつて自分のことのように考えられるのかなということを考えていたのですが、必ずしもそうではないということですね。

小谷・その意味での「つなぐ」といったときに、自分がこういうものを作るといったことをきっかけに、つながっていくというものは片方でそうだと思うのですが、一方で私がこだわったの

は、歴史博物館がもつ役割のほうです。純粹に歴史教育ではなくて、歴史に興味をもつてない人に、他の方面から興味をもつてもらうときのギャップみたいな話で、そこからワークショップをやつたわけです。その結果、過去の観点をもたなければいけないというのはまさにこういうことだと明らかにできたと思います。

武知・それでは黄先生にお伺いします。先生のお話からは、台湾の人びとのエネルギーッシュな文化活動を感じました。日本では一九七〇年代の後半から、自治体や企業、個人まで博物館や資料館づくりが盛んだった時代がありました。しかし私立の博物館は、経営母体とも言える企業や個人の業績が傾いてくると、博物館経営が困難になつてしまつたという状況があります。そういうしたことの対策について、さきほどのお話しの続きをとしてお聞かせいただければと思います。

黄・打狗文史再興会社の戦略は、まず日常生活の尺度に戻るということなんですね。木工教室は、一見、生け花教室のように手軽に通えるものと思われますが、その目的は隣の古い家の修繕と非常に大きな問題につながつていきます。そこに参加した人に話をうかがうと、木工を勉強することで、昔の生活スタイルや価値、意味を勉強できたと言います。また、実際に自分の手足を動かすことで歴史的な建造物を保存すること、あるいはそれを作るのが大変なことを自分の体をもつて知ることができます。つまり、実践による歴史意識の顕在化を狙っています。その木工教室に通うメンバーの中には、数名がのちに文化資産の管理に関わる仕事に転職したと聞きました。また、この木工教室の中には一般の市民も参加しますが、一部はどこの高校へ行けばいいかわからない地元の子どもたちが集まつたケアセンターから参加した子ども達も参加しています。

した。これらのことから、このような地元に根付いた活動が地域で認識されてきたということがわかりました。すなわち、コミュニティーサービスと文化活動のコミュニティー化を同時に繋いでいく活動といえることができます。先ほど紹介した、凧をあげるイベントとか、ペインントのイベントに比べて、地元の人が望んでいることを具体的に実践して、さらに身体の体験を重視するというのが特徴です。このような特徴から私は地域の歴史に関する認識には重要な意味があると思っています。他の先生もおっしゃっていたように台湾の歴史文化を認識するためには、文献以外の様々な資料も重要であるということです。多様な観点が重要です。例えば胡先生がおっしゃっていた刺繡から地元の原住民の歴史がわかること。私がさきほど紹介した木工から、あるいは地元の古い家屋から、地元の歴史の認識のひとつになりえる。その多様な観点も重要だということがわかりました。

武知..まだいろいろお話しをお伺いしたいのですが、時間になりますので、おわりたいと思います。さきほど黄先生がおっしゃった身体で経験するということはとても大切なことだと思います。ただ単に教える、教わるということではなく、自ら体を動かし、経験して気づく、それが発見であり、文化を再発見するということになるのではないかと思います。

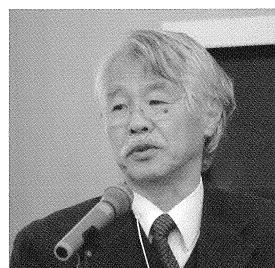


黄貞燕

竹田市宮城・城原地区における 学生による民俗調査と祭礼参加

段上 達雄（別府大学教授）

話に入る前に二つほど話をさせていただきたいのですが、ひとつは別府大学の史学文化財学科の文化財部門というのは歴史学のやり方とだいぶちがつていて、現地・現物主義なんですね。昨日話をされました飯沼先生が環境歴史学、私が民俗学、渡辺先生が保存科学、考古学の先生もいるわけですが、実習という授業があつて、そこでは必ず实物、あるいは現地にいって体験をするということをやっています。それともうひとつ、竹田市の城原地区に学生を連れて、或は学生が調査に入つたりするわけですが、竹田市というところは、人口は二万四九三三一人。これは、平成二四年の統計で、最新の統計を市が出していないので、最新だと二万四千を切っているだろうと思います。そこに民俗芸能の数が、神楽の保存団体が二二、白熊と書いて、ハグマと読むんですが、大行列の毛槍振りの民俗芸能化したのが一〇団体あります。そして、獅子舞が25団体、合わせて五七団体があります。ということは人口四〇〇人あたり、ひとつの民俗芸能をもつてているという場所なんです。ただし、高齢化過疎化、少子化が進んでいまして、城原小学校の全



校生徒数は、今年は二五名だそうです。そういう場所に学生達を連れていくつているわけです。

別府大学には、民俗学研究室というのがあるので、研究室活動といつて、学生が中心になつて主体的な活動をしていまして、今年も杵築市の行事を調査に入つております。私は車で連れていく役で、調査自体は学生が企画して、杵築の教育委員会にいる先輩と相談しながら調査を進めしていくということになります。

竹田にどういうかたちで縁ができたかというと平成二三年、竹田市と大学の連携センターというのができました。これは宿泊施設です。それができて、別府大学と竹田市とでどんなことができるのかとなつたとき、ひとつ私が考えたのは民俗学研究室の学生たちに民俗調査を提案したんですね。それともうひとつは民俗学実習というか、正式にいうと環境歴史学、文化遺産学実習というのがあるんですが、そのなかで学生たちをお祭りに連れていこうという提案をしました。その宿泊施設を使いながら、竹田市と二人三脚でなにができるんじやないかということで始めたわけですね。そういうわけで、市のほうからは全面的な協力をいただけることになつたり、学生を連れていくときにバスを出してもらつたりしています。このような地元の教育委員会の協力のもとで授業を始めたわけです。

民俗学研究室がどんなことをやつているかということを簡単に説明します。まずは地元のことを見らなければいけない。ということで、これは文化的景観の保護になるのかもしけませんが、集落の水田の灌漑を担つていて、城原井路をまずみてみようというかたちで、現地を歩いていく（写真1）。学生たちはそういう町並みであるとか、石造物とか、目に見えるものの調査をや



写真2



写真1

りながら、その地域がどんなところなのかということを調べていこんですね。民俗学研究室の学生達というのは、当然のことですが、新入生が入ってきて次々と入れ替わっていきます。こういう何年間かかけて地元と一緒になって調査をしていくということになると、メンバーが少しづつ変わっていくわけですね。それでもデータは先輩が残していくつて、後輩がそれをみて、最後はまとめる、ということをやつてきています。

調査では、公民館に市の教育委員会の人方が話者を連れてきていただけで、というよりも声をかけていただいて、そのときに来ていただぐ。午前と午後に分かれて、聞き取り調査をする（写真2）。だいたい三時間ずつですね。お話を聞くということをやる。最初は男性ばかり来ていましたよ。そこで、おばあちゃんばかり話を聞きたいということを申し上げたら、おばあちゃんばかりという年もありました。公民館にイスと机を並べて、そこに来てくださったかたからお話を聞くということをやつてきたわけです。この調査は、その地域の民俗全般を知ることで民俗誌の調査をやつたということになります。ここでは、一応昭和三五年を中心にお話をすることになります。というのは昭和三五

段上 達雄

年の頃というのは、日本ではテレビがようやく普及し始めたばかりなんですね。テレビは昭和二八年に放映が始まりまして、いわゆるモータリゼーションというか、自動車が各家にはいつてくるのも一九六〇年以降になります。そういう伝統的な生活と新しい生活のちょうど境目くらいを目安にして調査をしようということで、話者のかたにもそれを説明しまして、どんなことでこんな調査をしているのかというペーパーをお渡ししまして、昭和三五年を中心にお話を聞いていくということをしました。

民俗調査の内容としてはここにも書いてあるように、一九六〇年代の高度成長期で大きく変わつていきます。この変わつていくときをひとつ注目して、どういう変化があるのかということも聞いていきました。学生達が中心に調査してきまして、私はどちらかというと彼らを連れていく、連れて帰る役割がほとんどで、調査の主体は学生たちであつたということがいえると思います。ただ、学生たちはこういう民俗調査をやつたことがない人間ばかりです、とくに一年生は右も左もわかりません。それを三年生が中心になつて聞き取りをして、一年生に聞き取り調査のやりかたを伝えていくとということをやります。

このような調査は、教育委員会と地元の人たちとの交流のなかで調査が可能になつたといえます。宿泊はセンターの方に泊まりまして、お風呂は三キロばかり離れた温泉へいきます。食事は自炊ということで、学生たちはけつこう楽しんでいまして、センターが双城中学校の跡地にあるものですから、古い体育館がありまして、そこになにかが出る、と毎年夏に調査に入るときは夜に肝試しをやっています。そういうふうにして調査をしながら楽しんで、合宿をしている。また、

調査にいくと地元の人たちが懇親会を開いてくれまして、市長さん副市長さん、教育長、市会議員から、そういうお偉方から、教育委員会の人たちまで、集まつてくださつて、地元の人たちもいれて三〇人か四〇人くらい加わつて、わいわいいながら、自己紹介をしたり、話し合いをしたりします。そして、二〇一七年は、去年、調査の報告書の原稿をある程度まとめました。また、調査の報告会を六月三日におこないまして、地元の人たちが三〇人ぐらい集まつてくれました。そこで報告したあと、やはり懇親会がありましたが、そのときに地元の麻生敵三さんという方から、竹田にいろんな昔話や伝説があるのだが、そういうものを伝えている場所を案内しますよと。もう一回来ませんかということをいわれまして、八月に三日をかけて、麻生さんご夫婦の案内で、伝説の伝承地を見て回るということをしました。伝承地や古い家屋の見学、茅の輪作りの体験をするなど、麻生さんがとても一生懸命やつていただいて、学生たちをいろんなところに案内していただきたい上に体験学習もできたということになりました。そういう点ではこの麻生さんご夫婦に頭が下がりますし、このときには地域のほかの人たちも出てきてくれて案内に立つてくれました。

次に民俗学の実習について紹介します。ここでは、民具の実測を授業でやつています。それと民俗調査のやり方というのを写真撮影のやり方から教えています。また、民俗芸能祭礼行事、民俗技術の現地調査の結果をレポートとして提出するということになつています。このレポートの提出のための調査について、事前にみなでお祭にいこうということになりました。それが城原八幡社の秋期大祭への参加ということになります。これが始まりましたのは平成二十四年、二〇一二



写真 4

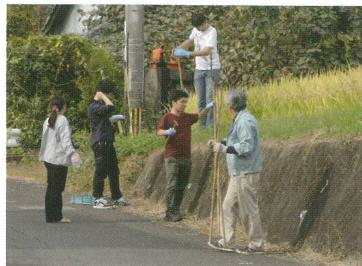


写真 3

年からなのですが、一〇月の第二週なのです。城原神楽の夜神樂を見て、次の日の朝は、獅子舞ともうひとつ、御岳流の獅子舞もみて、神事に参加します。午後からは行列に参加します。学生たちは御神輿を担いだり、太鼓を担いだり、ということを実際にやります。なぜこういうことをやるかというと、学生達のほとんどは民俗芸能をみたことがない。それとお祭りも観客としてみたことはあるけれど、自分からお祭りに参加したという経験もほとんどありません。そういう学生達に実際の民俗芸能をみせ、お祭に参加させて、体験的に祭というものの、あるいは民俗芸能というものを知つてもらおうというのが、この授業のひとつ的目的です。同時に学生たちは、お祭の準備に参加します。

例えば、夜神樂のためのたいまつ（写真3）、これを学生たちが手伝います。空き樽に灯油を入れて、火をいれて、たいまつにするのですが、これを学生が手伝って、立てていきます。夜神樂では、舞台に女子学生がひっぱりあげられます（写真4）。これは、本当は、小さな子どもがひっぱりあげられて、荒神様に抱き上げられて、ぐるぐる回ると、健康に過ごせるといわれているものなんですが、女子学生がとつつかまつてしまいまして、舞

台にあげられてしまつたという状況ですね。



写真5



写真6

祭の参加では、秋季大祭に参加するということで、午前中は獅子舞を二つ、神事にも参加して、午後からの神輿行列では太鼓担ぎや神輿担ぎをやります。城原八幡での神事のときですが、写真5は、阿鹿野獅子舞の子どもたちと学生たちがいろんな話をして大笑いをしているところです。参加した学生たちは薄緑色のスタッフジャンパーを着せてもらつて参加していました。また、かなり重たい太鼓を担がれたり（写真6）、御神輿を担いだりということをやります。

女の子も神輿を担がせてくれます（写真7）。御旅所までの神輿担ぎをやりながら、地元の人たちのお手伝いをします。三時にお旅所についたあとは、おのぼりといつて、神社に戻るまで宴会があります。実習は三年生たちが中心ですので、大人ですから、この宴会に参加しています。というよりも、向うが呼んでくれるんですね。地元の人と学生たちが話をする。この地域がどういうところなのか、あるいはお祭りがどんなものなのか、いろんな話がでてくるようです。神輿行列に初めて参加する学生たちが多いので。とても新鮮な体験であつたと感想に書いてくれます。さき



写真7

ほどもいいました休憩時間の話では、地元の人たちといろんな話をして、過疎化少子化高齢化に直接向き合うということが多いわけです。私は、このお祭や民俗芸能がどんな意味があるのかということを、細かく言いません。学生達が自分たちで、この地域にとってお祭や民俗芸能は一体なんだということを自分でみつけてもらうということで、こういう体験的な実習をおこなっていますね。そういう点で、感想文を読むと、お祭つてなんなんだろうかとか、この地域にとつて民俗芸能とはなんなんだろう、そんなことを書いてくれる学生が結構います。そういう意味で授業の成果としてうまくなっていると思います。

それと地元の人たちが非常に心待ちにしてくださっています。実は去年祭りの当日の朝に阿蘇山が爆発しまして、硫化ガスのにおいがその地域に流れてきたというので、去年は祭りの参加を当日どたばたと中止にしました。そうしましたら、結局、地元はお祭りをやったということを聞いたのですが、手伝いの学生達がこなかつたということをうかがっています。

こういうような形で、別府大学の地理学文化財学の学生をつれて、ひとつの地域で調査をし、お祭に参加するということを続けているわけです。簡単にお話しましたが、ちょうど時間になりましたので、私の話はこれでおわりにしたいと思います。

学生とともにに行う

旧真田山陸軍墓地和泉砂岩製墓石の強化処理

伊達 仁美（京都造形芸術大学教授）

京都造形芸術大学教授、伊達仁美と申します。私は、「学生とともにに行う旧真田山陸軍墓地和泉砂岩製墓石の強化処理」を報告いたします。

旧真田山陸軍墓地は大阪城から南に一キロほどの大阪市天王寺区玉造本町にあります。明治四年に設置され、陸軍墓地のなかでも最古の歴史があります。戦前には、全国に八〇カ所以上作られた陸軍墓地中でも最古の歴史を持つたものです。今でも当時に近い規模で、この

景観を残しているのは真田山陸軍墓地だけです。ここには明治一〇年一八七七年の西南戦争の戦死者から、先の大戦に至るまでの戦没将兵をお祀りされています。ここでいう先の大戦という表現は、余談ですが、一般的には、第二次世界大戦、大東亜戦争といわれているものです。日本では昭和二〇年八月一五日に終わった戦争に対して、名称はついておりません。天皇陛下や首相が



外国に行かれたときのご挨拶で先の大戦という言い方をしているのは、そのことによります。

真田山陸軍墓地には先述の通り、明治一〇年の西南戦争、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、そして先の大戦に至るまでの戦没者をお祀りしています。明治一〇年に鹿児島で起こった西南戦争の戦死者の相当数が真田山の陸軍墓地に葬られています。これは明治政府軍が戦場での負傷者や病人、戦死者をどんどん大阪に送り込み、負傷者や病人は回復せずに亡くなつたケースが多く、そのため大阪で埋葬されています。その真田山陸軍墓地にある西南戦争の墓石は七七七基あります。そしてその人たちが負傷した日が刻まれているのですが、三月一五日の田原坂の地名が多くみられます。熊本県にある地名です。越すに越されぬ田原坂といわれるよう、西南戦争の激戦地だったところです。

真田山陸軍墓地のなかでもつとも墓石数が多いのが、日清戦争のものです。日清戦争に出兵した人と同じくらいに、軍役夫と刻まれた墓石も多くあります。軍役夫とは、戦地で直接戦つた人ではなくて、物資の輸送など、後方支援の役割をした人たちです。真田山には事故死や病死などで亡くなつた軍役夫の方もたくさん葬られています。軍人だけではなく、陸軍に関係していた人も祀られていることが、この真田山陸軍墓地の特徴です。

現在の墓地の面積は四五五坪、約一万五千平方メートルですが、大阪市立真田山小学校を建てる際に土地を提供したためです。墓石を移動するに伴い、当初の間隔より狭くなつたものの、五一〇〇基以上の墓碑が並んでいます。その多くは和泉砂岩製で、その数は現在、三五二六基あります。加工しやすい柔らかい性質の和泉砂岩製墓石の現状は、本来の脆弱さに加え、経年劣

化、ならびに環境による劣化が進行中です。

本テーマである「学生とともに行う旧真田山陸軍墓地和泉砂岩製墓石の強化処理」は、公益財団法人真田山旧陸軍墓地維持会（以下、維持会）学芸員の永田綾奈さんが中心に行っている墓石の保存を京都造形芸術大学の学生が補助をするというものです。永田さん自身も本学の卒業生であり、卒業論文、修士論文ともに本墓地をテーマとして研究をしてきました。また、永田さんを含め、本学では卒業論文のテーマとして、本墓地の墓石の劣化や納骨堂の虫害など、様々な視点から取り上げる学生がいました。このように以前から真田山陸軍墓地との関りがありました。

維持会は、公益財団法人に移行するにあたり、墓地を歴史遺産として維持管理し、教育普及等での活用を行うためには、まず、劣化した墓石の保存が必要であると考えられました。それが学生とともに墓石の保存活動を行なうきっかけとなりました。

墓石の大きさや素材、敷地は階級によつて異なります。真田山で一番多いのは二等兵の墓石で五〇〇〇基ほどあります。二等兵や軍役夫の墓石は軍できつちり決められていて、一等兵、二等兵は高さが約二尺、約六〇センチの四角柱です。これが五寸角、いわゆる一五センチ角の墓石がたくさん並んでいます。そして、下士官になるともう少し大きくなつて二尺五寸になるわけで、一五センチほど大きくなり、六寸角、三センチずつ大きくなつていくというようになります。敷地の広さは、隣に大阪市立真田山小学校ができたときに狭められているのですが、一等兵、二等兵は、当時の日清戦争のころはまだ土葬でしたので一坪分ありました。

墓石の正面には死者の階級と氏名、側面には出身地、もう片一方には、亡くなられた理由、ど

ここで亡くなられた、病氣で亡くなられたかたも多いようです。先程、日清戦争までといいましたが、日露戦争でも多くの死者が出ていています。日清戦争よりたくさんの方々が出ているのですが、この頃になると敷地がなくなっていて、日露戦争は合葬墓になっています。第一次世界大戦ももちろんそうです。

そして先の大戦、便宜上、第二次世界大戦といいますが、この戦争での戦死者に対する対応では、もう合葬墓もつくることができない状況になっています。そのため、納骨堂に安置されています。納骨堂の構造は、柱がなく、骨壺を置く棚で屋根を支えているだけという簡易な作りのものです。この納骨器の中にはお骨が入っているものがほとんどなくて、出征するときの遺髪であるとか、戦死したところの石ころだとか、あるいは写真が入っているものもあります。そうしたもののが納骨堂で、八二〇〇柱がおさめられています。これも戦争末期になると、いわゆる陶器の納骨器ではなくて、ただの木箱というものでできます。納骨堂の銅製にみえる扉は、ブリキの板を緑色に塗装して、釘隠しの錆は木製です。近寄ると木製ですから、亀裂が入っています。もう戦争も末期になつて、安置もままならないという状況になりました。

先程、和泉砂岩製の墓石がどんどん劣化しているといいましたが、その原因は、長期間風雨にさらされたことによる影響です。和泉砂岩というのは、大阪府の南部から徳島県にかけて採石される砂岩です。加工がしやすく、明治時代の墓石にはたくさん使われています。加工がしやすいということは削られやすいということです。和泉砂岩製の墓石の加工には、「びしゃん」という道具が使われていて、ちょうど金槌のようなかたちですが、ここに特徴があります。これで表面

を加工していきます。削つたりするのではなく、これでトントンと衝撃を与えるながら、表面を平滑にさせていくびしやん叩きという技法で加工する方法です。その工程で受けた衝撃が原因での劣化が考えられます。それは、びしやん叩きで衝撃が加わったところを境に剥離が起こっているからです（写真1）。墓石の表面にタイル状のものを貼ったわけではなくて、これ全部がひとつ の石なんですが、表面加工のためにびしやんでトントンとやった衝撃が伝わったところできれいに剥離しています。また、少し剥離したところに水分が入り、さらに剥離が引き起こされていることがあります。人によるいたずらからの破損しているものもあります。

このような状況について、維持会の学芸員である永田氏が中心となり、劣化状態の調査をしま



写真1 劣化した墓石

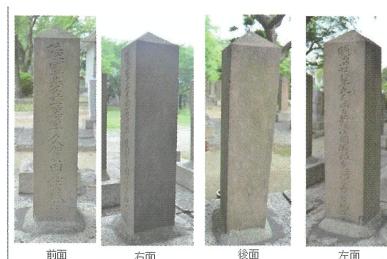


図1 A判定の墓石



図2 B判定の墓石



図3 C判定の墓石



図4 D判定の墓石

した。二〇一二年七月から九月にかけて、現在の墓石の劣化状態のランク付をしました。ABC Dの四つに分けて、Aがほぼ良好（図1）、Bは亀裂があり五センチ以内程度の表面剥離（図2）、Cは劣化をしていて、表面剥離ならびに亀裂がある状態（図3）、Dは劣化が著しく、専門機関による施工が必要なもの（図4）というランク付をしました。

良好なものの中には、四面すべて異常がないものがあります。Bが五センチ以内の表面剥離が

起こっているということで、学生やボランティアの人たちにも施工可能なものです。Cは劣化が著しく、脆弱化が進んでいるものです。これは専門機関による施工が必要なものです。



写真2 強化剤の注入

やすい原因があるのでないかと仮定しましたが、場所による影響はなさそうです。

Bが六〇パーセントあり、これを受けて、Bと判断した墓石の劣化が進行する前に処置が必要ではないかということで、学生とともに保存処置をしています。毎年五〇～七〇基を目標に作業しています。作業工程は、事前調査、洗浄、乾燥です。その後薬剤を注入し、乾燥後処置後の観察をすることをしています。

強化用の薬剤は文化財の石造品の処置に実績があるワッカーリHを使用しています。注入作業終了の目安は、一五×一五×六〇センチの墓石で二〇回から三〇回、そして三〇分以上経過して表面に液が残っている状態まで入れ続けます（写真2）。

事前調査では、まず一基ずつ調書をとります。東、西、南、北面というように区分ごとの状態を記録した後、洗浄します。薬剤を浸透しやすくするために、表面の汚れや地衣類を取り除きます。水分を拭き取つて二、三日乾燥させますが、乾燥中に汚れの付着がないよう、農業用のビニ



図5 処理前後の墓石



写真3 木の根で歪んだ墓石

ールシートで覆います。

次に薬剤注入です。乾燥した後、処理後の観察をします。図5の左側が施工前の墓石で、右側が施工後の墓石です。表面の地衣類などがきれいに取り除かれて、なおかつ強化処理がなされています。

今問題となつているのはこうやつてどんどん木が大きくなつて根が張つてきていています（写真3）。

それが墓石を持ち上げているという例が起っています。今後こういうものもどう保存していくかということも大事なのです。

この一連の作業の教育的な効果は、民俗文化財というのは、さきほど段上先生がおっしゃったように、お祭りもあれば、私が専門としている民具、有形の民俗文化財などもあるわけです。その多様性のひとつとして、この石材文化財の保存修復を学ぶという実践的な事例を今回報告させて頂きました。

第4部 大学教育から地域文化を見つめなおす

台湾の大学における

民俗学教育と民俗調査の現状

林 承緯（国立台北芸術大学准教授）

台湾から来ました、林と申します。只今から「台湾の大学における民俗学教育と民俗調査の現状」について発表いたします。

本日の発表は、台湾はなぜ民俗学がない現状なのかを少しご報告したいと思います。民俗学がない台湾は民俗学の教育をどう進めるのか、さきほどのお二人の先生のご報告のなかでも、民俗調査のことでは私は自身も日本で学位をいただいて、台湾に戻つて九年目です。毎年民俗調査を行つてるので、自分の教育現場の事例を使って、被災文化財の支援について発表したいと思います。

はじめに、台湾は、学問の話になりますと、日本時代から遡り、学問の継承と発展による検討を進めていきます。日本では一九三五年の「民間伝承の会」が民俗学の学問の出発点とよくいわれます。韓国も戦後一九四六年に「伝説学会」、韓国民俗学会の前身といわれています。中国は



日本や韓国よりも遅れていますが一九七八年全国的な民俗学会が「民俗学及び関連研究機関の設立についての提議書」を発表してから一九八三年に中国民俗学会が正式に成立しました。戦前から現在に至るまで、民俗研究の発展上、日本、中国と密接な関係にあつた台湾では、民俗学の学科が未だ確立しておらず、また台湾民俗学が存在しない。そのような現状において、台湾の各大学では、民俗学のどのような知識を教えるのか、また、伝統文化に関する教育をどのようにおこなう。これらは台湾に民俗研究の学科が成立する過程を考察するにあたり、重要な課題であります。一方で、大学のカリキュラムにおける民俗調査はどのようにおこなわれてきたのだろうかという課題もあります。

本発表では、まず、戦後から現在に至るまでの台湾における民俗学の教育の現状を紹介します。そして、私が開設した民俗調査のカリキュラムと被災文化財の復元に関する経験談を例として、大学教育の一環としておこなう民俗調査が、地域共生の実践に貢献する可能性について考えていきます。

直江広治氏、高橋晋一氏、岩本通弥氏はそれぞれ一九七六年、一九九二年、二〇〇九年に、アジアの民俗学に関する現状について研究し、台湾にも触れてはいますが、明らかにみな民俗学がまだ形にはなつていなかつたといえます。台湾の民俗学・人類学者阮昌銳氏が一九八五年にひとつの文を書きました。「こんにちの台湾民俗学界はまとまりがなく、その原因として専門機関がないことによる。そのため、従事する学者は他の機関に所属している」つまり、民俗学者は所属の場所がなく、バラバラで大学教育や博物館に所属しているといわれているのですが、それだ

けが原因ではないかもしれないとも考えます。

台湾では人類学者として民俗研究に大きな関心を持つている林美容氏も「台湾民俗学は台湾では誰も手をつけない学問である。大学には民俗学科がなく、一般大衆は民俗研究を趣味の領域で民俗現象を記録することと大差ないと考えている」つまり学問ではなく趣味と同じで祭りを見たり、地域文化に関心を持ったりする、そういう段階にあることを一九九五年に提示しました。

戦前の状況がどうだったかというと、例えば、一九一〇年『台灣舊慣調查』、『番俗舊慣調查』、『寺廟台帳』これは台湾総督府が主導でおこなった研究調査です。それから一九四〇年初頭に発行された雑誌『民俗台灣』は、民間人を主体に台湾の民俗文化を記録・研究する雑誌として世に送りました。雑誌の執筆者陣に、戦前日本の民俗学の影響を受けた者は確かにいますが、具体的に言いますと雑誌『民俗台灣』の推進者金閔丈夫氏は、人類学者として、民俗学者として、その雑誌に多数の記事を執筆しました。そのなかに中山太郎とか柳田国男の著書についての書籍紹介も見えます。つまり、台湾人や台湾在住の日本人が、『民俗台灣』により日本民俗学を認識することを可能にしています。また、台湾における民俗研究の一分野、そして民俗採集調査項目の製作を基礎として、台湾の民俗調査の項目をつくるとか、そういうような発言や方向は一九四三年くらいにありました。

では、戦後はどうなったかというと、さきほど取り上げた数名の民俗研究に関する者は、確かに戦後は『台灣風物』や『台灣風土』という雑誌をつくっているけれども、戦前と比べると、体系性はあまりなく、林衡道氏は、東北帝国大学留学の経験を持ち、柳田国男氏の著作をたくさ

ん読んでいました。林衡道氏は台湾で柳田国男のような学問作りの進め方をやれば、台湾でも民俗学が成り立つと考えていました。しかし、戦後の政治の関係で、民俗学のそういう仕事はあまり見られないと思います。戦後、台湾の民俗学の発展については、複数の論考が発表されており、なかでも直江広治氏の「中国民俗学の史料」は代表的成果の一つです。そして、人類学・民俗学者の阮昌銳氏は「こんにちの台湾民俗学界はまとまりがなく、その原因として専門機関がないことによる。このため、民俗研究に従事する学者は他の機関に所属している。よって、民俗学は他の学問に比べ、帰る家のない孤児のようである。もしも民俗学を発展させるのであれば、先ず居場所が必要である。：（中略）：我々は近い将来、専門として民俗研究に従事する機関が成立することを熱望している。民俗研究の居場所を作ることによってはじめて事を成すことができる」を指摘しました。

台湾の民俗研究と民俗学が、独自の学問に昇格するきっかけはどのようないか。また、関連の人類学、歴史学、文学と民俗学の関係は非常に曖昧です。つまり、民俗学がなくとも人類学者、歴史学者、文学者は、民俗学がやることのほとんどをカバーすることができます。今まで台湾の学術界はそういう理解を持っていた人がけつこういると思います。また日本と比べて、強力な指導者は見られません。韓国に比べ、台湾はたしかに民俗研究に興味を持つ者は多くいますが、「民俗学の父」と言われる柳田国男のような存在はなかなか出できません。

台湾の科研（科技部專題研究計畫）では、確かに民俗学のカテゴリーが存在しません。人文の下に人類学がありますが、人類学の下には民俗学が存在しません。私はずっと地域研究のカテゴ

リーオを選んできましたが、それは自分の学問であると思つていません。学会を見ると、台湾人類学と民族学はあります。宗教学、文化資産も存在しますが、民俗学会がありません。大学の教育を見てみると、実は一九四九年から台湾大学に「民俗学」の授業が有り、政治大学にもありました。六〇年代は台湾郷土文化、民間文学、台湾原住民文化、そのような近い言葉を使って民俗学教育をおこないました。一九九〇年から民俗学に近い学科が次々と成立し、例えば私の勤務先、今は台北藝術大學建築與文化資產研究所となっていますが、昔は伝統藝術研究所という専攻名で、九〇年代から民俗学に近い教育を行う学科でした。台南の大学、花蓮にもありました。しかし、三つの学科はすでに名称が変えられ、内容的にも民俗研究から離れました。

近年来、各大学が民俗学の授業を開設する動きがさらに活発となり、数十校の大学が定期的に民俗学の授業を以下のようにおこなっています。

- ・ 国立台湾大学、葉春榮「台湾民俗文化」人類学の視点
- ・ 国立台北芸術大学、林承緯「民俗学研究」、「民俗田野調査方法」
- ・ 国立台中教育大学、林茂賢「台湾民俗與文化」演劇の視点も
- ・ 国立台南大学、戴文鋒「民俗学與台灣民俗專題」歴史の視点
- ・ 国立成功大学、陳益源「民俗學專題研究」文学の視点など

このように並べてみると、「学」を用いているのは台北芸術大学と台南大学の授業、ほかには学問にまだなっていないので、民俗文化、民俗研究という言葉をつかっています。つまり台湾では民俗学は補助学科というか、なくてもなんとなくやつていける環境であると思います。

民俗調査の話になりますと、黄貞燕先生の発表のなかにもありました、文史工作者ですね、在野の郷土研究ブームは九〇年代、八〇年代から盛んにやってきて、土日は家でゆっくりテレビを観ないで外で史蹟をみたり、研究会をやつたり、そういうような流れは確かに最近も盛んに行われています。それはひとつ社会的背景です。日本も多分同じように、カメラ付きスマホが普及して、お祭のときはこのような感じです。みなフィールドワーカーです。みんなカメラをもつて調査しているんですね。お祭で神さまにカメラを向けています。

それでは、大学で民俗調査や教育をどうすればいいかというのを、私はこの一〇年民俗調査の授業をやつていてずつと考えていました。台湾で今までの民俗調査の教育は、共同調査というか、日本で言えば合宿で二〇名、三〇名がひとつの土地に行って調査するスタイルです。台湾では九〇年代までは確かににそういうやり方もありましたが、最近ではそういうスタイルは少なく、例えば、台中教育大学の林茂賢氏の民俗調査の授業では、履修生をそれぞれ地域の祭礼、行事を見に行かせて、その参加の状況により成績を評価しています。

台北芸術大学林承緯民俗学研究室のほうでは二つ進め方があって、ひとつは台北ができるだけ離れて、台湾の田舎の共同調査ですね。これは学生二〇名をつれて、澎湖島を一週間、合宿して調査しました。地域差と伝承論とをやりました。同じ台湾でも地域によって文化の感覚が違うこ



写真1 保安宮二祖力士会の民俗調査

とを学生に伝えたかったのです。もうひとつは台北保安宮という寺廟の日本の觀音講や地藏講のような信仰組織、「力士会」という祭礼組織の研究調査をおこないました（写真1）。二〇一四年の秋にその力士会の会館が火事にあって、二〇〇九年当時調査した力士会の神輿や祭事道具が全て焼けてしましました。タイミングがいいと言うとおかしいですが、ちょうど調査の二年後で、その調査報告書が再建に役立ちました。

この保安宮二祖力士会という宗教組織は一一〇年の歴史があります。日本なら一〇〇年の講はさほど古くはありませんが、台湾の歴史でみれば、一〇〇年の宗教組織はかなりの歴史をもつていると理解したらいいと思います。そのときになにを調査するかと、組織、祭礼、物質文化ですね。具体的に言うと、伝承者とそれに関するモノの聞き取りをしたり、寸法を測ったり、材質を調べたり、お祭について観察調査しました。

民俗調査と社会貢献ということになりますと、私の大学の所属は大学院だけなので、履修者は大学院生のみです。学部生がいない状況は学生がいくら揃っても一〇名くらいで多いほうです。二〇〇九年に「民俗調査と保存」の授業を台北芸大で開きました。履修生が一二名いまして、三つの班にわけ、民俗造形班、つまり物質文化ですね、それから歴史縁起班、祭祀行事班と分担して、一回目は学生さん一〇数名をつれて



写真3 保安宮二祖力士会の麒麟神輿車（2010年）



写真2 保安宮二祖力士会の古写真（約1960年）

寺廟にて力士会メンバーと面談しました。写真2は五〇年前の写真です。これをなぜお見せるかというと、ポイントは二つの、神輿車ですね。左には麒麟が三体見えますが、これは木造のものです。一〇〇年くらい歴史があると思います。

これは一〇年ほど前の巡行のときの様子です。左は台車がトラックになっていますけれど、上にのっているのが木造の麒麟神輿です（写真3）。これは三ヶ月前の復元したものの写真です。火事でこの立派な神輿は全焼したのです。火事は夜中の三時だったのですが、次の日にメンバーの人から電話があつて、どうしよう。復元とか再建とかを考えたとき、二〇〇九年にまたま作成した報告書を思い出しました。この報告書の調査は、聞き取り調査が二回、麒麟神輿車自体の調査が二回と短い調査だったのですが、報告書として具体的な成果物となっていました。ただ、この報告書が麒麟神輿車を再建するための材料となりました。今にして思うと、とても不思議な縁で結ばれていたと思います。

さきほどお話をしたように歴史を書いたもの、絵を描いたもの、聞き取り調査のリストをつくる、だいたいこの四つの調査を進

めていました。民俗造形班の方には、当時授業のときに、学生を連れて、倉庫に行って、全部のものを出してもらって、測つたり、図面を書いたり、一五〇点くらいのもの、木造のもの、絵などあります。寸法まで細かく測りました。やるなら徹底的にやらないと、ということでやりました。柄の意味と、製造の状況、いつ直したとか、そこまで調べました。歴史縁起の班は聞き取りが中心なので、四〇代、六〇代、一〇〇歳くらいの伝承者たちを五人ずつ呼んで頂いて、できるだけ、二回か三回の聞き取りをしました。私は学生にヒントを与えたり、話が逸れそうになつたりすると元に戻すというようなことをやりました。お祭りの観察調査は、行事の全体像とその準備の段階をなるべく参加して、お祭りに関する芸能団体なども聞き取り調査をしました。最後には、台北芸術大学の教室で今回の研究調査の発表会を行いました。

調査は、いつたん終わつたと思っていたのですが、火事のことで、このような立派な神輿もすべてなくなつたときに、二祖力士会の会長が相談してそのときの報告書を復元の元にできたらという話がありました。再建の計画をまず資金から考えると、日本円で二千万とか三千万円とかだということでしたが、二祖力士会のメンバーの人はそれくらいの覚悟があつて復元したいのか、あるいは仮具屋さんから普通の神輿を買ってそのまま使うのか、とかそういう話が半年くらい議論になりました。結論は、元の神輿に戻したいとなりました。つまり、資金は用意するから、と結論ということでした。神輿再建は台北保安宮が起工式を行い工事を開始しました。神輿の製作の大工さんを呼んで、神前で盛大な儀式をして、責任を匠に依頼しました。このようにやると、神輿再建に寄付している人たちにも、自分たちのお金がちゃんと神輿をつくるのに使われる



写真4 2018年に再建された麒麟神輿の本体

というような共同の理解になります。神輿の資金を集めるときには例えば、一人五〇万円まで、とか制限をつけます。そうすれば、だれが一番出したとかではなく、みんなが参加したというそういう気持ちも高まると思いました。

試作の作業では、どういう材料を使うかなど、学者の立場から入っていって、文化財の指定保存の資格の匠にアドバイスしました。台湾では全国的に御神輿が作れる匠は四、五人しかいないので、そのなかの資格をもつている技能者を今回依頼しました。神輿はご覧のように、たいしたものではないですが、台湾はそういうような一般的な神輿を作る以外の特殊な神輿を作る経験をほとんどもつていません。そうすると匠もそういう依頼を受けるかどうか悩みました。匠は現地の人々に頼んだうえに、材料も全部台湾のものを使いました。もちろんほかにもいろいろあるけれど、最初に台湾檜を選びました。材料だけで一五〇〇万円くらいかかりました。制作に一年半くらいかかる。これが三カ月前に完成しました（写真4）。完成して使う前に寺廟に持つて行って、一度神様にみてもらつて、簡単な祭祀をおこないました。麒麟神輿車の制作記録は、専門の業者を請け負っています。一年半くらいかかるので、最近の台湾では珍しい神輿を記録して次の世代に伝えられたらいいかな、と思つています。

写真5は神輿本体完成の記念写真です。ここで並んでいるメンバーは、色々な仕事をやつてい



写真5 保安宮二祖力士会麒麟神輿完成奉告祭

る人たちで、一年に一回お祭のために集まるメンバーです。みんな一〇万円台の御祝儀を出した。

最後に、民俗学の研究の話は、いくつかの要因があります。ひとつは、戦後の冷戦体制下で、欧米で学んだ学者が、台湾の学術界を独占していく、これは人類学、民族学も例外ではないですね。もうひとつは台湾に渡った国民党による在来文化の冷遇が台湾の伝承文化を研究する民俗学発展の道を塞ぐことにつながった。つまり、台湾在来の文化を学ばずに、まず、中国文化を理解すればいいかな、という空気の中で民俗学の研究が停滞していたのが原因だらうと思います。

民俗調査教育では、今回、地域に根付いた祭礼組織が火災にあい、神輿や祭具を焼失したが、その民俗調査の成果は、ものの復元製作のもとになりました。そ

ういう事例を紹介しました。具体的に言いますと、物質文化、口頭伝承、行為伝承などの観点から全面的に民俗資料を把握するとということです。これはそのときに三つの班に分けたのはそういうことを目指しています。ただ、時間が短くてそれぞれの学生さんは院生なので、自分の研究があるので、どのくらいの時間をこの授業に費やせるかを最初は少し心配しました。一番目は現地の資料も歴史的な資料も資料として使うときは、学生にとつては図書館にある歴史資料のほうが優先という感じですね。その点について、まず現地の資料を大事にして、歴史的な背景も必要だつたら

図書館の資料も使う、そういうことを授業のときにすごく強調していました。また、目の前の調査記録はいつか被災文化財の修復支援に貢献する、ということも、調査のときには一回しか出会えないと、そういう気持ちで出会って、真剣にやつたほうがいいということを、今回のことでも伝えたかったです。



写真6 被災前の麒麟神輿車の様子

最後に地域共生の実践は地域の祭と芸能を側面から支援する、それは日本ではいろいろとおこなわれています。しかし、台湾では祭礼とか芸能のほうには一般的アカデミーには直接中心まで入ることは日本より明らかに少ないことです。その点では、今回の機会をもとに、自分は常にアンテナを張つて、これからもこのグループと共に調査をやれればいいかなとか、そんなことも考えています。

写真6は五年前の火事になる前の写真です。いまはまだ完全版ではなくて、後ろの神輿が完成して、前の麒麟は、後ろよりも作りにくいようです。ボリュームもあって、材料費も高いからです。バランスが崩れたら麒麟じゃなくてほかの動物になるかもしれないですね。

以上、台湾の民俗学の現状と民俗調査教育の事例を日本のみなさんに知つてもらつて発表をおわりにさせていただきたいと思います。

第4部 大学教育から地域文化を見つめなおす

討論

話者 段上 達雄

伊達 仁美

(別府大学教授)

林 承緯

(京都造形芸術大学教授)

政岡

(国立台北芸術大学准教授)

伸洋

(東北学院大学教授)

コーディネーター
コーディネーター

政岡：この第四部「大学教育から地域文化を見つめなおす」のコーディネーターを担当させていただく東北学院大学の政岡です。最初にお断りしておきたいのは、このような地域文化の再発見という形で、実践的には今回の三つの報告もそうだったと思うのですが、大学側が教育活動の一つとして、学生たちに調査を経験させつつ、資料を収集するとか、地域文化を発見するということは、これまで数多く行われてきました。一方で、その情報共有についてはあるなりませんでした。その有効性や課題について考えるような議論もまったく行われていないのが現状です。その点で、今回のフォーラムはとても貴重な機会になつたと思います。





政岡伸洋

そもそも、今回のフォーラムの中心的課題である「地域文化の再発見」というテーマについてですが、これが近年特に注目されたのは、東日本大震災の被災地に対する支援の中できまざまな葛藤があつて、従来の学問的理解やモデルを踏まえただけでは対応しきれなかつたという経験があつたからではないかと思います。地域性、多様性、これは個別性と置き換えることも可能かと思うのですが、ここに重点を置いた文化理解の重要性が、あらためて再認識させられたといつてもよいと思います。

このセッションでの先生方のご報告は、地域的にも、調査対象も、具体的な方法も全く違つていて、表面的には共通点を見出すのはとても難しいのですが、大学教育という場で、学生と一緒に普遍性だけを求めるだけではなく、さまざまな試行錯誤、葛藤の中で、地域ごとの多様性、個別性にいかに向き合ってきたかという点で聞くと、この三つの報告がクロスしてくるのかなと思っています。

個別なもの、地域性などに注目するとき、特定のモデルや一般化された方法だけでは対応できませんので、個人技ともいべき独自の方法が求められてきます。昨日の飯沼先生のご報告などまさにこれにあたるもので、すごいなあと思つたのですが、その点からすると、ここではまずそれぞれのユニークな部分から確認していく必要があるといえます。そのためにも、最初にそれぞれの先生方の個人技の具体的な方法について、大学教育、つまり学生たちへの教育という側面

をもつた調査であるという点も注意しながら、お話を聞かせていただければと思います。

まず、段上先生のご報告ですが、今日お聞きして、段上先生とはこれまで調査のお話をしたことはないのですが、現場でやっていることは似たようなことをやっているんだなあと思いました。私自身もそうですが、実際現地に調査にいかれるまえに、考えていた方法について、学生たちに準備をさせているわけですね、それが実際現地で変更を余儀なくされる事はあったのでしょうか。

段上：調査に入る前に、竹田市の民俗芸能現場に学生の関心がすごく高まり、どういう調査をやるかということで学生が一生懸命考えてやっているということですね。そのなかで例えば、話者のもつておられる知識がどういう分野がいいかということになつていったとき、学生たちは、ではこの人からこっちの話を聞くとかということを臨機応変に対象のお年寄りのお話を合わせていろいろ工夫しているというのはあります。

政岡：そのときに例えば、今、民俗学の話になつてしまいますが、民俗調査ハンドブックなどの本とかが、一時期、批判にさらされましたよね。実は、私の研究室では使つているんですね。それは、「その通りやりなさい」というわけではなく、ひとつたたき台というような感じなんですが、先生はそのような調査の本を使うことに対する、何かお考え等はありますか。

段上：学生たちが自分たちの実践に役立てています。これは私が参考にしろと言つたことはないのですが、学生たちが代々ハンドブックを買い、それで勉強して、どんなことをきけばいいのかな、ということはある程度知つてから調査に入っています。ただ、マニュアル通りの話にはまづならないので、学生たちが自分でその時々に合わせて話を聞くということになりますよね。

政岡‥という意味では、ときにはイレギュラーのなかで学生達も試行錯誤しながら、独自の方法を見いだす、というようなイメージでよいでしょうか。

続きまして、伊達先生のご報告ですが、私は今まで保存科学の方は関わった事がないので、詳しく教えていただきたいのですが、このような和泉砂岩の、お墓の調査をしていると、すぐはげてしまふというイメージがあります。和泉砂岩の劣化に対する対応の仕方というのはテキストのようなものがあるんでしょうか。

伊達‥テキストかどうかというのは別にしまして、私たちの学問分野では実績のある強化剤による保存処理事例などが論文等で報告されていますので、それに基づいてやっています。ただし、調査に入つたときにはもつと簡単にできると思って、学生だけでなく、一般の市民のみなさんも、一緒にクリーニングをして、薬剤を注入して、ということを考えていたのですが、ちょっとどこす



段上達雄



伊達仁美

りすぎると、すぐにぼろぼろとおちてきます。そこで、こちらから、これぐらいで止めなければいけないということを伝えたことをきちつと受け止める人たちでないと難しいかなと思って、今は学生だけでやっています。

政岡…あとは和泉砂岩といつても、違いがあるんですか？崩れ方の差とか、個別性というか、そういうところは。

伊達…ありますね。

政岡…それは伊達先生が見ればわかるものですか。

伊達…いえ、わからないです。

政岡…触つてみて？

伊達…そうです。ですからさきほど申しました加工途中の工程によつて、劣化の違いがあるのかなと思つています。

段上…私、和泉砂岩の調査をしたことがあつて、結構層が厚いのですが、上の層が柔らかくて質が悪く、底のほうの層は質がいいと聞いたことがあります。そういうことを聞いていて、なるほど和泉砂岩といつても採取するする層によつて質が違うんだな、ということを思いました。

伊達…あと、和泉砂岩が今はどこにも使い道がないということで、関西空港の埋め立てにたくさん使われたということを聞いたことがありますね。

政岡…保存処理では、やはり経験も絡んでくるのですか？

伊達…学生たちも慣れた人たちはこのへんの、この力で、ことがあります、また新しい

学生がどんどん増えてくるなか、この技術の習得は難しくなっています。ただ、なんといっても五〇〇基ありますので、この点は解決していかないと困っています。



林承緯

政岡 …続きまして、林先生の方には、私たちもいろいろ試行錯誤してるけれども、最初の台湾の民俗学の現状を考えたときに、学生を連れて調査を実施するというのは相当ご苦労があつたと思うのですが、今まで話に出てきた、単に学生を現場に連れて行けばいいという話ではないですね。その準備とか、参考にされたこととか、具体的にご苦労されたこととか、そのあたりのお話をもう少し詳しくしていただけますでしょうか。

林 …いつも私は、民俗調査ハンドブックを使っています。台湾の学生は本屋さんで手に入れることがほとんどできないので、コピーしてテキストのようにして皆で読んでいますけれど、ほんどの人は日本語が読めないので、これはなんですかという質問が多い。すると私は、ハンドブックの内容を翻訳することをやりながら、ほかの民俗方法論の本も紹介し、説明しています。ただ、現在の台湾では、日本のようなハンドブックはまだない状態です。

あと、私は三年前に一回、二〇名の学生を連れて、奈良・京都・高野山の海外研修を一週間ぐらいかけてやりました。私人での引率で、学生二〇名、だれも日本語ができない。この研修では、異文化の刺激を与えたないと考えていました。そのときは九月からはじまる授業で、一二月の

半ばに一週間かけて行う日本への旅なので、九月から一月の三ヶ月は、毎週みんなでテーマを決めて、例えば京都のお守りを調べたい、そうなるとどこに行きたいのかというトレーニングをハンドブックをもとにおこないました。

政岡・実際に、最初にちょっとハンドブックをみせますよね、そうすると確実に台湾で調査したときに違和感が出てくると思うのですが、そういうときはどのようにしますか。

林・うちは大学院ですが、台湾は大学院も民俗学の教育がないので、そうすると、学生はみな素人のようなものです。そこで、日本の事例を見させて異文化のことを感じてもらい、翻つて自分たちを見て、今、何について関心をもつているのかを明らかにしていく。そういう感じで進めます。あとはうちの学生はお祭がすごく好きな民俗学のステレオタイプのような学生がたくさんいます。そうすると、できるだけ、お祭が好きな人はお祭に行かせない。趣味的な関心よりも、ほかのことの調査をしてもらい、新たな関心を呼び起こすということをずっとおこなっていますね。

政岡・学生達にとつたら、イメージが先行しているところがあると思うのですが、これは段上先生にお伺いしたかったのですが、学生たちは全く知らないと言いかながら、田舎だらうというイメージとか、何かをもつているわけですよね。そのあたり、実際調査に入らせて、お祭に参加させてもいいと思うのですが、どういう学生たちの反応があるか、どういう教育的効果があるかというところを、お教えていただけるとありがたいですが。

段上・実習以外の授業は講座ですので、なるべく映像とか画像をみせながら授業をやっているわ

けですが、彼らからすると、民俗的なさまざまな事象というのは、文化人類学的な、自分たちの生活とは違う他のところのものというふうに思っているみたいですね。このような授業をして感想を毎週書かせているのですけど、今日新しくこんなことがわかつた！とか、こんなことがあるのか！とびっくりしたという反応があるんですね。それを現地に連れて行って、祭などに参加すると、お祭というものは、地域のまとまりをつくるためのものであるということを実感してくれるようですね。そういう点では連れて行ってよかったですな、と思っています。過疎化で大変苦しんでいるけれど、お祭のときにみんな集まってきて、みんながんばっているんだよ、という話を聞いて、お祭は地域を結びつけていく役割があるということを感じてくれているようです。過疎化だ、少子化だ、高齢化だというのを頭のなかで考えているだけでなく実際行つてみて、こういうものかとわかつてくれているのは、現地に連れて行って意味のあることだと思います。

政岡…ぼくらもそうですが、学生が成長していくような感覚はありますね。このあたりまた、教材的には違うと思うのですが、伊達先生のところでも、こういう経験を積重ねていくと学生たちはどういうかたちで変わつていつたりしますか。

伊達…最近増えてきたのですが、昭和の時代、一九三一年から一九四五年までずっと戦争があつたということは、あまり知らないのですね。でも私は日本の通史という意味でみたときに、そこ の銃後の暮らしというのは興味があるので、そのときに私たちの先輩が工夫しながら作つてきたもの、使つてきたものをもっと博物館で展示して欲しいと思うのですね。今回は墓石ですが、そこから派生して、戦争展示、生活資料そういうものに興味をもつて欲しいと思います。

政岡・林先生、実際現地のありかたというの、台湾では、先生のご報告のなかでも触れられていましたが、午前中の黄先生のお話でも政治的な背景もあって、まだ歴史がみれなくて、いろんな動きの、郷土とかのとらえかたが多様ななかで、学生を連れていったときに、学生の反応はどんなふうで、その教育的効果とか、そのあたりを。

林 …大学院生にとつては、まず私が感じたのは、聞き取りのテクニックはちょっとうまくなつてないかと思いますね。マナーとか、腰を低くするとか。

台湾はひとつ問題があつて、台湾で共通の言葉は中国語というか北京語ですが、一般の民間で話されているのは台湾語と高雄語があります。若者のほとんどは、台湾語はそんなに話せないですね。つまり聞き取りのときには、むこうとコミュニケーションをとる場合、例えば日本のケースとして津軽へ行つて聞き取りした際には、津軽弁を標準語にするという必要でした。フィールドのそういう教育の体験があるから、学生さんに、地方の台湾語を勉強しないと通じないよ、という体験談は、授業でも学生にいい刺激を与えていたと思います。今日の事例では、都市祭礼と言つてもいいかなと思いますが、台北は二〇〇万人以上の大都市のなかにもそういう伝統が残つていて、祭祀の参加者は田舎のおじちゃんではなくて、会社の社長さんをやつているような人もいます。そういう方は、一〇〇年前の先祖が、伝えてきた伝統や言い伝えを大事にしています。学生さんには、こういうことを学んでもらいたいと思います。

政岡・これまでの議論は民俗調査方法論、あるいは学生の教育面のお話が中心でした。では最後に、先生方におうかがいしたいのは、このような大学教育における地域文化の再発見という行為

が、その地域社会に与える影響についてです。私も実は午前中にお話をされた東北歴史博物館の小谷先生と一緒に、博学連携というかたちで、学生を中心とした民俗調査を行う授業を担当していて、今は宮城県の内陸部の田園地帯の報告書を作ってるんですが、その前にやつた南三陸沿岸の波伝谷という集落の報告書を作ったとき、非常に印象に残ったできごとがあつたんです。報告書ができて、成果報告会を行つたのですが、その中である人が「おれはこの内容について学問的な意味はまつたくわからん。でも、学生が一生懸命やつたから、なにか大事なもんなんやろう」と言われたんですね。そのときに大学教育のなかで地域文化を発見していく行為、その地域に入つて行くこと自体が、現地の足元の文化を見つめ直す機会にもなつているのかなと感じたのですが、そのあたりどうでしようか。

段上..民俗調査報告会に地元の人が三〇人くらい集まつてくれて、その半数ほどが話者だつたということがありました。このときに、地元の人から、伝説の伝承地にまだ行つたことがないだろう、といふような話になつていつたりとか、学生達が調べた内容を聞いて、もつと調べたら、こういうやり方もあるよ、案内するよ、という形で提案があつたとすることがあり、このような住民の皆さんの関心の高まりは、僕はありがたいことだと思いました。

政岡..それはおもしろいですね、方法論が地元から提唱されるということですね。

伊達さんは、若い男の子や女の子が、昼間からお墓で一生懸命なにかをやつてゐるというのは、外からみると非常に違和感があると思うのですが、相手方に与えるインパクトというのはありますか。

伊達…あります。若い男性たちが、一生懸命お墓の掃除をしているわけですから、維持会もともとも喜んでいただき、積極的に協力してもらっています。

政岡…林さん、台湾では報告のなかにもありましたが、学生が庶民のなかに入り込んで、というのがなかなかないわけですよね。地元の人も驚くだろうし、つき合い方もわからないとか、それも含めてなにがありますか。

林…いくらお祭が好きな学生でもお祭の集団にそこまで入つていく機会がないので、そのときにお祭の団体の人たちにものすごくインパクトを与えることになりました。例えば、みなさん、お祭りは一一〇年の歴史があるのを知っているけれども、自分たちがどんなものももつていてるかはわからない状態でした。調査を進めるなかで、神輿があつて、麒麟車があつてということがわかるなか、火事があつてから、どうしていくかについて、私がまとめた報告書が利用されるようになつて、自分でもびっくりして感心しました。そして、報告書を差し上げたあと、何かおかしいことや自分の歴史と違つていることを直してもらっています。現在、完全版を一一〇周年のときに出発する準備を進めているところです。

政岡…このセッションの討論では、先生方のお話をうかがつて、「大学教育から地域文化を見つめなおす」ことの意義について考えてきました。マニュアルの利用、個別性への対応、試行錯誤を繰り返していく中での経験知の重要性、そこから生み出される新たな方法など、単に大学教育のみならず研究レベルでも議論できるような「地域文化の再発見」のための方法論の課題が見えてきたように思います。また、大学ですので、教育面での意義も考える必要があると思いますが、

先生方のお話をうかがっていると、地域文化の再発見は研究者のものだけではなく、それができる人材を育てていくことも大事で、その際の重視すべき点も見えてきたように思いました。そういう意味で、「地域文化の再発見」のためには午前中のセッションで議論された市民との協業というところもひとつの方として今後重要な役になってくると思います。私たちが教育の場で実践していることは、そのためにはどのような人材を育てていくべきかが見えてきたように思いました。フィールドワークの中での経験を通して、マニュアルにとらわれず、試行錯誤をしながら自らの方法を作り上げていくことのできる人材。そして、最後の議論にもあったように、大学教育の中で私たちが調査に入ることによって地元の人たちが自らの文化の意味を再認識し、そこでなにか新しい動きが出てくるのかなということですね。そのあたりを含めて、今回は大学教育の実践面からみえてきた地域文化の再発見の方法、そこに関わるための能力を持った人材の育成、そして地元への影響といった三つの議論のポイントを出していきましたが、そこをうまくやつしていくと昨日の基調報告のような広がり方ができたりとか、いろいろな可能性が広がってきたりするのかなとも思いました。

プロフィール

日高 真吾

国立民族学博物館人類基礎部門研究部准教授。（財）元興寺文化財研究所研究員を経て、2002年より現職。博士（文学）。民俗文化財の保存修復方法、博物館における資料保存に関する研究をおこなう。主な著書、編著書に、『女乗物—その発生経緯と装飾性』（東海大学出版会 2008年）、『博物館への挑戦—何がどこまでできたのか』（三好企画 2008年 園田直子と共に）、『記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産』（千里文化財団 2012年）、『災害と文化財—ある文化財科学者の視点から』（千里文化財団 2015年）がある。

飯沼 賢司

別府大学文学部史学・文化財学科教授。早稲田大学文学部助手大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立歴史博物館）主任研究員を経て、現職。早稲田大学大学院文学研究科日本史専攻博士課程後期単位取得満期退学。日本史（古代・中世）環境歴史学の研究をおこなう。主な著書、編著書に、『経筒が語る中世の世界』（思文閣出版 2008年）、監修／編著『図説 大分県の歴史シリーズ』4巻（郷土出版社 2997年）、『八幡神とはなにか』（角川書店 2004年）がある。

平井 京之介

国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授。ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学研究科博士課程修了、Ph.D.（社会人類学）。花王株式会社を経て、1995年より国立民族学博物館勤務。専門は社会人類学、東南アジア研究、日本研究。主な編著書に、Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia (Senri Ethnological Studies 91 2015年)、『微笑みの国の工場—タイで働くとい

うこと』(臨川書店 2013 年)、『実践としてのコミュニティー移動・国家・運動』(京都大学学術出版会 2012 年)、『村から工場へ—東南アジア女性の近代化経験』(NTT出版 2011 年) がある。

葉山 茂

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員(国立歴史民俗博物館特任助教〔併任〕)。総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻修了後、国立歴史民俗博物館外来研究員・同機関研究員・同特任助教を経て、2016 年より現職。災害常習地における人々の生業活動・生き方に関する研究、現代における自然と人のかかわりに関する研究を行なう。おもな著書・編著書に『現代日本漁業誌—海と共に生きる人々の七十年』(昭和堂 2013 年)、『東日本大震災と気仙沼の生活文化—図録と活動報告』(国立歴史民俗博物館 2013 年) がある。

胡 家瑜

台湾大学人類学前教授。博物館人類学、物質文化、台湾原住民に関する研究をおこなう。主な著書に、『針線下的繽紛－大武壠平埔衣飾與刺繡藏品圖錄』(高雄市立歴史博物館 2014 年)、『文物、造型與臺灣原住民藝術：臺大人類學博物館宮川次郎藏品圖錄』(国立台湾大学出版センター 2015 年) がある。

渡辺 智恵美

別府大学文学部史学・文化財学科教授。(財)元興寺文化財研究所、別府大学文学部准教授を経て、現職。奈良大学文学部史学科卒業。文化財の保存修復、考古学の研究をおこなう。主な著書・編著書に『保存科学入門』(分担執筆 京都造形芸術大学編 角川出版 2004 年)、文化財を探る科学の眼

プロフィール

シリーズ4『古墳・貝塚・鉄器を探る』(分担執筆 国土舎1999年)、文化財を探る科学の眼シリーズ3『青銅鏡・銅鐸・創建を探る』(分担執筆 国土舎1996年)、『荒神谷遺跡と青銅器』(分担執筆 島根県古代文化センター編 同朋舎出版1995年)がある。

天野 真志

国立歴史民俗博物館特任准教授。東北大学災害科学国際研究所助教を経て、2017年より現職。博士(文学)。紙媒体歴史資料を中心に、各地に伝来する歴史資料の保存や継承に関する研究をおこなう。主な著書、編著書に、『記憶が歴史資料になるとき』(蕃山房、2016年)、『東北文化資料叢書8 平元貞治『献芹録』』(東北大学東北文化研究室、2015年)がある。

謝 仕淵

国立台湾歴史博物館研究員、副館長。パブリック・ヒストリー、物質文化、スポーツの文化史に関する研究をおこなう。主な著書に、『「國球」誕生前記：日治時期臺灣棒球史』(国立台湾歴史博物館2013年)、『「今後凡有勤務者須帶徽章」：1905年「保正甲長徽章」の研究』(『歴史臺灣』7、2014年)がある。

川村 清志

国立歴史民俗博物館准教授。札幌大学文化学部教授をへて2012年より現職。学術博士(京都大学人間・環境学研究科、2003年取得)。専攻は文化人類学、日本民俗学。主な著書、論文に『クリスチャン女性の生活史—「琴」が歩んだ日本の近・現代』(青弓社、2011年)、『氣仙沼尾形家(大家)の年中行事—尾形栄一日記を中心に—』(川村清志・葉山茂(共編)、国立歴史民俗博物館、2017年)、「移動する身体と故郷の物語の行方—移動によつ

て見いだされた故郷と移動のなかで変容する故郷」(『歴博研究報告』199集、2016年)など。

加藤 謙一

金沢美術工芸大学美術工芸研究所学芸員。国立民族学博物館にて普及係職員、文化資源研究センター機関研究員、その後長崎歴史文化博物館教育グループ研究員を経て、2012年より現職。教育活動を基盤とした博物館機能の高度化に関する実践的研究をおこなう。主な論文に、「長崎歴史文化博物館の学校との連携事業－協力校・パートナーズプログラムがもたらした変化－」(『長崎歴史文化博物館研究紀要』5 2010年)、「ユニバーシティ・ミュージアム構想からみた金沢美術工芸大学の美術館機能の現状と将来」(『金沢美術工芸大学紀要』60 2016年)、「大学美術館による学内学習支援プログラムの提案」(『研究所報』30 金沢美術工芸大学美術工芸研究所 2017年)がある。

小谷 竜介

東北歴史博物館学芸員。牛久市史編さん室、宮城県教育庁文化財保護課を経て、現職。専門は日本民俗学。主な編著書に『鮭～秋味を待つ人々～』東北歴史博物館(2003)、『波伝谷の民俗』(政岡伸洋、鈴木卓也と共に監)東北歴史博物館(2008)、主な論文に「被災地の文化遺産を保護するための試み」日高真吾編『記憶をつなぐ』千里文化財団(2012)、「波が伝わる谷の現在」東北芸術工科大学編『東北学07』(2016)がある。

黃 貞燕

国立台北芸術大学博物館研究所助教授・図書館校史発展組組長、文化部民俗審議委員。博物館と地域社会、博物館政策、無形文化遺産学に関する

る研究をおこなう。主な著書に、「博物館、市民知與新公共領域的形成」(『想的與跳的：博物館中的教與學及其超越』王嵩山編著 国立台湾博物館 2014 年)、『日韓無形的文化遺產保護制度』(国立伝統芸術センター 2008 年)がある。

武知 邦博

枚方市立旧田中家鑄物民俗資料館学芸員。財団法人遺芳文化財団日本はきもの博物館学芸員を経て、2007 年より現職。1999 年帝塚山大学大学院人文科学研究科日本伝統文化専攻修士課程修了。専門は民俗学、特に民具学。著書に、「スリッパ」「かわとはきもの No.126」(東京都立皮革技術センター台東支所 平成 15 年)、「『日本履物新聞』に読む戦後の履物」「日本はきものの博物館・日本郷土玩具博物館 2004 年度年報」(平成 17 年)がある。

段上 達雄

別府大学文学部史学・文化財学科教授。大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員、文化庁文化財保護部伝統文化課文化財調査官を経て、現職。武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程修了。芸術学修士、専門は日本民俗学。とくに日本の祭礼行事の調査研究をおこなう。主な著書、編著に『大分県の不思議事典』新人物往来社 (2007)、『神と仮のいる風景』山川出版社 (2004)、『ものがたり日本列島に生きた人たち 9 卷』岩波書店 (2001) がある。

伊達 仁美

京都造形芸術大学歴史遺産学科教授。帝塚山大学教養学部日本文化コース卒業 (1983)。公益財団法人元興寺文化財研究所伝世品保存修復室長を経て現職。専門は、民俗文化財の保存修復ならびに活用。主な研究活動は、「『剣

鉢』の剣にみるしなり方の構造」「金属配合比から見る「剣鉢」の製作技法の研究—祭礼形態におよぼす影響について—」「伏見の酒造用具の調査」「京都市左京区久多の山村生活用具の再整備」。マダガスカル、ヨルダンで文化財の保存修復指導をおこなう。

林 承緯

国立台北芸術大学建築与文化資産研究所准教授、文化部民俗審議委員、日本民俗学会国際交流特別委員会委員。民俗学に関する研究をおこなう。主な著書に、『宗教造型與民俗傳承：日治時期在臺日人的庶民信仰世界』（芸術家出版社 2012 年）、『信仰的開花：日本祭典導覽』（遠足文化 2017 年）がある。

政岡 伸洋

東北学院大学文学部歴史学科教授。国立済州大学校客員教授、四国学院大学社会学部助教授を経て、現職。民俗学・地域社会の研究をおこなう。主な著書に、『図解雑学こんなに面白い民俗学』（八木透と共に編著 ナツメ社 2004 年）、『仙台の祭りを考えるための視点と方法』（大崎八幡宮仙台・江戸学実行委員会 2014 年）がある。



胡家瑜先生は、二〇一八年一一月二四日に永眠されました。本フォーラムでの胡先生のご講演は、これから私たちの研究の方向性について示唆に富んだものでした。ここに記して感謝申し上げます。胡先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌

(編者)

地域文化の再発見—大学・博物館の視点から

発行日／2018年12月15日

編著者／日高真吾

発行／大学共同利用機関人間文化研究機構国立民族学博物館日高真吾研究室

編集協力／特定非営利活動法人 Knit-K

地域文化の再発見—大学・博物館の視点から

第1部 災害の経験から学ぶ博物館活動

平井 京之介 水俣病の経験を伝える博物館活動

—手作り資料館のすすめ

葉山 茂 民間所在の被災資料から地域文化を読み解く

胡 家瑜 刺繡の復興から探る帰郷への道

—小林村の再建過程における博物館の役割

討論 平井京之介／葉山茂／胡家瑜／日 真吾

第2部 大学・博物館から地域文化を考える

渡辺 智恵美 地域の文化財保護における大学の役割

—複合的な文化財情報の構築と活用のために

天野 真志 歴史文化資料保全ネットワーク事業から考える地域文化研究

謝 仕淵 博物館による歴史学と地方史の再発見

—国立台灣歴史博物館を事例として

討論 渡辺智恵美／天野真志／謝仕淵／川村清志

第3部 市民とともに考える地域文化

加藤 謙一 『市民参加型』で地域を学ぶ

—その背景、課題、可能性—

小谷 竜介 多世代協業を通した地域文化の発見と継承

—特別展『工芸継承』の活動から

黄 貞燕 地域文化の再発見、地域社会の再構築

—台湾の市民が主体となる文化活動の方法と意義

討論 加藤謙一／小谷竜介／黄貞燕／武知邦博

第4部 大学教育から地域文化を見つめなおす

段上 達雄 竹田市宮城・城原地区における学生による民俗調査と祭礼参加

伊達 仁美 学生とともにを行う旧真田山陸軍墓地和泉砂岩製墓石の強化処理

林 承緯 台湾の大学における民俗学教育と民俗調査の現状

討論 段上達雄／伊達仁美／林承緯／政岡伸洋